
インフィニット・ストラatos 黒き叡智

竜華零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

【Zコード】

Z0293Z

【作者名】

竜華零

【あらすじ】

IS、それは宇宙開発を目的に開発されたマルチフォーム・スー
ツ。現行兵器を遥かに凌駕する性能を持つそれは、瞬く間に世界を
変革させた。

そしてそんな世界に生きる少女、名は「篠ノ之 楓」。

IS開発者、篠ノ之 楓の実妹にして、IS操縦者養成所「IS学
園」の女生徒、篠ノ之 篓の双子の妹。好きなものは姉、将来の夢
は宇宙進出、そんな女の子。篠ノ之姉妹の末っ子、ただいま15歳。
長姉、妹によつて黒き叡智を受けられた彼女は、はたしてこの世界

で何を見るのか
?

この物語は、「インフィニット・ストラトス」を原作とするオリジナル主人公再構成モノです。苦手な方はご注意ください。原作準拠・非アンチが基本原則、でも原作の範囲を超えたたらオリジナル展開になる可能性があります、ご注意ください。

*パロディ要素あり、そう言つた表現が苦手な方はご注意ください。

プロローグ…「お姫ひめこのお願い」（前書き）

はい、それでは……。

妹「はじめのよー」

・・・!?

プロローグ・「お姉ちゃんのお願い」

プロローグ・「お姉ちゃんのお願い」

インフィニット・ストラトス、通称『IS』。

人間が宇宙に進出し、活動することを目的に開発されたマルチフォーム・スーツ。

核である「コア」とそれを守る装甲から成る、人類を次のステージへと押し上げることを可能とする鍵。

開発者の名は、篠ノ之 束。

しかし従来の機械を遥かに凌駕する性能を知った主要国は、これを宇宙開発では無く「兵器」として利用することを考える。

結果、『IS』は現行兵器を超える「機動兵器」として世界に認知される」とになった。

しかしこの新たな「兵器」には、致命的な欠陥が2つ、存在した。一つは『IS』の起動に不可欠な「コア」の存在、これは世界に467個しか存在しない。

開発できる唯一の人間である篠ノ之 束がそれ以上の数を製作しないためで、これにより『IS』の絶対数は467機と制限されることになった。

そしてもう一つ、むしろこちらの方が致命的かつ決定的な欠陥・・・。

『HIS』は、女性にしか使用できない。

原因は不明、開発者である篠ノ之 束ですらわからなことされている。

しかし、いざれにせよ『HIS』の絶対性と欠陥は、世界を変革した。誰が望んだ変革かは別として・・・そつ。

世界は、変わったのだから。

・・・「誰か」のために、「誰か」によつて。

S.i.d.e 篠ノ之 楓

某国・某地域・某秘密ラボ・某部屋

正確な位置を教えられなくてごめんなさい、でも一応、私は潜伏中なので。

誰にともなく謝りながら、私は空中投影のディスプレイ3枚と睨めつこ中。

2枚の空中投影型のキーボードに指を踊らせつつ、1-2畳四方くら

にある部屋の中央にある「モノ」に、時折視線を投げる。そこまで、ちょっと普通では無い部屋。

「……お？」

灰色の無機質な部屋には無数の大きな機材とケーブルの束があつて、そこら中に小さなネジやボルトが散らばってる。

そして今、私と目が合ったのは・・・機械仕掛けのリスト。

ドングリのようにネジを齧る姿は、何だか可愛い。

束お姉ちゃんが作ったリストだけど、用途は良く知らない。でも束お姉ちゃんが作った物の中では比較的マトモな部類で、結構好き。
だって、可愛いし。

「何より、無害だし・・・無害なのは良いよね」

ここは、束お姉ちゃんの秘密ラボ。

場所は定期的に移動するから、何とも言えないけど・・・設備はたぶん、世界一。

かれこれ数年間、ここで束お姉ちゃんと「ユーリちゃん」と過ごしてゐる。

「……えーでーちやーんっ」

「・・・お？」

「かーえーでーちゃんつーーー！」

声が、した。

次いで、ドタドタドタ・・・と言つ誰かが駆けて来る音。それに反応して、すぐに私は身構える。

過去の経験から、「あの人」は部屋のドアから突撃していくことはわかってる。

彼我の距離7メートルを物ともせず、またに「飛びついで」来るのだ。

危ないからやめてって言つてるのに、全くもつて聞いてくれない。だから、私の方がちゃんと対応してあげないと

「だあ～い一コースだよつ、楓ちゃんつーーー！」

しかし、相手の方が上手だつた。

何故なら相手は、ドアの方ばかりに気を取られていた私の虚をついて、上から来たから。

がぱつ、と天井の一部を外して、上から飛び下りると言つ形で。

むわわわわ。

・・・人が潰される音をこぐらリミカルに変換してみても、痛みは

変わらないと言つことがわかつた。

何と言うか、押し潰された。

首と腰とか足とか、諸々の骨が軋んで
つたんだろう

潰された。

むしろ、何で折れ無か
成人女性が身体の上に落ちてくれば、それなりの音と衝撃が駆け抜
けるわけで……。

「・・・お、お姉ちゃん・・・お姉ちゃんが全力で飛びつくと私の
命が危ないと何度も願いしたら・・・」

「あつははは～、楓ちゃんは今日もラブリーだねっ、お姉ちゃんは
嬉しいよっ」

息も絶え絶えな私の言葉を軽くスルーするこの人は、私のお姉ちゃん。

天井から落ちて来たのは、20代の女性。
腰まで伸び放題になつた髪に、どことなく「不思議の国のアリス」
を思わせる青色のワンピース。

頭には何かの機械らしいウサミミカチューシャ、眠そうな目を同一
杯笑みの形に歪めて、私を抱き潰そうとしている。

名前は、篠ノ之 束。たばね

私の実の姉で、『T.S』を開発した本物の「天才」。

「天才」の名に恥じず・・・と言つた「天才」という言葉がバカら
しくなるくらいの「天才」なのだけど、何だろう、身内に対する距
離感がゼロ距離な人・・・。

「ねえねえねえ、楓ちゃん楓ちゃん、大ニユースだよ大ニユース、もう大ニユース過ぎてお姉ちゃんは楓ちゃんに抱きつかざるを得なかつたよー」

「・・・それは良いから、離してお姉ちゃん・・・」「実はねえ、いつくんがね あ、いつくんは知ってるよね？ 知ってるに決まってるよね、楓ちゃんだもんね うん、いつくんがねえ、どどーんっ、何と『IIS』を動かしちゃいました、ぱふぱふ～」

そして、人の話を聞いてくれない。

でも、まるで緊張感も何も無いような人だけど、絶賛世捨て人中。先程も言ったように、私・・・と言うか束お姉ちゃんは世間的に言うと、失踪中だから。

どうして世間から身を隠そうとしたのかとか、それは良く知らない。でも数年前のある日、何を思い立つたのか失踪した。

でも『IIS』開発者である束お姉ちゃんの失踪は、他の人にとつては無視できない大事件。

何しろ、『IIS』のコアを作れる唯一の人物の居場所を把握できなわけだから。

まあ、束お姉ちゃんがどう感じているかは、わからないけど。そしてどう言つわけか、束お姉ちゃんはあの日、私も一緒に連れ出した。

・・・何で私まで連れ出したのか、束お姉ちゃんはさっぱり教えてくれないけど。

「いつくん・・・・・・ああ、一夏さんですか、笄姉さんの幼馴染

の「

「まつわき 篠姉さんは、日本にいる私の双子の姉。
「おつむりこかが 織斑一夏さんは、その篠姉さんの小さい頃のお友達。

私も、何度か会った覚えがある。

私は小さい頃は身体が弱くて、ずっと家にいたから・・・。
・・・だから同年代で会った子は少なくて、良く覚えてる。
・・・あれ、でも一夏さんって。

「・・・男の子、だよね?」

「うんうん、不思議だよね、『IS』は女の子専用なのこねえ~」

「それは・・・うん、本当にびっくりだね・・・」

束お姉ちゃんの作った『IS』は、男性には使えない。

と言つた、唯一にして最大と言つても良い欠陥で・・・なのに、男性の一夏さんが動かした。

束お姉ちゃんとさえ、驚いている・・・みたい。

いつも『IS』をしてるから、何を考えているかはわからないけど。

「本当はお姉ちゃんが行きたいんだけど、でもでも、お姉ちゃんにはやることが一杯なのでした~!」

「はあ・・・」

「と言つわけで、そこで登場お姉ちゃんのハンジェル、楓ちゃんに見て来て貰おうと思いまーす~」

「はあ？」

ダメだ、脈絡が無さ過ぎてダメだ。
でもお姉ちゃんの笑顔は、花のエフェクトを飛ばしながら全力全開
状態。

「うつなると、私は嫌と言えないわけで……。

「いっくんはねえ、何だかどうでも良い連中が勝手にちーちゃんと
篠ちゃんのいる所に放りこんじやつたみたいなんだよねえ～
「ちーちゃん・・・千冬姉様と、篠姉さん？」

千冬姉様は、束お姉ちゃんの親友、ついでに言えば一夏さんのお姉
さん。

その人と篠姉さんがいる所・・・って、まさか、「あそ」！？

「む、無理無理無理っ！ 束お姉ちゃんと一緒に失踪してた私が突
然現れて良い場所じゃ無いでしょ！？」

「んん〜・・・のーふろぶれむつ！」

「そんなバ力な！？」

親指を上に拳を握り込んでウインク、そんな束お姉さんに私は悲
鳴を上げる。

『I.S』の「アを作れる束お姉ちゃん・・・にくつついて失踪して
た私が、突然ひょっこり「あそ」に出現したらどうなるか・・・
考えただけで恐ろしい、と言うかリアルに怖い！

突然黒服に囲まれて拉致とかされたら、何とするつー？

「あつはははは～、楓ちゃんは心配性だねえ」「いやいやいや、そういう問題じゃ・・・」

「だーいじょーぶつ、これまでお姉ちゃんが大丈夫って言って大丈夫じゃ無かったことがあるかなあ～？」

ある。
例えば、今。

「むう～、楓ちゃんお願ひつ、お姉ちゃんのお願いを聞いてほしいなあ～」

顔の前で手を重ねて「お願い」ポーズ、うう・・・そ、そんな風にされると。

ああっ、そんなウルウルした眼差しで見つめられたらあ・・・！
う、うう・・・。

「しょ、しょうが無いな、今回だけだよ・・・？」
「ほんと？」
「う、^{口グ}了解・・・」

結局、私が折れて・・・むぎゅ～っと、束お姉さんに強く抱き締められる。

豊満な胸に顔を埋められて凄く苦しいけど、でも私は引退がさない。

むしろ「やれり、お姉ちゃんの背中に手を回してみたつして。

はあ、私ってどうして東お姉ちゃんに甘いのかなあ・・・。
・・・でも、お姉ちゃんってポカポカだよね。

「あ、ちなみに筆記試験って言つのが明日あるんだって。会場はイ
スタンブール」
「な、何でイスタンブール・・・？」
「あみだくじー」
「え、ええええ・・・？」

はあ・・・東お姉ちゃんから離れて、私は傍の『HIS』の黒い装甲
に触れた。

何か、物凄く不安だけど・・・でも、お姉ちゃんが大丈夫って言つ
てるし。

それに、篠姉さんにも久しぶりに会えるし・・・。
何より・・・「学校」に、行けるんだ。

・・・それじゃ、行こうか、『黒叢』
いつか、お姉ちゃん達と宇宙を飛ぶために。

プロローグ・「お姉ちゃんのお願い」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、ではここでは「IIS」についての説明をしますねー。
お姉ちゃんの方がよく知ってるんですけど、説明とかしない人な
で。

えーと……。

IIS：
アイエス

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想
定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。まあ、ちょっと大きな
機械仕掛けの鎧みたいな物だと思って頂ければ……黄金聖 みた
いな物です。

開発当初は認められませんでしたが、ある事件以降、世界にその性
能が認められます。はい、でも宇宙開発には使用されずに軍事転用
されました。現在では核兵器に替わる「抑止兵器」とも呼ばれてい
ますね、数は500もありませんけど。

国際条約で、各国のIIS保有台数は厳格に定められています。

IISは「アーマー」と腕や脚など装甲から形成されています。シールドエ
ネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによって現行兵器（核
兵器含む）ではIISに乗ったパイロットを倒すことはできません、
チートです、流石は東お姉ちゃんです。なお、物質の量子化と言つ
トンデモ機能もついています。

最大の特徴は「自己進化」。経験を積むとIISのアーマーは学習して成
長します。成長するとより性能が上がりります、まるで人間みたいで
すよね。

篠ノ之 楓：

・・・はい、この世界で一般に知られているE-Sの情報を説明しました。

もちろん、これで全てではありませんので、後は本編での説明をお待ちください・・・と。

ふう・・・疲れた。

飴食べよ・・・って、あれ、ドロップ缶が空っぽ？

篠ノ之 束：

あつはつはつ、中身はお姉ちゃんがぜんぶ頂いたよ！

楓ちゃんの説明が長かつたからね！

篠ノ之 楓：

え、えええええ・・・。

主人公設定（物語スタート時点）（前書き）

お久しぶり、あるいは初めてまして。

この度「IS」に参入致しました、竜華零です。

最近読み始めた作品ですが、頑張って完結まで持つて行きたいと思います。

まずは本編を投稿する前に、主人公設定を公開。

今後、増えて行く可能がありますのでご注意ください。

では、どうぞ。

主人公設定（物語スタート時点）

主人公設定（物語スタート時点）

氏名：篠ノ之 楓 （しののの かえで）

誕生日：7月7日 年齢：15歳

身長：156cm 体重：43kg

スリーサイズ：B74/W56/H80

髪の色：黒 瞳の色：黒

特技：

束お姉ちゃんの暇潰しに付き合つこと。

パソコン関係（ハッキング、プログラミング、タイピング等）。

IS関係（整備・設計・解析・改良等・・・勿論、実姉の束の足下にも及ばないが）。

好きなもの：

パソコン関係、読書、機械（特にIS）弄り、飴（オレンジ味）。

苦手なもの：

「劣化束（あるいはそれに類する呼称）」と言われること、言われたらキれます。

激しい運動（幼少時に身体が弱かつたことが原因）。

略歴：

肩先まで伸びた黒髪に黒い瞳、白い肌の少女、日本人形のようと見えられることがある容姿。顔立ちは双子の姉である笄にそっくり、ただし笄よりも柔らかい印象。

笄ノ之家の3女にして末娘、束の実妹にして笄の双子の妹。実家は剣道場でもある笄ノ之神社、ただ幼少時から身体が弱かつたため、双子の姉である笄と違つて剣道は習わなかつた。現在ではそれほど

身体は弱くないが、それでも激しい運動は苦手。あまり学校に行けなかつたので、学校生活に淡い期待あり。

IS開発者である実姉、束が世間から身を隠す（つまり失踪）する際、その姉によつて拉致・誘拐される（おそらく、IS開発直後の重要人物保護プログラムから守るためと思われる）。この際、束は篠も連れて行くつもりだつたらしいが、結果として楓のみが束についていくことになる。

その後、束と共に逃亡生活・研究生活を送ることに。そして15歳になつたある日、束がいつものように持つてきた「お願い」が、彼女に新しい扉を開かせることになる・・・。

人物：

2人の姉が大好き、2人の「お願い」を聞くのが自分の生きがいだと思つてゐる。

2人の姉はそれぞれが別分野で才能を開花させてゐる（束はIS、篠は剣道など）が、身体が弱かつた頃から活動的な2人の姉が憧れだつた。そのためいづれの姉にも自分は劣ると考えており、ある種のコンプレックスを抱いてゐる。特に双子でありながら身体も丈夫で強い篠に対しては、幼少時から強い憧れにも似た感情を抱いていた。だが身体的スタイルについては、神の不公平さを呪つてゐる。たまにカツコつけで姉の頼みごとに「了解^{ロク}」と返すが、これは幼い頃に読んだ小説の影響だとか。別に本人はミリタリーが趣味なわけでは無い。

将来の夢は「姉妹で宇宙を飛ぶこと」。

束の「ISは宇宙開発のため」という言葉を、本氣で信じてる。だから軍事に使つてる今の世界には少し不満があるらしい。

他者との関係性（束に拉致される前の時点）：

対織斑 一夏・・・

実は直接の面識があまり無い、何せ幼少時はほぼ布団の中。とは言え、何度も顔を合わせたことはある。それと姉の篠が仲良くしていることや、束の親友の弟であることは知っている。個人的には、一応「お友達」カテゴリー。

対織斑 千冬・・・

長姉である束により、嫌と言つほど話を聞いた。引き合わせてもらったこともあり、回数で言えば弟の一夏よりも多い。束に連れ出されていた間も束から（過剰に）話を聞いていたので、「凄い人」と認識。個人的には、束の唯一の抑止力として尊敬している。

対篠ノ之 束・・・

上の姉、楓の全ての基となつた相手。まったく同じでは無いが一夏にとつての千冬が、楓にとつての束。大好きだが苦手、尊敬しているが何を考えているのかわからなくて怖い。連れ出されている間は、束によつて手ずからIS関係のスキルを学んだ。最も、教え方も宇宙的だつたが・・・。

対篠ノ之 篠・・・

下の姉、身体が弱かつた幼少時には憧れの的。篠のようになりたいと願つっていたし、篠も運動のできない妹の分も・・・と思っていた節がある。楓が束に連れ出されてからも、ちょくちょく連絡はつていた。でも何だか、少し距離感が・・・。

IS（専用機）：「黒叢」（楓が把握している範囲内）

国籍：無 所属：無（名目上は篠ノ乃 束の個人所有）

* 現在、国際IS委員会で対応を協議中。

楓の専用機、楓が束に連れられていた3年間で束から盗ん・・・学んだ技術を活用して基本設計した機体。そのため楓は「私の子供」！と呼んで可愛がっている。実姉、束のラボで製造、コアは束の個人所有の物を縁故で譲渡された（束曰く、妹へのプレゼント）。製造の過程で束からいろいろと調整を受け、世代としては第3世代相当の性能を持つ。

設計コンセプトは「ISを助けるためのIS（by 楓）」、しかし束は「ISを制するISだよん」と言つてゐるらしい。束が第4世代型の開発の直前に製造したいわば「過渡期」の機体と言つ側面も持つ。なお、束の「少し手伝う」の範囲がおかしいため、楓も把握していない機能がある可能性が高い。

機体色は黒、全体的に流線型で、肩先、腰部などが丸みを帯びたデザインになつてゐる。スラスターは腰部の後ろについている2基、それと背中に2基のタンクがあるが、これはナノマシン格納庫になつてゐる（用途については下記参照）。

待機形態は菱形の黒い指輪、楓は普段左手の中指に嵌めている。

ISの装備：（IS学園に提出するスペック・データより抜粋）

「黒叢」^{ブリッジ}の初期装備は2種類しか無い、と言うのも元々ISを補助・コントロールするために設計した「非戦闘用」のISだからである。そのため、楓本人は「お手伝いIS」と呼称。

「黒翼」：

単純に言つてソードビット、機体腰部に6基装備されている特殊な複合素材製の短剣型ビット。それぞれが固有のスラスターを持つており、自立した行動が可能。制御は原則として全自动、攻撃では無

く防御が主目的であり、至近距離での直接的な脅威からEVA搭乗者を守るために兵装。また、全ビットを円環状に配置することで限定範囲にシールドを展開することもできる。ただしシールドは一方向に一つしか展開できず、自動なため機械的な動きにならざるを得ない。

「黒叢」：

機体名の由来となつたシステム。

書類上は自機以外のEVAの機体内にナノマシンを侵入させ、エネルギー供給の効率化などを行う仕様。

製作者は束、「アの開発者である束だからこそ可能にした新世代装備」と言える。

使用時は「黒叢」の背中部分に搭載されたタンクの中に貯蔵されているナノマシンを、周辺に散布する。この際、散布したナノマシンの群れが影が広がるように見えることから、「黒叢」の名が付けられた。

* 装備についてのせりて詳しい設定は、本編で少しずつ紹介する予定。

主人公設定（物語スタート時点）（後書き）

I S装備元ネタ：

黒翼・・・ソーディジット（ガンダム〇〇）

黒叢・・・名前と待機状態（伝説の勇者の伝説）

今後も、パロディ装備が出るやもしれません。

その度、元ネタを公開していく予定です。

篠ノ乃 楓：

初めまして、楓です（ぺこり）。

えーと、好きなものは姉です、あとI Sです。
これから頑張ります、よろしくお願ひします。

基本目的、束お姉ちゃんの暇潰しです。

・・・あれ、何か違う気がする。

えー、今後、ここ後書きでは作中登場のI Sとかの説明をしたりする予定です。
では、また本編で会いましょう。

・・・束お姉ちゃん、髪を三つ編みにするのやめて。

篠ノ乃 束：
ええええ～～～～？？？

第1話・「そのクラス、男女比率1・30」（前書き）

前書き、妹語録「一ナ一。

妹「ねえお兄ちゃん、私、お兄ちゃんとパパ、どっちのお嫁さんになるの？」

その日、我が家で戦争が起きました。
最終的に母が「ソレスター・ビ・イング」のように武力介入、紛争は
早期に終結致しました。

妹がまだ、小学生だった頃のお話です・・・。

第1話・「そのクラス、男女比率1：30」

第1話・「そのクラス、男女比率1：30」

Side 織斑千冬おりむらちふゆ

・・・『IIS学園』、それはIIS操縦者育成のための特殊国立高等学校。運営と資金提供は日本国、しかしそこで得た技術は世界に公開する義務がある。学園内においては、いかなる国家も介入できることに表向きにはなっている。

IIS技術独占国である 正確には、「だった」 日本、そしてここIIS学園には世界中からIISを、技術を、人材を求めて多くの生徒が入学してくる。私の役目は、そんな連中を使えるように鍛えてやることだ。一応、教師だからな。

「まあ、正直・・・どうかとも思つが」

「ツツ、ツツ・・・そのIIS学園の敷地内を歩きながら、私はそう声に出す。

だがその声は誰にも届かない、と言つか、教師も生徒も入学式だからだ。

もちろん、私も先程までは入学式に出席していた、教員として。

本来ならそのまま担当する1年1組の教室に向かう所だが・・・実は

1人、迎えに行かねばならない小娘がいる。

ただの小娘なら捨てている所だが、ただの小娘では無いからそういうかい。

「・・・束の奴・・・」

ここにはいない親友　　親友、か　　を罵りながら、私は思考を続ける。

ただでさえ今年は、「世界でIISを使える唯一の男」と言つ触れ込みで私の弟が入学してきているんだ。

1年1組、私が面倒を見る。

私のたつた1人の弟、家族、織斑一夏。

それだけでも手がかかると言うのに、ここに来てまた1人、面倒な生徒が増える。

篠ノ之 楓、私の親友でIIS開発者もある束の妹。

妹と言うだけなら、すでに私のクラスには笄と言うもう1人の妹がいる。

問題は・・・今度の妹が、失踪中の束と行動を共にしていた可能性が高い、と言うことだ。

すでに政府の方からいろいろと言われている、私としても捨てておけない。

・・・個人的にも、だ。

「それを、メール一つで『よろしくサンキュー』だと? 今度会つたら殺す」

もう数年間会つてい無い上に、殺しても死なないだろうが。
まあ、奴の考えていることなど私もわからん。
メールには詳細な・・・そう、不必要なまでに詳細な情報が添付されていたが。

『飴ちゃんあげたらついてつちゃう子だから、気を付けてあげてね』
『だとか、特にいらん。

後は何だ、方向音痴で都会に慣れて無いからどうだの・・・。

「がつ・・・学校 つー!」

・・・はあ。

顔を手で覆つて、私は溜息を吐く。

一夏だけでも、大変だと言うのに・・・。

そんな私の目の前には、正門ゲートの前で奇声を上げる1人の女生徒。

せめて、次女に似てくれればと願った私が馬鹿だつた。

Side 篠ノ之 楓

何年かぶりに再会した、束お姉ちゃんの親友。それは何と、IS学園の先生だった・・・。しかも、出会い頭に出席簿で頭を殴られた。かなり、痛かったとだけ明言しておく。

「あう・・・私の脳が二つに割れるかと・・・千冬姉様、酷い・・・」

「ほう、良かつたな、これからは左右の脳で別のことが考えられるぞ・・・後、学校では織斑先生と呼べ」

「学校・・・そう、学校だ つー！ ぶぐつー？」

2撃目、しかも今度は角で・・・かなり痛い。

軽く泣きそう、あ、涙が。

「私に、同じことを2度言わせる気か・・・？」

「い、いえっ、大丈夫、静かにしまスー！」

びしつ、敬礼しもつて元気よく返事。

何年かぶりに再会した千冬姉様は、子供の頃よりもずっと厳しい人になつてた。

黒のスーツをビシッと着こなす、カッコ良い20代の女性。

名前は織斑千冬さん、束お姉ちゃんの親友さん。

子供の頃からの知り合い、今では「」「」「」の先生・・・学園、「学校」。

そう、私は学校に来てるんだ・・・・!

子供の頃は良くて保健室登校、束お姉ちゃんに拉・・・連れ出されてからは逃亡生活。

ちゃんと学校に通つのは、実はこれが初めて!-

「もひ、興奮するなつて言つのが無理・・・・・」

「・・・篠ノ之・・・・?」

「す、すみませんデス!」

再び出席簿を掲げる千冬姉様に、私は頭をガードしながら返事をする。

あ、アレは・・・アレだけはどうかお許しを・・・・・

・・・でも、学校に来れて嬉しいのは本当。

校門で興奮して叫んじゃつて、千冬姉様に叱られたけど。

束お姉ちゃんに教えて貰つた自己紹介も覚えたし、きっと大丈夫だよね。

お友達とか、できるかなあ・・・・。

「あ、あの、千・・・織斑先生、入学式に間に合わなくて」「めんなさい・・・・・

「それについては後で罰則を加える」

「あう・・・・・」

いや、だつて束お姉ちゃんがいきなり言いだしたから準備が・・・。は、初登校でいきなり罰則・・・あ、でも結構、憧れてたかも。学校の罰則って、伝説のアレかな、トイレ掃除1週間？

「・・・束は

「はい？」

「束は、どうしてる？」

私が学校の罰則について考えていると、千冬姉様が束お姉ちゃんのことを見て来た。

やっぱり親友、お姉ちゃんのことが気になるのかな。
お姉ちゃんが言つてた通り、本当はとても優しい人なのかも。

「えつと、ここに私を送り出した後、移動したと思つので・・・ど
こにいるかは。あ、でも凄く元気ですよ、千冬姉様のことも良くお
話してくれました」

「ひつ」

何故か、舌打ちされた。

あ、あれー・・・？

その後は、お喋りはせずに廊下を歩く。
でもこいつは学校に来ること自体が初めてに近い私は、周囲をキョ

口キヨ口と見回す。

だつて、何もかもが新鮮で、珍しいんだもの！

今日からここが、私の学校！

・・・っと、興奮するとまた叱られる、落ち着かなきや。

「・・・新学期早々、騒がしいな」

「え？」

不意に、立ち止まる。

そこは、「1年1組」のプレートがかけられた教室の前。
中からは、複数の声が聞こえて・・・。

「・・・大丈夫か？」

扉に手をかけた所で、千冬姉様が私に声をかける。

相変わらず厳しそうな声だけど、気のせいで無ければさつきまでは
無かつた柔らかさを感じる。

・・・束お姉ちゃんの、言つてた通りの人。

「はい、大丈夫です！」

ハツキリと答えると、少しだけ笑つてくれた気がする。

・・・初めての学校、初めてのクラス。

もちろん、凄く凄く緊張するけれど、でも。

それ以上に・・・楽しみ。

これから、どんな毎日を過ぐる事になるんだね!。

「・・・では、入るぞ」

ガララツ・・・千冬姉様が、教室の扉を開ける。

見ててね、束お姉ちゃん。

楓は、お姉ちゃんのために頑張るよ・・・!

Side 織斑 一夏

あの日、女にしか動かせないはずの『HIS』を動かしちぎった瞬間から、俺の人生は一変した。

変な黒服に『HIS』操縦者のための特殊国立高校、「HIS学園」に入学願書を押し付けられてから、選択肢も無いまま・・・ほとんど無理矢理、この学園に押し込められた。

「セシリ亞・オルコットですわ。」存知でしょうが、イギリスから派遣されて日本へ・・・

いや、「HS学園」と「藍越学園（学費の安さと就職率の高さが売りの私立高校）」の受験会場を間違えたり、勝手に置いてあった『HS』に触った俺にも悪い所はあつたのかもしないけど。けれども・・・これは罰にしては重すぎると思うんだ、神様。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。怒ってる？ 怒つてるかな？ 「ゴメンね、ゴメンね！」 でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。オルコットさんの自己紹介も終わつたからね、だからね、『お、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？』

いや、別にそこまで謝らなくても・・・と言いたくなるほどに俺の目の前でオドオドとペロペロしているのは、俺のクラスの副担任、山田真耶先生。

低い身長、だほつとした服に大きめの眼鏡、短い緑色の髪の女教師。・・・見た目的には、学生で通りそうな先生だな。

このじじじ状況を再確認、今日はHS学園の入学式で初めてのクラス、絶賛、自己紹介中。

ここまでは良くある話だ、つまり次は俺が自己紹介する番と言つだけ。

未だにペロペロ頭を下げる山田先生に「大丈夫、ちゃんとしますから」と答えて、最前列ど真ん中と言つある意味最悪の席で立ち上がる。

こりまでは良い、極めて普通だ、問題は・・・。

「織斑一夏です、えー・・・ようしくお願ひします」

問題は、クラスメイトが・・・いや、全校生徒、教員から用務員に至るまで、ほぼ全員が女だと言つことだ！

実際、俺の他のクラスメイト29名は全員、女だ。

そりや そうだよな、『IS』は女しか使えないんだから、その操縦者を養成する学校は女しかいに決まってる、おかしいのは俺だよ悪かつたな。

「えー・・・・以上です」

ガタタタンッ、と何人かの女生徒がズッコケた。
し、仕方無いだろ、他に女子相手にどんな自己紹介をしようと
あれ？

その時、俺は窓際に座る女子と目が合つた。

と言ひか、あの黒髪ボニー・テールは、確か・・・。

「・・・篇？」

そう、篠ノ之篇だ。

小学校まで一緒だった、幼馴染と言う奴で・・・「凛とした」って雰囲気がピッタリ当てはまりそうな、典型的な大和撫子。

ただし、何と言ひか目つきが鋭くて睨んでいるように見える・・・性格は、見た目通り「キツい」。

「・・・まともに自己紹介もできんのか、お前は？」
「は？・・・いつ！？」

突然、何か固い物で頭をはたかれた。

「こ、この速度、この容赦の無さ、そして声。
もしかしてと思って振り向いてみれば、そこには思った通りの人物
がいた。

「げえつ、関！？　じゃなくて・・・。

「ち、千冬ね・・・」

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

千冬姉ちふゆねえ・・・俺の実の姉が、そこにいた。

黒のスーツとタイトスカート、狼を思わせる眼差しとスラリとした
体形。

笄とは別の意味の「鋭さ」を備えた、見るからに才色兼備な・・・
と言うか、何でここに？

「あ、織斑先生、会議はもう終わられたんですか？」
「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「・・・って、先生！？」

「先生って言ったか今！？　そ、そんな話、聞いて無いぞ・・・と、

俺が抗議するよりも先に。

クラスの女子達が、黄色い声を上げた。

「キヤ ッ、本物の千冬様！ 千冬様よー。」「愛します！」 「美しすぎます！」 「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れて北九州からこの学園に来たんですよ！」「お姉様のためなら死ねます！」

・・・大人気、だった。

いや、まあ・・・仕方無いけどさ、でも当の千冬姉は「馬鹿が多い
な・・・」とか言つてるし。

それをクールと勘違いしたのか、女子達はさらにヒートアップ。
み、皆さん？ あれはポーズじゃなくて本氣で言つてるんですよ・・
・？

いや、「もつと罵つて」とか「躊躇へください」とか言つてる場合
じゃ無くてね？

「ほら、静かにしろガキ共・・・ちよつとした事情で入学式に間に
合わなかつた生徒を紹介する」

・・・あ、まだいるのか、どうせ女子だらうけど。
女の中に、男が1人、しかも3年間。
・・・いや、思つたよりキツいんだぜ・・・？

俺がそんな風にこれから先のことを思い悩んでいると、廊下から教室に入つてきて、千冬姉の隣に立つたのはやっぱり女だ。

肩のあたりまで伸びた黒髪に、シャープで綺麗な顔立ちだけキツさは感じない雰囲気。

むしろ、ほわほわと柔らかい感じ・・・制服はもちろんIIS学園、1年用の青いリボンが胸元で揺れる。

太腿まで覆う黒い靴下・・・オーバーハイって奴か？ 良く分からないけど。

・・・あれ？ でも何だかどこかで会ったような・・・？

「えーっと、篠ノ之楓です。何年か行方不明になつてましたけど、どうぞよろしく・・・はうつ！？」

すぱーんっ、自己紹介を始めた瞬間に千冬姉に頭をはたかれた。
あ、少し親近感・・・じゃなくて、篠ノ之、楓？ 楓って言えば・・・
・。
・・・・・
篠の、妹の？

ゆ、行方不明だつたつて・・・俺は慌てて、窓際の篠の方を見た。
・・・篠は、まるでそつぽを向くように窓の外を見ていた。

S.i.d.e セシリ亞・オルコット（イギリス代表候補生）

織斑千冬、元IIS日本代表にしてIISの世界大会である「モンド・グロッソ」の総合優勝及び格闘部門優勝者、わかりやすく言えば元

「世界最強」。

現役を退いた後は、IJS学園の一教師に甘んじている・・・と言え、今でも彼女の崇拜者は多い。

『ブリュンヒルデ』・・・織斑千冬は、現役引退から数年経つても、敬意をもってそう呼ばれます。

IJSのイギリス代表の候補生、つまりエリートである私も織斑千冬わたくしのことは認めざるを得ませんし、国からも「できれば仲良くするよう」と言い念められておりますわ。

「・・・であるからして、IJSの運用には・・・」

今は、山田先生がIJSの基本的に関する基本的な抗議をしていますね。

織斑千冬・・・織斑先生は、教室の後ろで腕を組んで授業の様子を見ています。

そちらももちろん、気になりますが・・・私が国から氣こじりと言われているのは、別の人間。

織斑一夏、あの織斑先生の実の弟にして「世界で唯一IJSを動かせる男」・・・。

・・・でも正直、拍子抜けですわ。

基礎の基礎の部分の再確認の授業に過ぎませんのに、彼はそれについていけていない様子なのですから。

山田先生が「どこがわからない」と聞けば、「全部わからない」と答える始末。

その上・・・。

「・・・織斑、入学前に渡した参考書は読んだか?
「古い電話帳と間違えて捨てました!」

・・・と、バカ丸出しで答えて織斑先生に殴られています。
ISは現行の兵器を凌ぐ新時代の兵器、基礎知識も訓練も無しに動かせる物ではありませんのに。

本当にあの男がISを動かしたのでしょうか、ビリーテも信じられませんわ。

所詮、男なんてそんなもの。

このヒリートの私がこんな極東の島国に来たのは、あの男の調査も1つの目的ですけど。

正直、男であると言う以外に取り立てて報告すべき点は見つかりませんわね。

大体、男がISに乗るだなどと生意気に過ぎますもの。

今は、物珍しそうで優遇されて目立つていいだけ・・・。

「はい、では2時間目は終了です。休憩時間ですよ～」

山田先生がそう言って、授業が終わりましたわ。

内容としては、代表候補生である私にはつまりませんでしたけど。

まあ、なかなかお上手な講義だったのでは無くて？

・・・本当は、男などに話しかけるなど、私のプライドが許しませんけれど。

1時間目の休み時間は、ポニー^{ヒーリー}テールの女子に先を越されて話しかけられませんでしたから、今、仕掛けることにしますわ。これも国のために、私のプライドは一時置いて、話を聞いてみることにしますわ。

「ちよっと、よひじくて？」

・・・本当は、嫌で嫌でたまりませんけど。
ああ、代表候補生も楽ではありませんわね。
私が声をかけると、その男は振り向いて・・・。

Side 篠ノ之 楓

東お姉ちゃん、私は今、凄く興奮してるよ。
学校、しかも教室でちゃんと授業を受けられる日が来るなんて。
子供の頃は病弱で寝たきり、それからは東お姉ちゃんについて行ってたから・・・。

人がたくさんいるのは少し怖いけど、それでもやつぱり楽しい。
もつ、ソワソワしちゃつてもつ、押さえきれないよね・・・!
おおつといけない、れつかも千冬姉様に叱られたし、平常心平常心・
・。

「ねえねえ、楓ちゃんって呼んでも良い?」

「おおつ!?」

「・・・? ビーブしたの~?」

「い、いえ、何でも無いです、何でも無いですよー。」

「そつか~、じゃあ良いや~」

早速、クラスの人話しかけられた。

「、これは、お友達になるチャンス・・・かも。

私に声をかけてきたのは、何だかおつとりした感じの女の子。

袖丈がやけに長い制服 ある程度の制服改造は校則で許容
を着た子で、ネズミさんの髪飾りをつけた長い髪にてても既そ
うな目が特徴的。

・・心無し、束お姉ちゃんに似てる気がする。

「あ、えつと・・・」
「あ、私? 私はねー、布仏 のぼだけ 本音ほんね だよ~」
「布仏さん、布仏さん・・・はい、覚えました」
「ありがとー、でも本音で良いよ~」
「どういたしまして、本音やん」

「おお、普通に会話ができる、できるよ……！」

「このまま、お友達になれたりして……あれ？」

「……お友達って、どうやってなるんだり？」

「でねでね、楓ちゃんはどうして入学式に来なかつたのかな、かな？」

「え、えー……道に迷つて？」

「おお～、楓ちゃんは方向音痴さんなのかな？」

「ちん・・・ああ、いや、そんなはずは……」

ただ学校と言う物に興奮してただけで、普段は……道に迷うなんて。

「……ち、ちょっとだけしか。

それに千冬姉様にも会えたし、篠姉さんにだつて……ああ、そう、
篠姉さん！

慌てて振り向くと、窓際の座席で1人、窓の外を見ている篠姉さん
を見つける。

最後に会つた時と変わらない髪型と雰囲気、私のもう1人のお姉ち
ゃん。

私がここに来たのは、束お姉ちゃんの「お願い」のせいだけ……。
でも、篠姉さんにも会いたかった。

年に2、3回くらい、電話で話すくらいしかできなかつたし、早速
声を……。

「私を知らない！？」このセシリ亞・オルコットを？ イギリスの

代表候補生にして入試主席のこの私を…？ 私の華麗な自己紹介が胸に響かなかつたと…？」

急に大きな声がして、教室が静まり返つた。

何かと思えばこのクラス唯一の男子 わ、そう言えば一夏さんとも同じクラスなんだよね、声かけなきや の前で、金髪の女の子が凄く怒つてた。

かすかにホールのかかつた長い綺麗なプラチナブロンドと、透き通つた青い瞳。

歐米人特有の肌の白さとスタイルの良い身体、全身から「私、優秀です」なオーラを放つてる女の子。

セシリ亞・オルコットって名前は知らないけど…イギリスの代表候補生なんだ。

代表候補生は読んで字の「」とく、国家のIIS代表の候補生のことだよ。

オルコットさんが、今までに一夏さんに説明してる。

「つまり私は、ヒリートなのですわ！ 泣いて頼むなら、優しくしてあげても良くてよ？」

・・・えっと、アレは学校で友達を作る時に言つ台詞なのかな？ 良し、じゃあ私も早速、えっと・・・な、泣いて頼むなら。

「何せ私、入試で唯一教官を倒したヒリート中のヒリートですから

？」

「・・・入試つてアレか？ ISを動かして戦うつてやつへ！」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 僕も倒したぞ、教官」

「は・・・？」

ざわつ・・・な、何だか教室の雰囲気が。
に、入試？ 入試・・・私は何か、束お姉ちゃんがいろいろしてた
ことしかわからないけど。
えっと、どれのことかな・・・？

「あ、貴方も・・・教官を倒したつて言つたですのー？ 入試で！」

？」

「あ、ああ・・・たぶん」

「たぶんって何ですの、たぶんって

」

あ、チャイムだ。

3時間目が始まる、オルコットさんは何か言いながら自分の座席に戻る。

「楓ちゃん、じゃあまた後でね～」

「あ、はい・・・また・・・」

そして当然、本音さんも座席に戻る。
くう、お友達になり損ねた！

まあ、でもまた後でつてことは話しかけて貰えるつてことだ・・・。

「・・・あ

ふと、窓際の座席から篠姉さんが私のことを見ていることに気が付いた。

笑顔で小さく手を振つたら、ぷいってそっぽを向かれた。

・・・あ、あれー・・・?

Side 千冬

3時間目は、ISで実際に使われる武装に関する講義・・・の前に、再来週のクラス対抗戦（もちろん、ISで、だ）のクラス代表を決めるつもりだった。

・・・が、何だこの状態は。

「納得できませんわっ！！」

どう言うわけか知らんが、オルコットが息を呑いている。

それはクラスのガキ共が私の弟・・・つまり一夏をクラス代表にしようと推薦を重ねた後のことだ。

・・・本人はやりたがっていないようだが、それはどうでも良い、

推薦された者に拒否権など無い。

オルコット曰く、男がクラス代表など恥さらし以外の何者でも無い。クラス代表はそのクラスの実力ナンバー1がなるべきで、それには代表候補生であり「専用機」持ちである自分こそが相応しい・・・と言つのが言い分だ。

まあ、「実力ナンバー1がなるべき」と言う部分には首肯してやっても良いが。

「物珍しさで男をクラス代表にするなんて・・・サークスじやありませんのよー? 大体、文化としても後進的な極東の島国で暮らさなければならぬこと自体、私にとつては耐え難い苦痛ですのに・・・!」

「イギリスだつて島国だし、大したお国自慢無いだろ」

口を滑らせおつたな、馬鹿者が。

聞き流せば良いだろ(づ)、「一夏がオルコットの祖国を「侮辱」

先に日本を「侮辱」したのはオルコットだが したことに腹を立てたオルコットが、一夏に決闘を申し込んだ。

「・・・良いぜ、四の五の言つよりわかりやすい」

そして一夏も、それを受ける・・・何だこの流れは。大体、一夏はまだ機体も無いと言つの(づ)「決闘」するつもりだ、馬鹿が。

・・・まあ、一夏には政府が「専用機」を用意するらしいから、そこは問題無いだろうが。

・・・「専用機」。

代表・代表候補生や企業に所属する人間に与えられる専用のIS。特定の個人にしか使用できない、まさに「専用機」だ。

IS学園でも、「専用機」を持っているのは数える程しかいない。このクラスで言えば、オルコットと・・・一夏、そして・・・。

「・・・」

私の視線の先には、まだ実技試験を受けていないのに入学が確定している生徒がいる。

篠ノ乃楓、後で日程は伝えるが・・・ISさえ動かせれば基本は合格だ。

第一、アレは束の下でISについて叩き込まれた馬鹿だ。

一夏も似たような状態で入試を受けたが、それは形式として受けたに過ぎない。

その意味では、無意味な通過儀礼に過ぎない、が・・・。

・・・脳裏に、束の送りつけて来たデータの内容を思い浮かべる。束は、本当に何を考えているんだろうな。

妹に個人所有の「専用機」を授けて、IS学園に送りつけてくるのだからな・・・。

はあ・・・疲れた。

今日の授業が終わって、自分に割り振られた寮の部屋に向かいながら、俺は溜息を吐く。

今日は本当に疲れた、女子にはジロジロ見られるし、変な奴・・・セシリア・オルコットだつけ？ には、突つかられるし。

しかも、来週の月曜に第3アリーナとか言つ場所で勝負しなくなつた。

勝負自体は良いとして、EISバトル（最近はそつぱん前の「スポーツ」として定着）なんてやつたこと無いし・・・大体、教科書すら専門用語ばかりでさっぱりわからない。

「・・・まあ、やるしかないな。男が一度決めたことを撤回するわけにやいかねーし」

教室でのことを思い出す、「男が女に（特にEISで）勝てるわけがない」と言わんばかりのあの雰囲気を。

クラスの女子は皆、「セシリアに頼んでハンデつけて貰つたら？」とか言う始末だ。

しかもしれは、嫌味でも何でも無く・・・当然のこととして受け止められている。

今の時代、男の立場は圧倒的に弱い、女尊男卑と言つても良いくらいに。

ISは現行兵器を鉄屑同然にした新時代の兵器、だからそれを扱える女性の立場が急上昇するのもわかる、IS（及び操縦者）の保有数が即軍事力・防衛力になる時代なんだから。

実際、ISを操縦できる可能性のある女性に対しても国も企業もこれでもかと言つくらいに優遇措置を取る、それもわかる。だけど・・・国家の軍事力になるからIS操縦者、つまり女性は偉くて男性はいらない。

・・・それだけは、何か違うと思つ。

「まあ、男と女で戦争したら男陣営は3時間で負けるだろ」
「けど

悲しい現実を口にしつつも、俺は頬をぱたつと両手で叩いた。

いけないいけない、思考がマイナスになっちゃってたな。

とにかく、この1週間で基礎だけでも・・・き、基礎・・・基礎か・

・・。

「・・・はあ、東さんも面倒な物を作つてくれたよなあ」

別に東さんが悪いわけじゃ無いけど・・・千冬姉の親友の顔を思い出す。

記憶の中にあるのは、何を考えているんだかわからない人を喰つた

ような笑顔。

・・・あの人 Gauss を開発したって言ひの、わからなくも無いけど、イマイチ実感がわかない。昔からやたらに天才だったのは覚えてるけど・・・そりだ、東さんだよ！

「 篠と・・・あと、楓か」

今日、6年ぶりに再会した幼馴染2人のことを思い出す。

・・・って言つても、篠とはガキの頃に通つてた剣道の道場で良く一緒にだつたけど、楓とはあまり会つたこと無いんだよな。確かアイツ、身体弱くて・・・今は、どうだかわからんねーけど。

と言ひながら、自己紹介の時の行方不明つて、アレ何だらうな？ 束さんは今も絶賛、失踪中だけど・・・。

小4の時に篠の家が引っ越ししてから全然連絡取つて無かつたから、今アイツらの家がどうなつているのかもわからないし・・・いやいや。

「はあ・・・今日はもう良こや、とにかく寝よつ

とにかく、疲れた・・・もう寝たい。

えっと、千冬姉が用意してくれた寮の部屋「1025室」に向かつ。部屋に入った後、俺は真っすぐにベッドに向かつた・・・。

Side 篠ノ之 篇はなしき

・・・6年ぶりに、一夏に会つた。
休み時間にほんの少しだが、話せた。
私だとすぐにわかったと言つてくれた、髪型が同じだつたからと・・・
。

「・・・良く、覚えていたものだ」

私の髪は、頭の後ろで結んでも腰もある程に長い。
それこそ、子供の頃から変えていない・・・もしかしたらと、思つ
ていたから。

一夏と会えた時、すぐに気が付いてくれるだろうかと・・・。

・・・はつー?

いやいやいや、一夏は関係無いぞ、一夏は、うん。

私は単純に、この髪型が気に入っているだけだ、それだけだ、うん・
・・・まあ、覚えていてくれて、良かつたと思わなくも無いが。
いやいや・・・軽く頭を振つて、私はリボンを解く。

制服と下着を脱いで、タオルを手に寮の部屋のシャワールームへ。

「・・・ふう」

熱い湯のシャワーを浴びると、小さく息を吐く。

ぼんやりと湯を浴びながら考えるのは・・・やはり、一夏のこと。

当たり前だが、6年前とは何もかも違つ。

記憶にあるよりずっと大人で・・・そして、男らしくなつていた。

ニュースで見た時は、本当に驚いた。

忘れるはずも見間違えるはずも無い姿がテレビに映つたのだ、驚きもする。

世界で初めて、ISを動かした男として・・・。

「・・・だが

キュッ・・・蛇口を捻つて、湯を止める。

ポタポタと髪先から垂れる零を見つめながら、私はもう一人のことを考えた。

そのもう一人とは・・・楓のこと。

この数年間、姉さん・・・「IS開発者」篠ノ乃 束と行動と共に

していただろう、双子の妹。

年に2回か3回、短い時間だが電話で話したことはある。

姉さんは、一度も話したことが無いが・・・いや、それ 자체はどうでも良い。

もつと、重要なのは・・・。

「・・・楓・・・」

・・・昔は、身体の弱かつたあの子のためにと世話を焼いたこともある。

それなりに、姉妹仲は良かつたと思ひ。

少なくとも、私と姉さんの関係よりはマシだったはずだ。
だけどあの日、姉さんが楓を連れ出して、どこかに消えて・・・それで。

・・・ボスンツ。

・・・?

今、シャワールームの外から、何か音がしたか？

「誰か、いるのか？」

シャワールームの外に声をかけながら、バスタオルを身に纏う。
・・・ああ、そう言えば今日から相室になるんだったか、元々2人
部屋だしな。

となると、外にいるのは同室になる者か。
まあ、1年間一緒に生活するんだ、それなりの関係を築いといった方が良いだろう。

「・・・」んな格好ですまないな、私は篠ノ乃箒と・・・

シャワールームの外に出て、部屋の中にいるだるう同居人に向けて挨拶する。

そして濡れた髪を払いながら顔を上げると、そこには・・・。

Side 篠ノ之 楓

放課後、私はホクホク顔で寮の廊下を歩いていた。

と言つのも、本音さんが彼女のお友達に私を紹介してくれて、その子達とも仲良くなれたから。

これつて、お友達になれたってことかな？

だとしたら嬉しいなあ、同年代の女の子のお友達なんて初めてだから。

束お姉ちゃんはお友達とかいらない人だけど、私は普通に嬉しい。明日は私の実技試験をやるつて千冬姉様が言つてたけど、EISが動かせれば良いらしいから。

えつへへー、お友達げっと！

そして同時に、購買つて所でドロップ缶もげつと！

「学校つて楽しいなあ、本当に本当に楽しいなあ」

私のだつて言う寮の部屋に戻つたら、束お姉ちゃんに秘匿通信で教えてあげないと。

まあ、メールを送り合ひだけで電話とかじゃ無いけど・・・でも、その前に。

篠姉さんに会いたいな、昼間は結局、話せなかつたし。

電話で話せなかつたこととか、近況報告とか・・・束お姉ちゃんのこととか、いろいろ。たくさん、お話しすることがあるからね。えーっと、千冬姉様によれば姉さんの部屋は「1025室」でー・。

「かりとね・・・」

口の中に早速一粒、飴を放り込む。

普段は地図に弱い私も、飴を舐めてる間は大丈夫。

糖分を摂取した脳が活性化して、断然OKな状態に・・・。

「・・・お?」

とぼとぼ歩いていると、廊下に人だかりができている場所を見つけた。

廊下のそれぞれの部屋から女生徒が顔を出して、一つの部屋を見ている。

その部屋からは、何かドタバタと言つ音が・・・かりと、飴を上下の歯の間に入れてカリカリする。

次の瞬間、激しい物音がして、いた部屋から何かが転がり出て来た。

・・・ドアが物凄い勢いで開いて、何かがまさに「転がり出で」きた。

それは反対側の壁に激突する「いってえ！？」と、唸りながら身悶えてた。

と言つが、一夏さんだった。

かりつ・・・小さくなつた飴玉を、噛み潰してから飲み込む。

「・・・あつ、もしかしてこれつて、最近の学校で流行つてる何かのゲームで

「んなわけ無いから！・・・つて、楓？」

「お久しぶりです、一夏さん。實に久しいのですが、ゲームで無いならいつたい何を・・・と言つが、篠姉さんはどこにいるか知りません？」

「・・・まさに今、その筈に殴られた所なんだが・・・

「お？」

一夏さんの指差した先には、何故か剣胴着姿の篠姉さん、手には木刀を持つてる。

もしかしてあの木刀で一夏さんを殴打したのかな、だとしたら凄く

危ないよ簞姉さん。

長い髪に鋭い目、数年ぶりに会つ私の双子の姉が、そろりいた。

「簞ね・・・」

声をかけようとしたと、簞姉さんは即座にドアを閉めた。

私を一瞥して、驚いた顔・・・それからキツい顔になつて、即座に。
・・・あ、あれ？

「・・・機嫌、悪かったのかな・・・？」

「まあ、良くては無いだらうけど」

一夏さんは、簞姉さんに何をしたのか・・・でも、今の簞姉さんの態度は、あくまで私に向けられていた気がする。

その後聞いた話だと、簞姉さんと一夏さんはこれから同じ部屋なのだとか。

あー、私知ってるよ、同棲つて言つんだよねそれ。

・・・結局。

その日は、簞姉さんと一緒に話せなかつた・・・。

第1話・「そのクラス、男女比率1・30」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、どうも、楓です。

今日は、ウチの家と家族環境について説明したいと思いまーす。 束お姉ちゃん、篠姉さんの事以外はあんまり教えてくれないので、自分で調べてみました。

篠ノ之家・・・

篠ノ之家は、神社の神主の家系です、つまり私達姉妹は巫女さんなんですね。

私と束お姉ちゃんは全然ですけど、篠姉さんはお神樂を舞つたりしてましたよ。ご近所ではお祭りとか・・・割と親しまれてた家みたいですね。あと、剣術道場もしてましたよ、篠ノ之の流派はもともと、女性のための古い剣術でして。神に捧げる舞と古武術がくつついて剣術に変わったらしいです、剣舞・・・と言うような意味で。だから私達姉妹の中では、篠姉さんだけが正統な篠ノ乃流の継承者たり得ると言うわけですね。

で、家族。

私は束お姉ちゃんと世界を巡つてましたが、篠姉さんはずっと日本に。政府の重要人物保護プログラムで両親と各地を転々としてたらしいですね。束お姉ちゃんがプログラムの実行機関に「何か」してからは、千冬姉様のいるIS学園に・・・と言つ感じだそうです。でも、何故か両親はそのまま政府の保護下に放置・・・まあ、束お姉ちゃんにも何か考えがあるんだろうけど・・・。

篠ノ之 楓：

はい、今回はIRI様であります。

次回から、学園生活がスタートですね。

えーと、私は東お姉ちゃんにいろいろと教えて。
「…」

あわせ
元・江戸

篠ノ之 束：

データは全部頂いたぜー！ ばーい、 束おねーちゃん。

篠ノ之 楓；

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

Side 織斑 一夏

入学式の翌日、つまりは俺が幼馴染の篠との同居（と言いつか、同室？）になつてから一晩。

あれ以来、篠が機嫌が直してくれない。

確かにシャワー上がりの姿を見てしまったのは俺が悪い・・・悪いのか？ むしろ幼馴染とは言え年頃の男女を同室にする学園側に問題があるんじやなかろうか。

まあ、この学園はそもそも男が通り込むことを想定して無いからな・・・。

何せ、男性用トイレも無いってんだから・・・あと、大浴場も使えない。

どこを見ても女性、女子、女・・・。

ちなみに物心ついた頃から親がおらず、千冬姉と2人暮らしだった俺は女子に夢を見る程ウブじゃない。

なので、リアルに疲れるばかりで・・・。

「・・・と言つわけで、ISは宇宙での活動を想定して設計されてるので、特殊なエネルギー・バリアで身体を包んでいて・・・」

ちなみに今は授業中、セシリ亞との決闘に向けて頑張りつゝ意氣込んで見た物の。

・・・さっぱり、わからない。

千冬姉に貰った参考書で予習した分、単語がわかる程度で・・・根本的な所が、さっぱり。

だけど他の皆はうんうん頷いてるし、理解できる様子だ。つまり、俺だけがついていけない。

窓際の幼馴染、筹を見ても・・・特段、困った様子は無い。つまり、今やつてるのはそれくらい基礎なわけで。

・・・結論、俺1人じゃどうにもならない。

「それからI-Sにも意識のような物があつて、対話・・・つまり、一緒に過ごした時間だけ、わかり合う・・・操縦者の特性を、把握しようとするわけなんですね。これがいわゆる『コア』に経験を積ませると言わることで・・・練習は裏切らないと言つことですね」「先生、それって彼氏彼女みたいな関係ですかー？」
「え、えー・・・と、そうですね。でも私は経験が無いので、わからりませんけど・・・」

彼氏彼女・・・恋人とか恋愛とか、そう言つた話になると空気が華やぐ。

と言つたか、甘くなる・・・色で言つと黄色か桃色？
一言でいえば、「女子校」的な雰囲気。

まあ、男つて俺1人だしな・・・むしろ、俺が邪魔な感じだ。

その割に、周りから物珍し気にジロジロみられるもんだから……困る。

何と言づか、いたたまれない。

「んんっ、山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

教室の後ろに立っていた千冬姉が、咳払い一つで教室の空氣を引き締める。

このあたりは流石だと思つ、おかげで助かった。

俺は小さく息を吐くと、教科書に目を戻して……。

・・・せっぱり、わからなーい。

まあ、ここに来て初めてE.Sの勉強を始めたわけだから、仕方が無い、はず。

でもセシリアとの勝負は、来週なわけで。

困り果てた俺は、もう一度、簞の方を見る。

「・・・」

一瞬だけ目が合つて・・・って、おい、目を逸らすなよ、傷付くだろ。

はあ・・・とにかく、簞に教えてくれるよう頼んでみよう。
同じ部屋だし、教えて貰う分には不自由しない・・・と、思つ。
千冬姉に頼んでも教えてくれるだろうけど、忙しいだろしちゃ……

巔原だと思われるのもアレだし。

でも筈つて、まだ機嫌直つて無い、よな？

憂鬱な気分になりながら、教室を歩く山田先生の姿を追いながら少し後ろを見る。

すると、視界の隅の座席に見た顔がいた（いや、クラスメイトは全員見た顔だが）。

筈と似た顔だが雰囲気は真逆、むしろ東さんに近い幼馴染。篠ノ之楓・・・何故か背筋を伸ばして二コ一コしながら両手で教科書を開いてる。

・・・何がそんなに楽しいんだ・・・？

「・・・はあ」

溜息を吐いて前を向いて、教科書のページを開きながら、ふと昨夜のことを思い出す。

筈に会いに来たらしい楓と、少しだけ話した。

筈自身は、どうしてか楓と会おうとしなかつたけど。

・・・後で聞いても、筈はその件については何も答えてはくれなかつた。

まあ、元々機嫌、悪かつたしな。

で、楓からは東さんが元気だと言つことを聞いた。

その人が元氣で無い所が想像できなければ、元氣だと聞いて悪い気はしない。

楓もすっかり身体も良くなつたつて言つし、良いことずくめだ。

何はともあれ健康が一番、だからな。

Side 篠ノ之 楓

はあ 、「授業」って楽しいなあ！

こう、本当に教科書に沿つて進めて行くんだね。
学校にあんまり来たことが無いから、感無量だよ。

まあ、でも・・・ぱらぱら、教科書をめくつてみる。

・・・ISを完全に「兵器」扱いしてるのは、ちょっとだけ不満。
だって、東お姉ちゃんはそんなことのためにISを作ったわけじゃ
無いもの。

「おお～、楓ちんが」機嫌だお～」

「うんっ、学校つて面白いね！」

「はわ～、え、笑顔が眩しい～」

休み時間には、お友達とお喋り。

本音さんはお友達が多い人みたいで、おかげでたくさんのお友達に
紹介して貰えた。

本音さんには感謝感激、ちなみに本人が私に声をかけてきたのは。

「生徒会長に聞いて、興味あつたからだよ～」

とのこと。

ははあ、生徒会長、私の入学資料でも見たのかな。
実技試験、まだだけど。

何でも本音さんは「生徒会」のメンバーで、しかも整備科志望なの
だと。

ちなみに、私も整備科志望。

2年生からは科が別れると言つた話で・・・本音さんはお姉さんが整
備科にいるとか。

私も東お姉ちゃんの影響で工では動かすより整備したりする方が好
きで・・・親近感が湧く。
私がそう言つた。

「じゃあ今度、かんぢやんを紹介するよ～」

「かんぢやんさん?」

「うん、4組の子。きっと仲良くなれると思つよ～」

本当に本音さんはお友達が多い、まだ学校が始まつて2日目なのに。
うーむ、この間延びした独特な喋り方が人を引き寄せるのだろうか。
・・。

私も、見習つた方が良いかな・・・?

「ええ

つ、織斑君つて専用機が貰えるんですか!?

「一年の、しかもこんな時期に！？」

その時、一夏さんの周辺から大きな声が聞こえた。
そこには千冬姉様と山田先生もいて、前者はつるわせつて、後者は
アワアワしながら一夏さんに話しかけてる。

「・・・で、だ。本来なら専用ISは国か企業に所属する人間しか
与えられないが、お前は状況が状況なので、データ収集を目的とし
て専用機が用意されることになった。理解できたか？」
「な、なんとなく・・・」

専用機、専用IS。

読んで字の如く、個人に与えられる専用のISのこと。

ISはニアの数（467個）しか作れないから、つまりはどう頑張
っても世界で467人しかISを持ってない。

東お姉ちゃんは、467個目を作つてからは国にも企業にも提供し
なくなつたから・・・。

世間的にはいろいろ言われてるけど、個人的には飽きただけだと思
う。

「あ、あの、先生。篠ノ之さん達って、篠ノ之博士の関係者なんで
しょうか・・・？」

「ああ、2人ともアイツの妹だ」

おおつと、いきなり個人情報漏洩・・・いや、別に隠していないけど。

束お姉ちゃんは、工の「アが作れる唯一の人間。

そして、今も失踪中（今や私にも居場所がわからない）。

でもいろいろ言われるかと思つたけど、思つたほど私、何も聞かれなかつたな・・・。

「す、すごい、このクラス。有名人の身内だらけじゃん！？」

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？ やっぱり天才！？」

「篠ノ之さん達も天才だつたりする！？ 今度工の操縦教えてよ！」

そして、にわかに活氣づく1年1組。

篠姉さんと、あと私の所にもたくさんの女生徒がやってくる。

おお、こんなにたくさんの人には圉まれると・・・緊張する。

子供の頃も束お姉ちゃんと一緒にいた時期も、人に圉まれた経験がないから。

でも、束お姉ちゃんは本当に人気者なんだね。

それは嬉しい、だから私は話せる範囲で束お姉ちゃんのことを・・・。

「あの人は関係無い！！」

耳元で叫ばれたかと錯覚するよつた、大きな声。

声の主は、篠姉さん。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じや無い。教えられるよつな」とは何も無い

「」

静まり返る教室、篠姉さんは足早に歩き出して……どうしてか一旦、私の方へ。

お、お・・・?

何か話しかけられるのかと思えば、私の目の前を通り過ぎてそのまま廊下へ。

篠姉さんに押しのけられるような形で、私に寄ってきていた生徒が私がから離れる。

・・・?

「ね、姉さ・・・」

声をかけようとしても、にべも無く教室の扉が閉められる。

うつ・・・昨日もだけど、今日も篠姉さんと話せないかも・・・。
と言つた篠姉さん、授業だよー・・・?

「……ほり、不満そつにするなガキ共、授業だ授業」

後には、千冬姉様の手を打つ音が、虚しく響く・・・。
と言つた、不満つて何?
不満そつにする箇所、どこにあつたかな?

Side セシリ亞・オルコット（イギリス代表候補生）

男が、生意氣にも専用機！

物珍しさデータほしさでの提供と言つことらしいですが、それにしても不愉快ですわね。

専用機持ちと言つ意味で、あんな男と私が同格に置かれたと言つことなのですもの・・・。

・・・まあ、良いですわ。

専用機持ちにも、格の違いがあることを教えて差し上げますわ。

それに同じ条件で戦つた方がフェア・・・そして嫌でも実力の違いを思い知るでしょうから。

男が女に勝てるなんて、あり得ないのだと言つことを。

「安心しましたわ、まさか訓練機で対戦するとは思つていなかつたでしようけど？」

授業が終わつた頃を見計らつて、あの男に声をかける。
織斑一夏、不愉快にも世界中が注目していると言う男に。

「私も専用機持ちですから？ 訓練機を相手にするのもフェアではありませんからね」

「へー・・・・」

「馬鹿にしてますの?」

「いや、すげーとは思つけど・・・どうすげーのかがわからないだけで」

それを一般的に、馬鹿にしていると言つのではなくて!?

・・・ふう、いけませんわ、庶民、それも男に感情を乱すなんて私らしくも無い。

ま・・・男ですから、知らないのも無理はありませんわね。

専用機は、極端に言えば世界人口60億の中で選ばれた467名にしか与えられない稀少な機体。

代表候補生の中でも、専用機を与えるのは私を含めてほんの一握り。

すなわち、Hリート中のHリートにしか与えられない特権。女性優遇のこの時代、専用機持ちはある意味で国家首脳よりも強い権限を持っていますのよ?

それを、こんな男などに・・・本当に氣に入りませんわ。

「・・・そう言えれば貴女、篠ノ之博士の妹さんなんですってね?」

どう言つわけかこの男・・・織斑一夏の傍にいる篠ノ之等と言つ少女に、声をかける。

入学時に見た名簿と自己紹介の時にもしゃと思つていましたが、先程の休憩時間の騒動で言質を取れましたもの。

何しろ、日本人の名前の特徴とか、まだ良くわかりませんの。

とにかく、この篠ノ之箒と言つ少女はあの稀代の大天才、篠ノ之東博士の妹。

ISの開発者にして世界唯一のニア製造者、各国が血眼になつて探している、あの篠ノ之博士の。

ISの保有数が軍事力の大きさに直結する現在、篠ノ之博士を味方に引き入れた国家が霸権を握るのは自明。だからこそ、その妹である篠ノ之箒はイギリスの人間として放置できない・・・。

「妹と言つだけだ」

「・・・ま、まあ、どちらにしてもこのクラスの代表に相応しいのは私、セシリ亞・オルコットであることをお忘れなく」

とりあえず言いたいことは言いましたし、こんな男の近くからはとつと離れるが吉ですね。
・・・べ、別に篠ノ之箒の田つきに気圧されたわけではありませんでしてよ?

そこの所、誤解無きよつこ。

・・・後で、もう一人の妹さんの方に声をかけましょつ。
篠ノ之箒よりは、とつつきやすそうでしたもの。
・・・いえ、別に篠ノ之箒が怖いとかそつまつわけではなくてですね・・・。
とにかく、誤解無きよつこ!

Side 篠ノ之 篇

昼休みになると、一夏は私を昼食に誘つてきた。

私は良いと言うのに、無理矢理・・・他のクラスメイトも誘おうとした所を見るに、今日の休み時間での一件以来クラスで浮いていた私をフォローしてくれようとしたのだと思う。

好意は嬉しいが・・・クラスの女子は私では無くて一夏と食事に行きたかっただけだと思う。

だから良いと言つたのに、一夏は私の手を離してくれなかつた。結果、恥ずかしさの余りに、その・・・古武術で一夏を床に投げてしまつた。

それを見たクラスの女子は散つてしまつて・・・一夏は溜息を吐いていた。

わ、悪いことをしてしまつたか、呆れられてしまつたろうか・・・？

「良し筈、飯を食いに行くぞ」

「い、いや、私は良いと・・・」

「黙つてついてこい」

「・・・む」

そして最終的には、一夏と2人きりで食堂で昼食を取ることになつた。

いや、別に2人きりになるのを狙つたわけでは無くて……そう、これは一夏が無理矢理、故に私は悪く無い。

「良いか？頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？
幕だからしてるんだぞ？ 幼馴染で同門なんだからな」
「べ、別に……頼んで無いだろ」

幼馴染で、同門だから。

一夏はそう言つた。

私の家は、剣道の道場をやつしていく……子供の頃、一夏とそこで一緒にだつた。

男子にイジめられていた私を、助けてくれたりとか……まあ、いろいろあつた。
・・・懐かしい、な。

楽しかつた、毎日がドキドキして……本当に。

・・・姉たばねさんが、IISなんか作るまでは。

そのせいで、一夏とも、父さんや母さん、それに楓……離れ離れに、一家離散だ。

私の幼少時代は、そこで終わったんだから。

「やつこやわあ

「・・・なんだ」

いけない、せつかく一夏が昼食に誘つてくれたのに。

私は慌てて定食の味噌汁に口をつける。

「HSのこと教えてくれないか？　このままじゃ来週の勝負で何もできないまま終わっちゃう」

かつ・・・と、身体が熱くなるのを感じた。
一夏が私に、HSのことを教えてほしいと頼んできた。
だけど私は。

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

違う、こんなことが言いたいわけじゃないのに。

・・・自分が嫌いになりそうで、ほうれん草のおひたしを箸でつつく。

「頼むよ、篠、なあ・・・」「ねえ、キミ」・・・へ？　俺ですか？
「キミって噂の子でしょ？　代表候補生と試合するって本当？」

「・・・？」

その時、先輩　　リボンの色からして、3年生　　が1人、話

しかけて来た。

名前も知らない、たぶん、一夏も知らない。

良く分からぬが、一夏の隣の椅子に団々しく座つて・・・な、何なんだ？

「キミのてせ、HS稼働時間いくつくらい？」

「え？ エーっと、20分くらい？」

「それじゃあ無理よ、稼働時間＝上達・強さだもの」

HSの稼働時間は、操縦者の熟練度に比例するのは確かだ。

昔でいえば戦闘機乗りの飛行時間、それはHSでも変わらない。

代表候補生クラスになれば、300時間は最低でもHSの稼働訓練を受けているだろうな。

「……で、さ？ 私が教えてあげようか、HSの『ト』
「……！」

突然、その先輩がまるでか、一夏に身体を擦り寄せるようにそんなりとを言った。

さつきとは別の意味で、身体が熱くなる。

一夏自身は特に何も感じていないような顔をしているが、私は気が気じや無い。

「結構です。私が教えることになっていますので」
「あ、教えてくれるの？」
「あれ？ でも貴女1年生でしょう？ 私の方が上手く教えられる
と思うよ？」

先輩の言葉に、たじろぎをやうになる。

確かに、1年生が教えるよりも3年生が教える方が良いと考えるのが普通だ。

それに私自身、そこまでE-Sに乗った経験があるわけじゃない。少なくとも、代表候補生クラスには及ばない。

だけど、このままだと一夏がとられる。

せっかく、一夏と話ができるのに・・・何か、何か無いか。

私が3年生よりもE-Sについて詳しいと、わかる何か・・・。

「・・・私は」

・・・どれだけ考へても、1つしか無かつた。

でもそれは、とても身勝手で・・・本当に、嫌で。

だけどそれしか思いつけない自分が、とてつもなく・・・。

「私は、篠ノ之束の妹ですから」

さつき、クラスであれ程「関係無い」と啖呵を切つておきながら。都合の良い時だけ、姉さんの名前を出す。

「篠ノ之束・・・え、ええ！？」

「・・・ですから、結構です」

「そ、そう・・・それなら、仕方無いわね」

先輩が、私の言葉に・・・姉さんの名前にたじろいで、去つて行く。その背中を見つめながら、私はどうしようも無く嫌な気分になつていた。

「何だ・・・教えてくれるのか?」

「やう言つている」

一夏の言葉に叩きつけるようにやう返して、私は再び味噌汁を啜つた。

・・・一夏の顔を、見れなかつたから。

Side 一夏

放課後、筈に剣道場に来いと言われた。

いや、俺はエスのことを・・・と言おつとしたら、「一度、腕が鈍つていなか見たい」と返された。

その後は「見てやる」の一点張りだったもんと、俺は了承するしか無かつた。

千冬姉と言い筈と言い、俺の周りには強情な女しかいない。そう言つ運命なのかもしれない、やれやれだ。

「行くぞ」

「ああ」

放課後、剣道の道着やらタオルやらを取りに一旦、寮の部屋に戻つた。

・・・まあ、つまりは同じ部屋なのだけれども。

やつぱりこれ、問題あるよなあ・・・。

籌だつて嫌だらうし、早く個室を用意してくれない物か・・・。

いや、本当は個室が用意できるまでは自宅通いの予定だつたんだよ。でも家にいると日本政府とか各国大使館とか研究所から、「生体を調べさせてほしい」って人が押し掛けてくるんだよ、誰が頷くか馬鹿。

いくら「世界初の男性IS操縦者」だからって、人を実験材料みたいに言うなよ。

・・・で、千冬姉によつて無理矢理、筹の部屋に押し込まれたわけだ。

普通、女の子いれるだろ・・・妹の楓とか、でもそつ言つたら。

「姉妹や血縁者を同じ部屋にしてはならない」

・・・と書つ規則を示されて、そつですかーと呟き下がりざるを得なかつた俺である。

ああ、そうだ楓と言えば・・・。

「・・・なあ、篠」

「なんだ」

「楓とは話したのか?」

「・・・」

「・・・おーい」

「・・・・・」

・・・無視ですか、そうですか。

束さんのこともさうだけど、篠は楓のことが会話に上ると黙つちまうんだよな。

篠と2人、寮の廊下を歩きながら腕を組んで考える。
えーっと、確か束さんがEISを作った小4の頃に転校してからのことを、俺は良く知らないんだよな。

日本政府の重要人物保護プログラム・・・だけ? で、いろんな場所を転々としていたことしか。

だから中3の時、新聞で篠が剣道で全国優勝した記事を見た時は驚いたぜ。

・・・いや、今はその話は良いな。

しかしアレだ、親に捨てられて千冬姉と2人暮らしだった俺に言わせると、姉妹仲が良くないくつて言うのは気になるんだよな。
どうにか、話だけでもさせられない物か・・・。

「なあ、ほう・・・き?」

「・・・・」

その時、篠が立ち止まつた。

表情は強張つていて、その視線を追うと・・・そこには。

何人かの生徒に囲まれた、楓の姿があつた。

何してんだ、アイツ・・・?

Side 楓

・・・どうしよう、束お姉ちゃん。

今日も、篠姉さんとちゃんとお話できなかつたよ・・・!
数年ぶりの再会だから、もう少ししゃべ、何かあると思つてたんだけ
ど。

「束お姉ちゃんだったら、有無を言わさず抱きつこて来るのに・・・

」

そんなことをブツブツと呟きながら、寮の自分の部屋から篠姉さんの部屋に向かつ。

まあ、良く考えてみれば篠姉さんは束お姉ちゃんと違つてスキンシップとか好きじゃ無かつたしね。
むしろ束お姉ちゃんが過剰だと思つ。

あれ？ じゃあ篠姉さんの反応が常識のある普通の行動なのかな・・・

・?

それはそれとして今田さん、篠姉さんとつかれたとお話ししないこと・・・。

東お姉ちゃんから、篠姉さんここにいらっしゃるとも頼まれてゐるし。何より、私が篠姉さんとこうこうお話ししたいし。

「あ、あのナージャない？」

「ホント、噂になつてゐる子？」

「・・・お~」

途中、寮の廊下で何人かの生徒に鉢合わせた。

私と色の違つリボンをつけてるから、上級生だね。
2年生か3年生かは、ちょっと自信が持てないけど。

「ねえねえ、ちょっと良い？」

「あ、はい、何でしょう？」

「貴女、篠ノ之博士の妹さんって本当？」

「えーっと・・・あ、はい、そうです

尊とみなすの何のじゅうひりせんぱりだけど、東お姉ちゃんの妹って意味な
らその通り。

隠す意味も無いし、と言つて調べれば一発だしね。

学校つて尊が広まるの早いって聞いてたけど、本当なんだね。

ちょっと感激、生で見れるなんて。

私が頷くと、先輩方は黄色い声を上げる。
おおう、ちょっと耳に来た。

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？」

「やっぱり天才？ 頼んだら会わせてくれたりする？」

「と言うか、貴女も当然工系に詳しいのよね？」

矢継ぎ早の質問、どれもこれも答えにくい物ばかり。
まず、東お姉ちゃんがどんな人かって言われても困る。

私のお姉ちゃんで・・・そりゃあ天才なんだけど、でも私からしても変な人だし。

会いたいとか言われても、私も居場所知らないし。
と言つたが、私もだけど東お姉ちゃん、出てきたら捕まるんじや無いかな。

この間なんて、どこの国の戦闘機に撃墜されそうになつてたし。

で、最後のは・・・私が東お姉ちゃんに及ばないのは私が一番良く知つてるし。

私が知つてることなんて、基本的には教科書に全部書いてるし。

・・・それ以外で、何を聞きたいのかさっぱりわからない。
うーん、でもちゃんと答えないといと・・・。

「・・・何をしていろんですか？」

その時、聞き覚えのある声がした。
顔を上げると、そこにいた。

「・・・篠姉さん」

剣道の道具らしい荷物を持つた篠姉さんと、一夏さんがいた。
一夏さんはのほほんとしてたけど、篠姉さんの目が凄く険しい。

「篠つて・・・あ、もう一人の方じや無い？ あと、男の子だ・・・」

「ホント？ ねえ、貴女も篠ノ之博士の妹さん・・・」

「妹と言つだけですが、何か？」

「あ、いや・・・」

ギロリ、そんな擬音が聞こえて来そなぐらーの目つきで先輩方を睨みつける篠姉さん。

隣で、一夏さんが溜息を吐いてる。

篠姉さんの剣呑な雰囲気に呑まれたのかどうなのか、先輩方はそそくせと去つて行つた。

「あ、えと、篠ね・・・」

「・・・」

スタ、スタ、スタ・・・ 篠姉さんは私の横をあっさり通り過ぎて行つた。

・・・ま、またお話できなかつた。

「あー、うん。元気出せよ楓」

「一夏わん・・・」

軽く落ち込んでいると、一夏さんがポンッと肩を叩いて慰めてくれた。

「俺達これから剣道場の方に行くんだけど、一緒に行くか?」

「あー・・・でも私、先生に呼ばれてまして。その前に篠姉さんとお話したかったのに・・・」

「そ、そつか・・・ま、まあ、たぶん篠も照れてるだから、すぐには話せるようになるつて、な?」

「はこ・・・」

照れてる・・・照れてるのかなあ・・・?
まあ、もう少し頑張ってみようと思ひ。
それに・・・今の、たぶん・・・。

第3アリーナ、来週の月曜日には一夏とオルコットが対戦することになる場所だ。
とは言え今日は、別の目的で「」を使用をせてもいい。
その目的とは、篠ノ之楓の実技試験だ。

本来ならあり得ない処置だが、政府の意向で許可が下りた。
おそらく、「篠ノ之束の妹」を掌中に収める好機だと思つてているの
だろう。

。 篠と楓、あの双子を入学させて何を企んでいるのかは知らんが・・・
。 だが下手な手出しができないことも、わかっている。

「束が黙っているはずも無いからな・・・」

「・・・? 何か言いましたか?」

「ああ、いや、何でも無い」

・・・アレの姉、篠ノ之篠がIIS学園に入ったのは、他に束が納得
できる場所が無かつたからだ。
政府や委員会による度重なる詰問と転居、それによつてアレが受け
た精神的な苦痛は相当な物だつたろう。
そしてあるルートからそれを知つた束は・・・。

篠ノ之簣の獲得に關係しようとした企業・組織を、1日で全て壊滅させた。

それも一滴の血も流さず、死者も出さず……ただ、物理的に壊滅させた。

その方法は、誰にもわからない。

それで失われたデータと機材は、金額にすると兆を軽く超える。もちろん、ドル換算でな。

・・・私がいるIIS学園だけが、確保できてしまふ安全な場所だつた。

「・・・山田先生、準備は？」
「あ、大丈夫です」

アリーナの中央に、1機のIISがいる。

それに乗っているのは山田先生で、彼女は元々入試の教官だつた。加えて言えば日本の代表候補生だつたわけだが・・・それは良いな。

乗っている機体は『ラファール・リヴァイブ』・・・フランス製のIISだ。

ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼が特徴的で、量産型IISの中では世界第3位のシェアを誇る機体、操縦のしやすさと汎用性の高さが売りの第2世代IIS。

「専用機が相手だと、ちょっとキツいかもですけどね

「冗談を、山田先生なら専用機持ちのガキに負けはしませんよ」

実際、山田先生は強い。

私だって油断すれば負ける・・・まあ、ここ数年はエスに乗つていい私が言うのも、おこがましいが。

その山田先生がこれから模擬戦・・・試験をするのは、篠ノ之楓とその専用機。

スペックや機体特性などは束の送りつけたデータで見ているし、口アも束所有の登録済の物。

書類申請上は、「試験機」として篠ノ之楓に「貸与」と書いた形になっている。

国籍をどこにするか、一夏の専用機と合わせて国際間で話し合われているが・・・。

・・・下手なことをすると束に制裁されかねないから、話し合いは進んでいないのが実情だが。

「お待たせしましたつ」

「遅い！ 5分前行動が基本だと教えなかつたか！」

「す、すみません！..」

指定した時間の少し前に、受験者・・・つまり、篠ノ之楓がやつて來た。

そのまま私達の前に来て、背筋を伸ばして立つ。

心無し、緊張しているように見える。

・・・当たり前だが、2人の姉のどちらとも違う反応だな。

「これよつ試験を行ひ。基本的にはエリを動かせねば良いが……」
一応、こちらの山田先生と模擬戦をして貰ひ

「よろしくお願ひしますね」

「は、はいっ、お願ひします！」

物凄い勢いで頭を下げる……その後、山田先生とペロペロ合ひ
て止まらなくなつたが。

まあ・・・とにかく、見せて貰おうか。

「では、エリを起動しろ……お前の姉には許可を取つてある、安
心してやると良い」

「・・・はー」

私の言葉に、篠ノ之楓は左手の中指に嵌めていた黒い指輪を撫でた。
それが、待機状態らしい。

専用機として「最適化」したエリは、量子化して形態を変える。
基本はアクセサリーの形になる……ああ言ひ、指輪とかにな。

「・・・おいで、『黒竜』」

小さな眩き、同時に操縦者の身体が光の粒子に包まれる。

現れるのは、インフィート・ストラトス……。それは……。

S-side 篠ノ之 束たばね

んー・・・騒だなあ、楓ちゃんもいなくなっちゃったしなー。引っ越しもとりあえず終わったし、篠ちゃんや楓ちゃんやこいつくんにちょっかい出しあうな所も全部潰しちゃつたしなー。

ちーちゃんが怒るから、死亡者ゼロ。え、どうせったかって……。あ、覚えて無い。いやーじちゃん、どーでも。

「楓ちゃんは今頃、とっくのとっくにあそこへひきこむなー、いいなあ、篠ちゃんといつぱりお話をきいてるんだうなー」

篠ちゃんはお姉ちゃんに冷たいって言つたが、嫌つてるからね。何せ、電話もかかつてきただことも無いし、かけても無視だしね。

その時、束さんの携帯電話から「ジジドファ ザーのテーマが鳴り響くー。

「、」の着信音は・・・ちーちゃん！

束さんはもつ、それはそれは俊敏に携帯電話を取ったね！

「もすもす終口^{すなおひ}ー、束さんだよーんつー！」

そして、出た瞬間に切られた、ぷちっと。

あーん、待つて待つて、ちーちゃん待つて！

そう念じたら、再びゴシ ファーザーのテーマ、ちーちゃん愛して

るう

「やふー、」の世一の天才、束・・・いやいや、切らないで切らな
いで・・・」

その後、ちーちゃんに5分くらい怒られた。

うふふ、ちーちゃんだけだよ、私を怒れるの。

他の人なら、明日には一文無しになってるんだから。

「それでそれで、何かなちーちゃん・・・え？ 何だアレはって、何
の話？」

はあ、はあはあ～、なるほど、楓ちゃんのID見たんだ？
ああ、うん、まあ、アレは確かに半分くらい私が作ったんだけどね。
基本設計は楓ちゃんだよ、私はお姉ちゃんだから、ちょちょ～っと

手伝つただけで。

「アレはねえ、そつだねえ、何と言つか……うん、他のHISとは
コンセプトがね、違うんだよ」

何と言つても、後から生まれる機とセットのつもつていろいろし
たからさあ。

アレ単体だと、いろいろと変なことになるんだよね、うん。
まあ、天才の束さんが、弟子で助手で可愛い末の妹な楓ちゃんのた
めに作つたからね、他のとは千味くらいい違つよね。

「ああ、『白式』？ モチロン大丈夫……」

クルツ、と座つてた椅子を反対側に回して、「それ」を見上げる。
そこには・・・「白」がある。

束さんがいつくんのために丹精込めて作つてあげたEISが・・・。

「来週の月曜日には、ちやんと届けてあげるからね、ちーちゃん

」

束さんにお願いができるのは、この世で4人だけなんだかい。
うーん、サービス精神旺盛だね、流石は天才の束さんだねつ。

第2話：「クラス代表決定戦・前編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、どうにか学生生活も軌道に乗つて来た・・・と思つ、楓です。

そもそも学生生活って何をすれば良いのかさっぱりだけど、とりあえずお友達を作る所から初めて見ました。

今日は、この世界でのISの運用に関する国際的な取り決めなどについて説明させて貰いますね。束お姉ちゃんはバラまくばかりで後は放置だから・・・。

ある事件を境に、ISは現行兵器を上回る機動兵器としてデビュー、各国はこの新たな脅威の扱いについて話し合うことになります。まあ、束お姉ちゃんが日本人だったんで、基本的に世界中から日本が叩かれていたようです。

長いようで短い話し合いの後に締結されたのが「アラスカ条約」。

アラスカ条約：

正式名称は「IS運用協定」、通称「IS条約」。467のISコアを主要国に「平等に」分配することや技術・情報開示、関連製品取引の規制などが取り決められています。軍事転用の「禁止」も盛り込まれますけど、誰も守つません。IS学園の設置についてもここで明記されています。各国のIS保有数や動向を監視する機関としては国際IS委員会がありますけど、これも結局は主要国のクラブです。

モンド・グロッソ：

主要21カ国・地域が参加するISの対戦の世界大会。各部門の優

勝者は「ヴァルキリー」、総合優勝者は「ブリュンヒルデ」と呼ばれて称えられます。千冬姉様はどちらも持っています、凄いですね！」。

篠ノ之 楓：

・・・とまあ、こんな感じです。

その他、いろいろ細かい規定とかありますけど・・・ほとんどあって無いような規定ですし、そもそもEHSはブラックボックスが大きいので。

・・・もしかしたら、束お姉ちゃんが面倒がつて適当に組んだシステムかもしれないし。

篠ノ之 束：

むふ？ そんなこといつの間にか、いつだ〜

篠ノ之 楓：

あばばば・・・つ

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（前書き）

もしかしたら、楓VS山田先生な展開を期待しておられた方。
残念、まだ引っ張ります（申し訳ありません）。
では、どうぞ。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

Side 織斑 一夏

入学式のあつた次の週の、月曜日。

つまりは、俺とセシリ亞の対戦の日だ。
ただし、大きな問題が2つある。

「なあ、箒……」
「……」
「……目を逸らすなよ」

1つは、箒が俺に剣道の稽古しかしてくれなかつたことだ。
いや、もちろんありがたい……試合の感覚を取り戻すのも大事だ
つてのはわかる。

何しろ中学時代は家計を助けようと それでも生活費の9割は
千冬姉が出してたけど 3年間、アルバイト生活で剣道なんて
して無かつたからな。

だけど問題はこの1週間、剣道しかしなかつたことだ。

個人的に教科書を読んだり山田先生のレクチャーを受けたりはした
物の、それ以外はさっぱり。

楓を頼つてみたこともあるが、「筹姉さんに教えて貰つ約束をしたでしょ」と突っぱねられた。

おかげで毎日毎日放課後3時間、みっちり筹と剣道の日々だった。

「し、仕方が無いだろ？お前のISだつてまだ来てないんだから」「いや、それでも基礎とか知識とか、いろいろあつただろ……？」

「そもそも一つ、当日だと叫つのに俺のISがまだ来ていない。そう、まだ来ていない。」

「大事なことだから、2回言つた。」

一応、千冬姉に呼ばれた通り、第3アリーナのAピットに来たんだけど……。

「お、織斑君織斑君織斑君ッ！」

不意に、3回も呼ばれた。

顔を上げれば、転びそうな足取りでこちらに駆けて来る山田先生。千冬姉は歩いてるのに、どうして走つてゐる山田先生と並んでこっちに来れるんだろう。

「山田先生……と、千冬ねつて、痛あつ！？」

「学校では織斑先生と呼べと叫つてゐる。いい加減に学習しろ、さもなければ死ね」

出席簿で俺を殴るのは、もちろん千冬姉。

実の姉からの温かい言葉に、俺は涙が出そうだった。

俺の周りの女性は、どうしてこんな・・・それとも、女尊男卑の時代の影響か？

いや、時代のせいにするのは良く無いな、うん。

「そ、それでですね、来ました、織斑君の専用IS-1・ピットに搬入しています！」

「織斑、さつやと準備をしる・・・アリーナの使用時間は限られています。ぶつけ本番でモノにしろ」

「男子たる者、この程度の障害は軽く乗り越えて見せる、一夏」

山田先生、千冬姉、篠がそれぞれ俺を激励してくれる・・・激励、だよな？

でも俺、何をしたら良いのかさっぱりわからないんだが。

ブシュッ・・・空気の抜けるような音と共に、ピットへ出る扉が開く。

山田先生に背中を押されて、たらを踏みながら中へ。

そこにいたのは、『白い騎士』だった。

真っ白な、純白の、飾り気のない無骨な鎧。

それが第一印象、装甲の一部が開いていなければ、乗り物だとは気付かなかつたかもしぬ。

真っ白なそれは、まるで俺を待つてゐるかのように膝をついていた。これが、俺の。

「・・・これが？」

「はい、織斑君の専用機・・・『白式』ですー。」

白い式と書いて、『白式』。

どうしてだらう・・・このIISがまるで、ずっと俺を待つてたみたいに感じるのは。

これが、俺の・・・と、1歩近付いたその時、誰かが『白式』の陰から出て来た。
それは・・・。

「どうも、篠姉さん、一夏さん

「・・・楓ー?」

あ、篠とハモつた。

そこにいたのは、篠と同じ顔の女子だった。

髪は篠と違つて短く、表情も厳しさよりも緩さが目立つ。

ミニーのスカートとオーバーハイの靴下の間の肌色が、眩しい。

・・・って言つた、気のせいで無ければ、篠が楓の名前を呼ぶのを初めて聞いた気がする。
そのせいなのかどうなのか、楓は篠を見ると嬉しそうにこつこつと微笑んだ。

「背中を預けるように、ああそつだ、座る感じで良い。後は勝手にシステムが最適化してくれる」

「あ、ああ・・・」

千冬姉様の言葉に従つて、一夏さんが『白式』に乗る。

カシュウ・・・渴いた音がして、一夏さんの身体がEISと「融合」する。

操縦者とEISの「意識」が繋がる瞬間で、人によつては違和感を感じることもあるけれど。

どうやら、一夏さんは大丈夫みたい。

私にはわからないけど、一夏さんは今『白式』から膨大な情報を得ているはず。

操縦方法、性能、特製、装備、活動時間、エネルギー残量、出力限界、そして「敵」の情報。

EISは操縦者が必要とするあらゆることを教えてくれる、相棒として。

「EISのハイパーセンサーは、問題無く動いているようだな。一夏、気分は悪くないか？」

「・・・大丈夫、千冬姉、行ける」

「・・・そうか」

千冬姉様と一夏さんが、おそらくは身内にしかわからないだらう視線の交わし方をする。

そう言つて、素敵だと思つ。

私が篠姉さんを見ても……あ、また逸らされた。

割とショック……。

「ところで、楓はさつきから何をしてるんだ……？」

「見てわからないのか、馬鹿者。お前のために『初期化^{フォーマット}』と『最適化^{フィット}』をしてるんだよ……篠ノ之妹、間に合いそうか？」

「時間が足りないです」

千冬姉様の声には、きつぱりと答える。

答えないで後で何をされるか……まあ、出席簿の一撃だけだと思うけど。

そんな私の前には、空間投影式のディスプレイとキーボード、それぞれ6枚と2枚。

キーボードの上で指先を躍らせながら行つのは、『白式^{びやくしき}』の初期化^{フォーマット}作業。

このIFSを本当の意味で一夏さん専用にするためには、まずコアから前の機体の情報を消して、さらに一夏さんの情報を入力しなければならない。

1秒ごとに、ソフトウェアとハードウェアが一夏さん専用のそれに微修正されていく。

普通、何時間もかけて少しずつやる作業なのだけれど……。

「え、ええと・・・ありがとう? でも何で楓が?」

「コイツは整備科志望だからな・・・本当は専用機には整備チームがつぶが、お前にはまだ無い。手伝って貰えるだけありがたいと思えよ」

「な、なるほど」

・・・2つのキーボードを同時に扱つて、どうにか『初期化』を最終段階まで進める。

同時に一夏さんの情報の入力を初めて『最適化』。

時間が無いから、いろいろな作業を一度に済ませないと・・・。

・・・ハイパーセンサー接続、最適化完了、操縦者視界良好、クリア。

機体制御システムオンライン、姿勢保持システム及び各部推進装置の偏重力推進角錐度数をアトランダム設定して最適数値でそれぞれ自動固定、加減速補助システム作動・・・P I C 関連システム問題無し。

登録武装・・・あれ? 一個だけか、じゃ良いや。

推進ユニット・コントロール・システム最適化、エネルギー・バイアス・オペレーティング・システム及びシールド・エネルギー制御システム更新・再構築・・・それぞれ30秒以内に再実行、仮想試験結果を反映しつつ数値変更・・・。

「・・・凄い・・・」

山田先生の声、でも私はそんなに凄く無い。

束お姉ちゃんなら、1分もあればこれくらいの作業は終わらせてる。でも私は搬入の時点から3分経つても、『初期化』しかできない。まだ半分も・・・。

「・・・篠ノ之妹、もう良い。後は一夏が試合中に何とかするだろう。できなければ負けるだけだ」

「ああ、サンキューな楓」

「・・・わかりました」

『白式』からコードやケーブルを抜いて、接続を解除する。
後は『白式』が自動で『最適化』フィットティングする、でも試合終了まで間に合つかどうかはわからない。

・・・悔しい、凄く中途半端な仕事をした気分。

でも一夏さんは、凄く落ち着いた笑顔でお礼を言ってくれる。

それから、心配そうに一夏さんを見ていた篠姉さんの方を向いて・・

・

「篇」

「な、なんだ?」

「・・・行つてくる」

「・・・ああ」

一夏さんの言葉に、篠姉さんが少しだけ微笑む。

・・・それに私が少しだけ驚いている間に、一夏さんはピットの会場側出口の方へISを進ませる。ゲート
重い音を響かせて、『白式』^{びやくじゆ}が歩く。

・・・良かつた、ちゃんと動く。

でもあのシステム構築様式、確か東お姉ちゃんの・・・。

「・・・勝つてこい」

祈るような篠姉さんの声に、一夏さんは篠姉さんを見ずに手を上げるだけで応える。

おお、良く分からぬけど、通じ合つてゐる感がある。
そして、一夏さんはゲートの外へと・・・。

Side セシリ亞・オルコット

・・・私の母は、厳しくて強い人でしたわ。
女尊男卑の風潮が世に広まるよりも前から、いくつもの会社を経営して成功した人。
家柄でも能力でも母に劣っていた父は、いつも母の顔色を窺つていた・・・。

そう、だから「男なんて」そんなもの。

そんな2人の間の愛情が続くはずも無く、母はいつしか父を避けるようになつていきました。

でもあの日・・・3年前、死者100人を数えた越境鉄道事故で2人が亡くなつた時。

その日だけは、どうしてか2人一緒に・・・でもその理由を考える間もありませんでした。

私は両親の財産を狙う下種共から家を、両親の遺したものを見守るため、勉強の日々を過ごし。

そして・・・。

「・・・『ブルー・ティアーズ』」

小さな声で囁くのは、私の身体を覆う青の鎧の名前。

鮮やかな青、背中には特徴的なフイン・アーマーを備えた蒼穹の騎士。^{エスアイ}

これが私の、一つの結果ですわ。

IS適正テストで世界でも有数のランク・・・「A+」を出して。政府から国籍保持のための好条件が出されて、家を守るために受け入れました。

そして第3世代試験機のこのISの専属操縦者になり、稼働データと戦闘実績を得るために日本へ。だから彼と戦うのは、そのためでもあります。

「個人的に気に入らないと言つ気持ちも、まあ、ありますけど……」

何しろ、男だと言つだけで専用機まで与えられるのですから。
私が数年かけて それでも短い方だと言つのに 手に入れ
たものを、彼は数日で。

男だと言つ、ただそれだけの理由で。

・・・叩き潰して差し上げますわ。

私がそんなことを考えた時、ようやく彼がピット・ゲートから姿を
現しましたわ。

私の目の前に『ディスプレイが浮かび、『ブルー・ティアーズ』が彼
の・・・織斑一夏のIISの情報を教えてくれます。
ありがとう、『ブルー・ティアーズ』・・・でも大丈夫、私と貴女
が負けるはずがありませんわ。

「最後のチャンスを差し上げますわ」

「・・・チャンスって?」

「私と『ブルー・ティアーズ』が、一方的な勝利を得るのは自明の
理。今、ここで謝罪すると言つのなら、許してあげないこともなく
つてよ?」

<射撃コマンドを展開、セーフティロック解除>

頭の中に響くのは『ブルー・ティアーズ』の声、同時に左目の部分にターゲット・ロック・システムが展開、右腕部分に展開される主力レーザーライフル「スター・ライトmk-II」にエネルギーが充填されます。

そして同時に、試合開始の鐘が鳴り響きます。

彼も気付いたのでしょう、身構える。

あの白いISの性能自体は、それなりのようですね。
でも・・・

「・・・そう言つのは、チャンスとは言わないな
「あら、そう？ 残念ですわ、それなら・・・」

< ターゲット・ロック 標的確認、射撃開始まで3秒、2、1・・・>

・・・でも本人の能力は、どうかしらね！

「・・・お別れですわね！！」

トリガーを引いて、甲高い独特の射撃音が響く。
同時に、私の『ブルー・ティアーズ』から最初の射撃ショットが放たれました。

「うおおおつー！」

いきなり撃つてきやがった！

いや、もう試合開始の鐘は鳴ってるんだから、卑怯でも何でもない。ただ、俺がボンヤリとしてただけだ。

一応、ギリギリでかわしたけど・・・俺の手柄でも何でも無く、『白式』のオートガードが俺を守ってくれただけだ。
オートガードだから、俺の意思とは関係無く『白式』が動いただけ。つまり、俺が『白式』の反応についてこれで無い・・・！
と言づか、動かし方だつて碌にわからん！

〈ダメージ46、シールドエネルギー残量521〉

頭の中に『白式』の声が響く、ちなみに今やつてるみたいなIS同士の戦いは、「ISバトル」と言つスポーツとして世間に認知されてる。

まあ、学園では普通に模擬戦つて言つんだけど。

「ISバトル」と言つてのスポーツは、相手のシールドエネルギー・

・・まあ、HPみたいな物をゼロにすれば勝ちだ。

エネルギーがゼロになると実体（本体）にダメージを通せる、それで勝ちってわけだ。

後、ISには「絶対防御」って言いつシステムがあつて、最低限操縦者が死なないようになっている。

・・死ぬとか、縁起でも無いけどな。

「さあ、踊りなさい！ 私、セシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』の奏でる円舞曲で…！」

声と同時に、セシリアの射撃が雨のように降り注いでくる。いくらオートガードって言つても、全部を凌げるわけじゃない。しかも相手の射撃が的確なもんだから、ガンガン当たる…直撃だ、しかも連続。と言ひか、避け方がわからん。

おかげで、『白式^{びやくしき}』も警戒音を鳴らしつぱなしだ。

上へ避けても左に飛んでも…200メートルもあるアリーナなのに、どこへ飛んでもセシリアの射撃が俺を襲つてくる。

・・・アイツ、凄いな。

「・・・って、感心ばかりしてらんねえ…何か、武器は

丸腰じや無理だ、『白式^{びやくしき}』に武器の一覧を出すよつて頼む。

・・・つて、1個だけかよ！？

ええい・・・ままよ！

右手を掲げて、量子化していた武器を実体化させる。束さんが基礎理論を構築したつて言ひこの量子化・物質化のシステム・・・いつたいどう言つ理屈なのか、さっぱりだ。だけどそのシステムが、俺に武器を・・・1本の「刀」を貰えてくれる。

片刃の長刀・・・刃渡り1・6メートル。

「中距離射撃型の私達に、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・笑止ですわね！」

そして、セシリアの射撃。

機体を無理矢理捻つて、かわす・・・でも彼我の距離は絶望的、2.7メートル。

俺の攻撃射程にセシリアを捉えるにはその距離を、しかも弾幕の中を潜らなきやいけない。

今にして思えば最初の一撃は挑発でも奇襲でも無く、距離を広げるための物だったのかもしねれない。

「・・・やつてやるぞ」

千冬姉や筈、それに『初期化』してくれた楓、機体搬入の手続きをしてくれた山田先生に・・・無様な格好は、晒せないよな。だから、やつてやるぞ・・・この『白式』で！

一夏が、戦っている。

初めてのISバトルで代表候補生との戦い、予想通りと言つか、苦戦だった。

オルコットの射程距離の長さに、近接用の装備しか持たない一夏は翻弄されている。

特に、オルコットの機体から放たれている4機のビットのような物が厄介だ。

青いISの背中についていたフインが分離して、それぞれ独立したビットになっている。

それぞれが独立軌道で動く銃器のような物で、先端から特殊なレーザーを放つ。

「何だ、アレは・・・？」

「イギリスの第3世代装備『ブルー・ティアーズ』。オルコットさんのISと同じ名前なのは、あの兵器を積んだ実戦投入1号機だから、だとか」

私の呟きに答えたのは、楓だ。

私は千冬さん達と一緒に、Aピットからリアルタイムで一夏の戦い

を観戦している。

目の前の大きなモニターには、第3アリーナで行われている試合が映されている。

私の立ち位置は千冬さんと山田先生のの後ろで、そしてその私の左隣に楓がいる。

楓・・・数年ぶりに会った私の双子の妹。

楓は空間投影式のディスプレイとキーボードを一枚ずつ展開させたまま、一夏の試合をデータ面で分析していくようだった。その姿は・・・嫌でも、あの人を思わせる。

「見た限りにおいて『ブルー・ティアーズ』ややこしいので以下ビット は相手の死角からの全方位オールレンジ攻撃が可能、まだ稼働実験段階の「BT兵器」と呼ばれる兵装だと思う。展開前にはスラスターとして使用していたようなので、ある程度の汎用性も備えているみたいだね」

楓の声が続く間にも、画面の中の一夏は追い詰められている。

上下左右に展開したビットがビームを放ち、一夏をオルコットのライフルの照準地点に追い込む。

その繰り返しだ、気の休まる暇も無い。

一夏はIS稼働時間20分とは思えない身のこなしで、ビットの攻撃を回避、防御し続けている。

だが、このままでは・・・。

「・・・一方で『白糸』は現在、近接用のブレードのみを装備。あれはまさに敵を殴りつけないと効果の無いタイプで・・・懷に飛び込めない限り一夏さんに勝機は「つ・・・一夏が負けるわけが無いだろつーー」

思わず、怒鳴った。

直後に後悔する、何をやっているんだ、私は・・・。

「い・・・めんなさい、姉さん」

「・・・こや」

頭を振って、苛立たしい気持ちを落ちつけようと親指の爪を噛む。この一週間、楓のことを避けていたから・・・これが、数年ぶりの会話と言つことになる。

数年ぶりの会話が、これか。

だが、他に何を喋れば良いのかなんてわからない。

私と違つて、あの人と一緒にいた楓。

・・・憎んでいるわけでも、嫉んでいるわけでも無い。

だけど・・・何を言えば良いのか、わからない。

「一夏・・・」

画面の中では、一夏がオルコットの弾幕を潜り抜けて、ようやく接触した所だった。

ぎゅつ・・・口元に持つて行っていた手を、無意識に握り込む。

一夏・・・。

Side 織斑 千冬

後ろで小娘共が騒いでいるようだが、そんなことは知らん。姉妹の問題に口を出す程、私はお節介焼きじゃない。

「はああ・・・凄いですね、織斑君。とてもEISを動かすのが2回目とは思えません」

モニター前の椅子に座っている山田先生が、感嘆したように呟く。確かに、画面の中の一夏は素人とは思えない程の健闘ぶりを示している。

初陣、しかも相手は代表候補生だと言うのに。

画面の中の一夏が、オルコットのビットの1機を叩き斬った。

それは、オルコットのビットの弱点を看破したが故の結果だ。あのビットは、オルコットの射撃と同時には動かせない。

つまり自動じゃない・・・それを逆手にとつて、一夏はわざと隙を作つて、ビットを誘導、迎撃する。

そう言つてゐる間に、2機田、3機田と墮としていく・・・。

「・・・馬鹿者め、浮かれているな」

「え・・・どうしてわかるんですか?」

「さつきから左手を閉じたり開いたりしているだらう・・・昔からのクセだ」

「へええ・・・流石はお姉さんですね、そんなあいたたたたつ!?

私をからかおうとした山田先生にヘッドロックをかけつつ、私は画面を注視する。

そこには、4機田・・・「最後の」ビットを墮とそつとしている一夏が映つてゐる。

とは言え、ダメージは深刻・・・にも関わらず、その機動性は上昇しているように見える。

普通、ダメージを受けければ機動性は落ちるはずだが・・・。

「・・・直前の『最適化』フィットティング作業が、ここに来て活きてきたか」

あの機体は元々、倉持技研と言つ日本のおIS企業が開発していたが・

・・色々な理由で、放棄された。

そしてそれを束が引き取つて、完成させた。

・・・前代未聞の第4世代ISとして。

各国が第3世代の開発に躍起になつてゐる所に第4世代のITS、公表などできない。

アレの整備担当として篠ノ之妹を呼んだのは、他にできる人間がいなかつたからだ。

加えて言えば、『白式』^{びやくしき}のコアに接続できるのが私と一夏、^{かえで}篠ノ之姉・・・そして篠ノ之妹だけだった。

もちろん、開発者である束は例外とした場合だが。

「・・・束の、弟子か」

先の束との電話で、^{かえで}篠ノ之妹のことを少しだが聞いた。

最も、束の言つていることは8割は意味不明だが・・・。

「・・・何だ！？」

篠ノ之姉の声に、思考を現実に戻す。

画面の中で、一夏が4機目のビットを墮とした時、「それ」は起つた。

・・・機体に救われるか、馬鹿者が。

↖『最適化』^{ファイツティイニング} 終了、確認ボタンを押してください ↵

な、何だ・・・?

セシリ亞の最後のビットを刀で斬り落とした後、いきなり『白式』^{びやくしき}が話しかけて来た。

目の前のディスプレイに浮かんだ「確認」を押すと、膨大なデータが意識に直接流れ込んでくる。

刹那、俺のISHが量子化して・・・直後、再び実体化する。中世の無骨な鎧のようだったそれは、形がかなり変わっていた。より曲線的に、よりシャープに・・・そして、直感的に理解する。これでこのISHは、「俺専用」になつたと。

「一次移行・・・じゃあ、今までは初期設定だつたつて言つの!・?」

「ふあー・・・何だつて?」

セシリ亞が驚いているみたいだけど、俺には細かいことはわからない。

右手の刀を見ると、それもまた形状が変わっていた。

「・・・『雪片式型』?
『ゆきひら・にがた』?

そこには昔、千冬姉さんが現役だった頃の動画で見た、あの刀があ

つた。

姉さんの、刀。

刀に形成した・・・形名。

刀と言うより反りの深い「太刀」、鎬に刻まれた溝からは工業的な粒子が溢れている。

・・・ああ、そうだよな。

俺は本当に、最高の姉さんを持ったよ。

元「世界最強」・・・誰よりも綺麗で強い、世界一の姉さんだ。だから千冬姉が誇れるとまでは言わなくても・・・恥じることの無い、そんな弟でいたいと願う。

「だから」

チャキッ・・・新しくなった刀・・・いや、太刀を両手で持つて、下段に構える。

「・・・『^{びやくしき}白式』、距離は?」

<16メートルです>

・・・遠いな、だけビットは全部落とした。
後はライフルをかわしながら・・・飛び込むー

「・・・ぜあああああああつー！」

「ぐつ・・・面倒ですわー！」

距離を開こうとするセシリ亞、縮めようとする俺。
これまでの動きが嘘のように、『白式』^{びやくしき}を思い通りに動かせる。
追いかけっこは唐突に終わり、ライフルの銃口を蹴りつけて外し、
太刀を大上段から振り・・・。

「お生憎様」

次の瞬間、セシリ亞の機体のスカート部分が開く。
開いたそこから現れたのは、2つの突起物・・・つまり。

「『ブルー・ティアーズ』は・・・6機ありますよ！」

放たれるのはビームじゃない、2発のミサイル
！

「・・・ー！」

だけど、見える。

ミサイルの軌道、どこを狙うのか・・・頭が判断するのと同時に、
機体が動く。

思つた通りに、斜めにホール移動。

一講題、古事記の説明を終わつてお歸り。

2発目・・・斬る！

ガニンツ・・・両手に鈍い重みを感じると同時に、爆発の衝撃が俺を震わせた。

ダメージ66、シールドエネルギー残量

『白糸』
の頃も無視して、爆煙の中を直進する。

黒煙を抜けた際には、焦りの色を浮かべたセシリアの顔があった。

五

下段から上段へ、逆袈裟払い。

『白式』から太刀にエネルギーが供給されていくのを感じる、太刀

か
熱
し
ゆきひら

『雪片』の刀身が輝き、俺はその輝きに導かれるように

そして

0

「大馬鹿者め、武器の特性もわからないくせに無理に使うからそつなるんだ」

「大馬鹿者つて・・・馬鹿者から嫌な方向にランクアップしないでくれよ・・・」

「何か文句があるのか?」

「・・・無いです」

試合の後、一夏さんは千冬姉様にこいつてりと絞られていた。自分の武器を中途半端に使いやがつて・・・と言う内容にも聞こえるけれど、たぶん照れ隠し。

自分の武器を弟が継いでくれたことが、実は物凄く嬉しじゃない。

「・・・篠ノ之妹?」

「な、何でも無いデス!」

一夏さんを絞つている千冬姉様の標的が私に移りかけたので、慌てて思考を止める。

と言ひか何、相手の思考が読めるの・・・?
いや、それ以前に篠ノ之妹つて。

東お姉ちゃんから見れば、篠ノ之妹つて2人いるよ?

まあ、良いや・・・今はとりあえず、『白式』の方に興味あるし。ブウンツ・・・と私の田の前に上下4枚、合計8枚の空中投影型ディスプレイが浮かぶ。

そこには、一夏さんの専用IS『白式』^{びやくしき}の『最適化』^{フィットティング}後のデータが映しだされる。

「うーん、やつぱりちゃんとパーソナライズした方が・・・」

千冬姉様に聞いた話だと、これを作ったのは束お姉ちゃん。どうりで『初期化』^{フォーマジック}しやすいと思つた、お姉ちゃんは私がやりやすいようにシステムを組んでくれてたんだね・・・えへ、何か嬉しいな。

束お姉ちゃんの作ったISを、私が整備。
うん、美しい。

これが篠姉さんの専用機だつたりした口には、きっともっと楽しいよね。

束お姉ちゃんが作つて、私が調整して、篠姉さんが動かす。
・・・理想だね。

「篠ノ之妹、そろそろ良いか
「あ、はい」

千冬姉様に言われて、『白式』^{びやくしき}との接続を切る。

それから一夏さんが『白式』^{びやくしき}を待機状態にして、白いガントレット

の形になつて、一夏さんは手首に納まる。

待機状態になつた I.S. は、操縦者が望めばその場ですぐに展開できる。

でもここは I.S. 学園、当然のように電話帳並の規則の本がある。一夏さんは、山田先生からそれを青い顔で受け取っていた。

「・・・何にしても、今日はこれでおしまいだ。帰つて休め」

締めの言葉は、やつぱり織斑先生。

と詰つわけで、今日は一件落着・・・。

「・・・あ

ふと視線に気が付く、それは篤姉さんの物だった。

いつもと同じ、鋭い視線。

何と言づかこの1週間、上手く話せなかつたから・・・ちよつと緊張。

「・・・I.S. の」
「う、うん・・・」
「I.S. の整備、姉さんに習つたのか・・・?」
「あ、うん」
「・・・・・そうか」

それだけ。

それだけ言って、篠姉さんは一夏さんを連れてピットから出て行つた。

・・・ほんの一言だけ。

たった数秒間だけだけど・・・篠姉さんと、お話ができた。

それが嬉しくて、私はその場で歓声を上げた。

・・・直後、千冬姉様にはたかれた。

S i d e 篠ノ之 篠

・・・この感情は、何だろうな。

楓は東姉さんにIISのことを教えてもらつて、それで一夏のIISの
『初期化』をした。

羨ましい・・・の、だらうか、私は。

まさか、そんなはずは無い。

ただ、私は・・・。

「・・・なあ、篠」

「・・・・・」

「おーい・・・無視すんなよ、篠むん」

一夏の声に、ふと立ち止まる。

振り向くと、何だかバツの悪そつたな顔をした一夏がいた。

「・・・勝てなかつたな」

「ぐあ」

私の言葉に軽く呻いて、そしてかなり落ち込んだよつた表情を見せる一夏。

その姿を見ていると、わたくれ立つた心が少しだけ安らかになるのを感じた。

我ながらどうかとも思つが、一夏と一緒にいると安らぐ。

・・・ど、同門の人間が傍にいると落ち着くと言ひ、それだけの意味だ。

それ以上の意味は無い、無いつたら無いからなー

心中で自己完結した後、再び歩き始める。

当然、一夏もついてくる・・・。

・・・と、当然と言ひのは、行く場所が同じだからと言ひの意味で、共にいるのが当然と言ひの意味では無いぞ。

「い、一夏」

「ん、何だ?」

「く、悔しかつたか・・・? 勝てなくて」

「そりや・・・まあ」

「じいが沈んだような一夏の声に、私は少しだけ目を閉じる。思い出るのは、幼い頃の剣道場。

中学時代は剣を握っていなかつたと言つ一夏は、あの頃とは違つて物凄く弱くなつた。

この一週間、剣を合わせて・・・私から一本も取れなかつた程に。

だけど、根本の部分は変わつていない。

今の言葉でそれがわかつて、とても嬉しかつた。

・・・楓と話せ話せ言つのは、正直アレだが。

「・・・なら、明日からはHSの訓練もいれないとな
「あ、教えてくれるのか?」
「そう言つただらう」

いつかの会話を繰り返す。

「い、一夏が私にじいでも教えてほしこと言つのならな、仕方無い
い」

「ああ、そうだな、是非頼むよ」

「・・・う、うむ。では明日からは必ず放課後を空けておくれのだが、
良いな?」

「うひ」

・・・明日から、放課後はずつと一夏と2人きり。
い、いや、単にHSの訓練をするだけだ、うん、それ以上の他意は
無いぞ！

私は単純に、不出来な同門にいろいろと教えてやるつと言つただけだ。
・・・それだけだからな！

「か、勘違いするなよ、一夏！」

「え、お、おうつー！」

・・・まあ。

とにかく今日は、頑張ったな。

・・・一夏・・・。

Side セシリア・オルゴット

シャワールームの中で熱いお湯に打たれながら、私は今日の試合について反芻しておりました。

今日の試合・・・織斑一夏とそのHSとの試合を。
私が・・・私と『ブルー・ティアーズ』が・・・。

「・・・一撃を、喰らつだなんて・・・」

今日専用機を持つたばかりの男に、代表候補生であるこの私が。
最後の一撃は、いつたい何ですの・・・？

私の機体のバリアを無効化して、直接ダメージを与えるなんて。
そこで相手のエネルギーが切れましたから、それ以上の追撃はありませんでしたけど。

とは言え、どうして彼の機体が直後にエネルギー切れを起こしたのかもわかりませんわ。

私に一撃を与えた時には、まだ残っていたはずだけれど・・・。
・・・そのおかげで機体のダメージが最小限に留められたのですから、不幸中の幸いなのでしょうけど。

でも、もしエネルギー切れを起こしていなかつたら・・・。

「・・・結果的には、私の勝利・・・とは言え・・・」

でも昨日今日にEISを動かした素人、まともな訓練も受けていない相手。

それに、一撃を許した。

直後に彼のEISがエネルギー切れを起こさなければ、ゼロ距離で撃ち落としていたとは言え。

ビットも破壊されて、無様にも程がありますわ。

・・・何なんですか、あの男！

「・・・織斑、一夏」

彼の・・・織斑一夏のことを、思い出す。

最初から女である私に媚びようとせず、むしろ反発して見せた彼。母の顔色を窺つてばかりいた父とは、まったく違いましたわね・・・。

強く、迷いの無い、真っ直ぐな瞳。

最後の一撃の瞬間、視線を交わしたあの時。
あの瞬間だけは、本物でしたわ。
身体にはまだ、あの時に撃ち込まれた一撃の感触が残っています。
そして、私が撃ち込んだ攻撃の感触も・・・。

「・・・織斑、一夏」

初めて会った男・・・男だと言つのに、それでも。

私に、このセシリ亞・オルコシトに一撃を喰らわせた男・・・
他の男とは違う、何かを感じるのはどうしてでしょう・・・?
たかが、男の分際で。

きゅつ・・・蛇口を捻り、お湯を止める。

湯気で包まれるシャワールームの中、曇つた鏡を掌で大きく擦る。
そこに映るのは、見慣れたはずの自分の顔。

・・・もっと良く、知らないといけませんわね。

織斑一夏、私と『ブルー・ティアーズ』に一撃を与えた男のこと

を。

Side 織斑 一夏

セシリ亞との試合の翌日、クラスに来たらとんでも無いことになつていた。

具体的に言つと、何故か俺がクラス代表になつっていた。

・・・何でだよ、負けだつたじやん俺！

「では、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繫
がりで良い感じですよね」

嬉しそうにしないでください、山田先生。

クラスの女子達は「唯一の男子なんだから、持ち上げないと」とか
「経験が積めて情報も売れる、一粒で一度美味しい」とか言つて
けど・・・いやいやいや！

第一、あのセシリ亞が納得するわけが

。

「私、代表は辞退致しましたの」

・・・つて、本人が納得してゐるし！

それなら、まあ・・・つて、そうじゃないだろ！

「おおっ、見事なノリツツコ://ですね、一夏さん」

「だね～、実に見事だと思つよ～」

いやいや楓、のほほん（布仏本音）さんと一緒になつて拍手するなよ。

波長が似てるのか何なのか知らないが、すっかり友達になつてているらしい。

篠もあれくらいうれしい社交的なら、もう少し人付き合つても上手くなるだろう。

「一夏？」

「と、とにかく、何で俺が代表なんだよ！？」

隣にいた篠が物凄く剣呑な雰囲気を放つたので、話題を戻す。

・・・と言つたか、何で俺の考へることつてバレるんだ？

俺、わかりやすいのか・・・？

「勝負自体はああ言つ結果でしたが・・・初めてのバトルで代表候補生の私とあれだけ戦つたのですもの。むしろ私が退かないと面目が立ちませんわ。快く代表の座を受け取つてくださいまし」

その心遣い、今はいらないから。

・・・と言つたか、セシリ亞の俺を見る目が観察しているような物に

見えるのは何でだ？

「HSの技術向上には場数を踏むのが一番・・・クラス代表ともなれば、バトルには事欠きませんもの」

「いや、そもそもしれんけども・・・」

「何でしたら、私が教えて差し上げても良くてよ？」

「必要無い、私が頼まれたからな、私が教える

おおう、簞さん。

いきなり話に混ざつて来たかと思えば、何故か言葉に物凄い棘が。

「あら、そう。なら仕方ありませんわね・・・私は見れればそれで十分ですし」

そしてあっさりと引き下がるセシリ亞、最初の刺々しさはどこに行つたんだよ。

と言つたが、後半に何かブツブツ言つて無かつたか？

いや、まあ、良いけど。

「あ、ね、姉さん・・・」

その後、楓がおずおずと簞に近付いて來た。
期待と不安が混ざつた表情で、ツツ～つと傍に寄つて行くその姿は、
ちょっと可愛かった。

「や、その……お、おは……おはよひ……」
「……」
「……えと。あ……」

対する篠はと言つて、ふいつと猫のようになに顔を背けて、自分の座席へと向かつて行つた。
おい、妹に対して何て態度だよ。
そして楓は楓で、落ち込んだ猫のようになじゅんとしている。
話相手を失つたセシリ亞も、「やれやれ」と言いたげに肩を竦めて自分の座席へ。

「うーん……」「
「だ、大丈夫だつて楓、篠もさ……」「
「……グッドモーニングの方が良かつたかな……?」

いや、そこじやないと思つや。

楓は腕を組んで何やら考えながら、自分の座席に戻つた。
篠の反対側、廊下側の座席に。

・・・まあ、俺は実の所、あんまり篠と楓のことは心配しない。
先週からの篠の行動を見てれば、何となくだけわかる。
入学式の日、教室と寮で・・・篠、ちやんと楓のことをやつてたもんな。

束さんのことを聞いて来る生徒から、や。

「・・・やれやれ」

さつきのセシリ亞じゃないけど、肩を竦める。
素直じや無いんだからな、篠は。
あ、昔からか。

「せつせと席につけ、大馬鹿者が
「・・・つてえつー?」

チャイムが鳴ったのに気が付かなかつたから、教室に来た千冬姉に
頭をはたかれた。

・・・と、言うわけで。

俺は、1年1組のクラス代表になつた。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、「白式」に触れてひやつほうな楓です。

アレは今やどこの企業にも国にも所属していないので、私も触れて嬉しいです。

ま、詳しい所属はまだどつかに決まるでしょ。

それでは今回はIS整備に関する物で、「初期化」と「最適化」、それでもって「一次移行」について説明しちゃいますね。

「初期化」・・・

読んで字の如く、ISのコアを初期化する作業。全世界に配備されているISの内100～150くらいは研究開発用で、新しいIS（コア外装）の開発に日夜研究されてるわけですが・・・そこで新しい外装にしたり、あるいは操縦者を変更したりする場合は前の外装・操縦者の記憶をコアから「初期化」しないといけないんです。今回の場合、「白式」に一夏さんを操縦者と認めさせるための第一段階としてその作業が必要だったわけです。

「最適化」・・・

これも読んで字の如く、そのIS（特にコア）を新たな操縦者に適合させる作業。これが終わると「一次移行」と言う現象が起こってその操縦者の「専用機」になることができます。量産機・訓練機なんかは「最適化」せずに使うんで、これは特に専用機持ちの人には施される作業ですね。自動でもできますが、時間が・・・今回の場合、一夏さんが試合中に適合させた感じですね。

篠ノ之 楓：

ふう・・・では次回、セカンドが来るそうです・・・セカンド?
・・・束お姉ちゃん、勝手にドロップ缶持つて行かないでね?

篠ノ之 束：
ぎくうつ!?

第4話・「その幼馴染、2番目」（前書き）

妹語録^ス。

妹「ねえ、お兄ちゃん・・・食べて」

何を？？？

妹「私を」

その時、竜華零に電流走る　　！！

* 単純にグラム単位で体重が増えたから肉を減らすのを手伝えと言
われただけと言うのが、今回のオチです。

第4話・「その幼馴染、2番目」

第4話・「その幼馴染、2番目」

Side 凰 鈴音ファン リンイン

あー・・・疲れた、言い出したのは自分だから仕方無いけどね。
本当ならもう1週間早く、来たかったんだけど。
いやまさか、アイツがあんなことになるとは思わなかつたから。

「えー・・・本校舎1階総合事務受付つてビリよ」

と言ひか、広すぎるのよ口口。

初めて来る人に不親切にも程があるじゃない、要塞じやあるまいし。
・・・まあ、いざつて時は要塞になるのかもしないけどさ。

何たつてこにはIS技術の最先端、「IS学園」なんだから。
とは言えそこは規則、IS使えば楽なんだけどな。
でも無断で使うと私の中国クニとの外交問題になるかもだし、そこは自重よね。

何と言つても、私は代表候補生なんだから。

「・・・ふふん」

IS適正「A」、専用機持ちの代表候補生。

年上の大人や男がヘコヘコする、そんな環境がとても心地良い。まあ、男なんて興味無いけどね。

・・・1人を除いて、ね。

「元気かなあ・・・一夏」

中学2年生の時まで、私はここ・・・日本にいた。

その後は、親の都合で中国^{クー}に帰らないといけなかつたけど。でも二コースでアソツ、一夏を見て、ここに来ようつて決めた。

私は決めた後は行動あるのみ、なタイプだからその通りにした。政府高官に頼み込んで 向こうも、「唯一の男性操縦者」に近い私は好都合だと思つたろうし 何とか、編入手続きをねじ込んだ。

その代わりここに来るまで強行軍で、こんな夜中に着くことになつちゃつたけど。

ま、それくらいは必要税よね。

それより一夏の奴、ちゃんと私との約束を覚えて・・・。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

・・・不意に。

1年と少し前まで毎日のように聞いていた声が、聞こえた。

若い男の子の声。

と言つた、ここHS学園に男の子は一人しかいなつて聞いてるから、
「この声は……」

角を曲がると、「HS訓練用第3アリーナ」とて書かれた施設から、
誰かが出て来る所だつた。

そこに、男の子がいた。

見間違えるはずも無い、中学生の半ばまで毎日のよひに一緒にいた、
幼馴染の男の子。

・・・織斑、一夏。

嘘、こんなに早く会えるなんて思つて……。

「だから、こいつ……飛ぶ時は、くいつて感じだ！」

「何だよその独特な感性！ そんな擬音で俺にHSの何を掴めつて
んだよ！」

「な、情けないぞ一夏！ それでもクラス代表か？ クラス対抗戦
まで口が無いんだぞ？」

「お前が言つたな！」

思つて……え？

「まつたく……じ、じゃあ、明日も放課後に教えてやるからな
「明日はもう少し理論的に頼むぞ……？」
「それはお前のやる気次第だな」

反射的に隠れて、やり過ごす。

・・・え、何よあの女の子、何であんなに親しそうなの？
そもそも、何で一夏を呼び捨て・・・？

「・・・クラス代表、対抗戦・・・」

・・・その後、事務所はすぐに見つかった。
そこで私は、一夏のこととか対抗戦のこととか、いろいろ聞けた。
いろいろ、ね・・・。

S i d e 織斑 一夏

正直に言おう、俺は今グロッキー状態だ。
何しろ、ISの訓練の後に俺の「代表就任記念パーティー」と言つ
催し物があつたからな。

でも途中から俺そっちのけで、夜の10時過ぎまでどんちゃん騒いでただけだけどな。

とこりが今、クラスの女子達はいつもと同じ様子でワイワイ騒いでる。
どうして体力が持つんだ・・・はつ、女子力ってそういう意味なのか？

「まだどうせ、くだらない」と考へてゐるのだろう?」

「な、何を馬鹿な、し、失礼だぞ筈」

「どうだかな」

ふんっ、と鼻を鳴らして、教室まで一緒に来た筈がさつわと自分の席に行つた。

筈との同居生活が始まつて1週間経つが、筈はびつ思つてんだらうな・・・。

俺? 着替えとかシャワーとか気が感じや無い。

15歳の健全な男の子ですから・・・まあ、相手が筈で助かつた。

これが知らない女子だったら、本気でどうすれば良いのかわからなかつたからなあ。

知らない女子と同居してゐ俺・・・想像するだに恐ろしいな。まあ、流石にそんなことは無いだらうけどな。

「・・・お、おはようございまーす!」

「えへへー、間に合つたねえー」

「うお?」

その時、俺のすぐ後に教室の扉を開けた奴がいた。

扉の枠に寄りかかるようにして立つていたのは、楓とのほほんさんだ。

よほど急いで走つて來たのか、楓なんかぜえはあ言つてる・・・身體弱いのに、大丈夫か?

「む、昔の話で、今は・・・」

「あ、そうなのか」

そう言えば、今は平氣つて言つてたもんな。
うん、健康なのは良いことだもんな。
と言つたか、そんなに急いでどうしたんだ？

「千冬姉様のホームルームに遅刻できる人間がいたら、見てみたい
ですよ・・・」

「あ、あはは・・・そりや 確かにな」

遅刻したら、確實にお仕置きが待つてるからな。
俺が苦笑していると、その脇を通り抜けて楓が簫の所まで駆けて行
つた。

簫は窓の外を見ているから表情は見えないけど、楓はどこか嬉しそ
うだ。

「ほ、簫姉さん、おはよ・・・」

「・・・ああ」

「う、うん、えへへ・・・」

いや、挨拶はちゃんと返そうぜ簫。

まあ、それでもここ最近で大分改善してきたよな、無視はしなくな

つたし、一応。

仲良きことは、良いことだからな。

篇も、もっと素直になれば良いのになあ。

「あ、そつそうおりむー」

「おりむー・・・つて、ああ、俺のことか

「うん、やうだよー」

楓に置いて行かれた形ののほほんさんは、俺の横でへらーとつとした笑みを浮かべていた。

うーむ、全身からゆるゆるオーラを出している人だな、袖丈が明らかにダボダボだし。

とは言え、俺も随分とクラスの女子に馴染んだのではなかろうか。
・・・慣れって、怖いな。

「隣の2組にねー、中国の代表候補生が転校してきたんだつてー

「あ、それ知ってる知ってるー!」

「うん、私も聞いたー！」

のほほんさんの話題に食い付いたのは、俺じや無くてクラスの女子
だつた。

おお、これが女子の噂力か。

そして、代表候補生と言えば・・・。

「ふふん、今さらながらに私の存在を危ぶんでの転入かしら?」

出ました、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんです！
・・・でも、「危ぶむ」って何をだ？

それにも、4月のこの時期に転入つて珍しいな。

「何だ、転入生が気になるのか、一夏」「え？ あ、ああ・・・まあ、少しばかり？」

うお、さつきまで自分の席にいたはずの篠まで来た。
その傍には、ちょこんと楓がついてきている。
やはり篠も楓も女の子、噂話が好きと言つことだらうか。
でも何故だ、何故か少し不機嫌そうだぞ。

昨日の夜、篠が寝間着に使つてる浴衣の帯が変わつたことを指摘
したら凄く機嫌が良くなつたのに。

・・・いや、あれも何で機嫌が良くなつたかわからぬいけど。

「ふん、今のお前に女子を気にしている暇があるのか、クラス対抗戦はすぐだぞ」

「そうですね一夏さん、この私と『ブルー・ティアーズ』をキズモノにしたのですから、勝つて頂かないと困りますわよ？」

「・・・キズモノつて、お前な」

俺の言葉に、セシリアはふんつ、と腕を組んで鼻を鳴らす。

最初みたいに毛嫌いされではないみたいだけど、正直これもびつなんだろ？。

最終的に「お前を倒すのはこの私だから」とか言って俺のピンチに駆けつけてきたりするのだろうか、それはとても嫌だぞ。

ちなみにクラス代表戦は、読んで字の如く、各クラスの代表が戦うリーグマッチだ。

優勝すると、学食テザートの学年フリー・パス（半年）が景品として与えられる。

だからクラスの女子達の俺への期待値は年初来最高値を連日更新中だ、何てこった。

「・・・まあ、やれるだけやってみるけど」

「やれるだけでは困りますわ！ 一夏さんには勝つて頂きませんと！」

「男たる者、そんな弱気でどうする一夏」

「織斑君が勝つと、皆が幸せになれるよ！」

皆して勝手なことを言つてはいるけど、でも俺まだIJS動かして間も無いんだぜ？

籌との訓練でも基本動作で躊躇している段階で、とてもじゃないが「任せろ」とは言えない。

・・・我ながら情けないとも思つけど、事実だしなあ。

「でも専用機持ちはウチと4組だから、楽勝だよ。しかも4組の専用機持ちは・・・」

その時、また別の誰かが話に混ざって来た。
クラスの女子の言葉に被せるように響いたその声は、どこかで聞い
たような・・・。

Side 篠ノ之 楓

今日も篠姉さんと挨拶できた・・・とか考えていると、クラス対抗
戦の話の最中に、隣のクラスの人があつてきました。
小柄な体躯、ツインテールにした長い髪、日本人とは少し違う鋭角
的で艶やかな瞳。

「鈴・・・お前、鈴か!?」

「そうよ、中国代表候補生、鳳 鈴音! 2組も専用機持ちがクラ
ス代表になつたの・・・だから今日は、宣戦布告よ!」

腰に手を当てて、ビシイツとこぢりを指差して来るフア・・・えー
と、凰、さん?
どうやら一夏さんのお知り合いのようだ、一夏さんはビンが戸惑つ
た様子で頭を搔いている。

「・・・何、格好つけてんだ鈴?」

「んなつ・・・な、何てこと言つのよ、アンタ! 普通そこは空氣読むでしょ、日本人なら!」

「いや、知らんけど・・・」

あーでも、中国代表候補生のISには少し興味が。

この学園の訓練用IS、『打鉄』(日本製・純国産・初心者用)はもうデータ取っちゃつたし・・・一夏さんの『白式』は整備の時に見れるし。

オルコットさんの『ブルー・ティアーズ』は、国籍の問題で私は手を触れられない。

・・・まあ、直接手を触れなくてもデータは取れるけど。

ちなみに私の『黒叢』はまだ、誰にも見せていない。

左手に待機状態の指輪をしているし、試験の時に千冬姉様と山田先生には見せたけど。

いやあ、山田先生強かつたなあ・・・まあ、良いや。

私、たぶんIS学園最弱だと思つし、なり最弱として振る舞つだけだし。

中国のIS、どんなのかな。

あそこは貧困層放置でISにお金かけてるから、結構良い機体が・・・。

「もうSHRの時間だ、さつあと自分のクラスに戻れ、邪魔だ」「げ・・・ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ」

一夏さんと鈴さんの言い争いがさうしてアッパーする直前、千冬

姉様が登場。

鈴さんの頭を出席簿で一度もぶつて黙らせる千冬姉様、クール過ぎ・・・。

と匂つか、「千冬さん」と呼ぶと匂つかとは鈴さんも千冬姉様の知り合いらしー。

千冬姉様は、いろいろと顔が広い。

束お姉ちゃんとは正反対、だからお姉ちゃんのお気に入りなのかな?他にもいろいろ、あるのだなうけど。

「いや、驚いた・・・鈴の奴がIOS操縦者になつてるんてな」

「一夏、今のは誰だ? 隨分と親しそうだったが・・・どう言つ関係だ?」

「そうですね、ライバルと慣れ合つのはめどつかと思ひますわよ?」

「え、ええつ・・・?」

篠姉さんとオルコットさん、そしてクラスの皆から集中砲火で質問の嵐。

一夏さんが困つてる・・・けど、今それをする。

「静かにしろ、バカ共! !」

ほら、千冬姉様の出席簿が火を噴いた。

・・・あれ？ 何で今まで叩かれてるんだろ？・・・？

Side セシリア・オルコット

まったく、一夏さんは一組のクラス代表としての自覚が足りませんわ。

篠ノえさん ああ、ややこしいので篠さんで良いですわね
とは、放課後に毎日訓練をしてくるようですけど。

でもIRSを使った訓練はしていないとか、確かに操縦者はそれなりの訓練が必要ですけど。

今の一夏さんに必要なのは、可能な限りIRSに触れること。
私に一撃を与えた 男とは言え 方が、簡単に負けてしまうのも気に入りませんわね。

「待つてたわよ、一夏！」

「おお、鈴・・・でもそこ、通行の邪魔だぞ。食券が出せない」
「わ、わかってるわよ・・・」

そして昼休み、私達（一夏さん+私+篠さん）がお昼休みに食堂に行くと、噂の転校生が何故か立っていました。
どどーんと現れておきながら、一夏さんの「い」とは素直に聞くと言つ態度。

アレは、狙つてこらのかしら・・・あ、ちなみに私が一夏さんと行動を共にしているのは、単純に一夏さんに興味があるからです。

・・・他意は無くてよ?

まあ、私の隣に立つている雫さんはどうなのかは別でしょ?けど。それにこのメンバー、イギリスの人間として見逃せませんし。

「やっぱ丸一年ぶりくらいだよな、鈴、元気だったか?」

「元気には決まってるじゃん、アンタこそこまには怪我病気しなさいよ」

「何だよそれ・・・親父さんはどうだ、元気にしてるか?」

「え・・・あ、ああ、うん・・・元気、だと思ひ」

そういうふうに、えー・・・鈴さんだったかしら、その子と一夏さんが楽しそうにお喋りをしておりました。

・・・おそらく、知り合いなのだと思いますけど。

でもIIS初心者の一夏さんが、どうして中国の代表候補生と知り合いなのでしょうか?

「一夏、そろそろビーフिंグの知り合いなのか説明してほしいのだが」

「いや、幼馴染だよ、ただの」

「幼馴染?」

・・・幼馴染と言つなら、雫さんが知らないのはおかしいのではなくて?

それについて一夏さんが言つては、鈴さんが引っ越した後に鈴さんが引っ越してきたので、擦れ違いのよつた形だったそうですわ。

何でも、織斑先生がIIS操縦者として活躍して・・・家を空けることが多かった時期。

その時に毎日のように食事に行つていた中華料理屋の、娘さんなのがどか。

だからかは知りませんが、鈴さんのトレイには中国の麺料理が乗つておりますわ。

「・・・ところでアンタ達、誰？」

「なつ・・・わ、私を知らない！？ イギリス代表候補生である」

のセシリア・オルコットを！？」

「俺も知らなかつたけど・・・」

一夏さんは黙つておいでくださいまし！

一夏さんはこの学園に来て初めてIISのことを知つたのですからまだしも、中国の代表候補生ともあろう者が私を知らない！？

そ、それは・・・それは、私への侮辱ですわ！

「うん、私、他の国とか興味無いし」

「な、な・・・言つておきますけど、私、貴女のような方には負けませんわ！」

「そ、なんだ、でも戦つたら私が勝つよ。私、強いもん」

ま、まあ・・・な、何て自信過剰な！

・・・な、何ですのー夏さん、その「お前が言つんだ・・・」みた
いな由は。

「あ、ああ、鈴。こつちは篠・・・ほら、昔話したひ、剣道場の
娘」

「ああ・・・あの。まあ、よろしく」

「・・・」

篠さんと視線を交わしたのも一瞬、彼女はすぐに一夏さんの方へ視
線を戻しましたわ。
そして、ビニが少しだけ恥ずかしそうにしながら。

「そ、そりゃ助か「結構ですわ!」・・・ええ、またこの流れか
の私が、教えてあげても良いわよ?」

な!?

「ああ、そりゃ助か「結構ですわ!」・・・ええ、またこの流れか
?」

「ああ、一夏は私と放課後にHSの特訓をするのだ
「ええ、専用機持ちの私が教えて差し上げますわ!」
「え?」

そもそも、一夏さんもそんなすぐに頷こいつとしないでくださいまし。

今回ばかりは、私も黙つていられません・・・中国の代表候補生、

凰 鈴音。

お、覚えましたわよ・・・？

「大体、貴女は2組でしょう・・・敵の施しは受けませんわ！」

実際、1組のクラス代表のIS訓練を他のクラスの人間に任せることで、あり得ませんわ。

ええ、そう、あり得ませんとも！

こうなつたら、是が非でも何が何でも、一夏さんに勝つて頂きます！

「ふーん・・・あつそ」

理屈が通っている分、彼女も反論が難しい様子ですね。

一夏さんには見えていないでしそうけれど、私達の間には確実に火花が散つておりますわ。

しかし「クラス対抗」と銘打つてているだけに、この理屈は崩せないでしよう？

「じゃ、それが終わつたら部屋に行くから。空けといてよね、一夏

！」

「は？・・・あ、ああ」

それとも自分の分の毎食を食べ終えると、鈴さんは食堂から素早く出て行きました・・・つて。

だから一夏さん、そつ簡単に頷かないでくださいましたー

Side 篠ノ之 篇

一夏の奴め、この上まだ女子が増えるとは・・・軟弱だ！
とは言ったものの、心は焦る。

何故なら私には専用機が無い、対して向こうは専用機持ち。
しかも何故かセシリ亞まで連れて・・・2機になってしまった。

ISの訓練と言いつつ名田なべたで一夏の放課後の相手を務める以上、どうして
てもISがいる。
でも、私には専用機が無い。
結局は、そこに行きついてしまつわけ。
これは・・・とても大きい、思つたよりもずっと。

「どうしたものか・・・

と言いつつ私の足は、IS学園の訓練機の貸出申請を行つたための総合受付に向かっている。

いろいろ考えたが、やはりこれしか手がない。
正直、今までここに来るのが嫌だった。

別に私で無くても、きちんと申請されればエス訓練機の貸出は誰でもできる。

もちろん、順番とかはあるが……運が良ければ、その場で借りることも可能だ。

一夏の訓練のためと思つてはいても、やはり、その……。

・・・私は、「篠ノ乃 束」の妹だから。
でも、せめて訓練機が無いと一夏が……。

「あれ？ 篠姉さん」

「・・・あ」

総合受付の前でどうしようかと思つていて、反対側の通路から自分と同じ顔が歩いて来るのが見えた。

同じ顔・・・双子の妹、楓。

再会してからもう一週間以上経つが、どうしても一歩退いてしまつ。

何を話せば良いのか、どう接すれば良いのか、わからない。いや、普通に姉妹として接すれば良いと言つのは、頭ではわかっているのだが。

・・・楓は、姉さんよりはまだ、理解できるから。

「わ、わー・・・篠姉さんだ、こんな所でどうしたの？」

「う、う・・・その、訓練機を・・・」

「あ、訓練機の貸出申請？ 私もだよー」

ほら、と見せて来るのは申請用の紙の束・・・実はあの束を手に入れるだけでも時間がかかる。

それだけ、I.Sの機体は厳重に管理されているのだ。

官僚主義とまでは言わないが、面倒な手続きが必要なのは確かだ。

「私はお友達のお手伝いなんだけど、篠姉さんは？」

「いや・・・わ、私は、その」

「あ、わかった、一夏さんでしょ？ 篠姉さん、昔から一夏さんのことですか？」

反射的に、殴つた。

「・・・い、痛いよ、姉さん・・・」

「お、お前が変なことを言うからだろ!うが!!」

「え、ええー・・・」

両手が書類で埋まっているため、私に叩かれた頭を撫でる」ともできぬ楓。

正直、悪かったと思う。

一夏に対してもそつだが、すぐに手が出るのは私の悪い癖で、それでいて素直に謝罪もできない物だから・・・。

・・・いや、でも今のは楓も悪いだろう。

それにアレだ、一夏のことが……やがていつか話は子供の頃に「内緒だぞ」と書いて話したことであつて、ここんな往来でだな。

私がそんなことを考えていると、楓が嬉しそうに元へり、と笑つた。

「……な、何だ」

「ううん、篠姉さんとお話をきいて嬉しへになつて」

言われて、はたと気がつく。

「ええ、まことに、うう、だな。

「えっと、束お姉ちゃんもね、その……篠姉さんの機た」「やの話はするな」

先程までの柔らかな気持ちが、その「名前」を耳にした途端に冷める。

楓も空気が変わったことを感じたのか、少し表情が曇る。ここ数日でわかつたが、楓は姉たばねさんのことが好きらしい。失踪している間、楓だけは姉さんの傍にいたのだから……そういうこともあるだらう。

だが、私は違う。

重苦しい沈黙が続く中で楓はおずおずと、しかし意外と力強く、手に持つっていた書類の束を私に押し付けて来た。

訓練機の貸出申請用紙、しかも優先度1位……って、これは？

「・・・おこー！」

私の声に返事をせずに、楓はそのまま背を向けて駆け出して行った。私は手の中に残った申請用紙の束に視線を落として・・・溜息を吐いた。

・・・友達の手伝いだつたんじやないのか、楓。

Side 織班 一夏

き、今日はキツかったな・・・。

夜8時、ようやく寮の部屋に帰れた俺は溜息を吐いた。

まあ、つまりは篝と一緒に部屋なわけだが・・・個室、まだかな。

「ふん、鍛えていないからそうなるのだ」

ベッドの上でぐつたりとしている俺を見下しながら、篝が鼻を鳴らしていた。

何とも優しい幼馴染である、まる。

今日の訓練は、剣道じゃ無くて本格的なINS戦闘だった。どう言うわけか、篝が訓練機を借りて来てくれて・・・初めてかもしない本格的な訓練だった。

そして、セシリア・・・何だか知らないけど、鈴に挑発されたのが頭に来たらしく。

それはそれは、もうビシバシと俺を苛め・・・鍛えてくれた。

と言ひか、途中から篝と2人がかりで俺をボコボコにしていた。身体で覚えろって、限度があるだろ・・・3時間休憩無し、アイツらは俺をどうしたいんだ。

まあ、とにかくシャワーでも浴びて・・・と思つた矢先。

「と、面づわけで、部屋かわつてー！」

台風・・・じゃない、鈴が部屋に来た。
しかも来ていきなり、篝に部屋を変わるよう要求。
要求であつてお願ひじやない所が、鈴の鈴たる所以だ。
俺と出会つたばかりの頃は、俺ともよく喧嘩してたよなあ・・・つて、懐かしんでる場合じや無く。

「い、いきなり何だ!? 大体、なぜ私がそんなことをしなければならない!?!?」

「いや、男と一緒になんて嫌でしょ? その点私は平氣だから、かつてあげようかなつて」

「い、いらん!」

前半は頷いても良いが、後半の意味がわからない。
ちなみに何故に鈴に俺と篝の同居状態がバレたかと言ひと、訓練の

終わりに鈴が第3アリーナのピットに来たんだよ。

スポーツドリンクとか差し入れてくれて、嬉しかったわけだが……
簫とシャワーの順番について話してたのを聞かれて、それでバレた。

「あれ？ この流れでどうして鈴と簫が部屋をかわる話になるんだ？」

それ以前に鈴の荷物、異常に少ないな。

ボストンバッグ一つで移動できるって、フットワーク軽過ぎだろ。

「ええい、ぐどい！ さつさと出でい……」

「ねー、一夏。一夏も私と一緒にの方が良いよね？」

「……無視、するな！」

「げ、馬鹿ほ……」

鈴の行動に堪忍袋の緒が切れた簫が、ベッド脇から竹刀を取り出した。

あ、馬鹿、防具も何も身に着けて無い相手にお前。

冗談抜きで危ない、そう思つた次の瞬間、鈴の右手が光つた。

操縦者を守るIISの「絶対防御」……これ、実は待機状態でも働いてるよね。

Side 凰 鈴音

。 I S開発者の篠ノ乃博士は言つたわ、「I SはI Sでしか倒せない」

。 そしてその操縦者も・・・「絶対防御」を抜けるI S（及び対I S兵器）でなければ、殺せない。

もちろん、それも絶対じや無い。

操縦者は自分で、自分の危機を乗り越えられるようになつていなければならない。

最低限、I Sコアだけは死んでも守らないといけないから。

「鈴、大丈夫か！？」

「大丈夫に決まつてんじやん・・・私、代表候補生だもん

「な・・・」

私の右手には、実体化したI Sの装甲が展開されてる。

その右手の装甲に、笄とか言つ子が振り下ろした竹刀がぶつかってる。

と言つが、今の・・・私じゃなかつたら、本氣で危ないよ？

I Sは操縦者の意思で部分的に展開できるの・・・候補生なら、0・5秒以下でね。

I Sを開けるのは生身の人間だもの、反射よりも速く展開はできない。

だから代表候補生は全員、無意識に反応して展開できるのが、当然。できなければ、死ぬもの。

「絶対防御」は生命が危ないって時にしか発動しないし・・・片腕

くらごとかだと、せつてくれない。

「・・・ま、それはそれとして、一夏。毎間に聞きそびれたんだけ
どさ」

「あ、ああ？」

「その、せ・・・約束、ちゃんと覚えてるよな？」

候補生から女の子な気持ちにチエンジ、このくんの切り替えって重
要よね。

そもそも、私が日本に来た理由の一つは一夏との「約束」だもの。
本人が女の子に囲まれてるのを見て、ちょっとイラッとして後回し
にしてしゃつたけどさ。

「約束、約束・・・ああ、もしかしてアレか！」

少し考え込んでいた一夏が、ぽんつ、と思いついたよつて手を打つ
た。

お、覚えててくれた！

だよねだよね、女の子の一世一代の約束だもんね、覚えてるのが当
たり前よ！

1年とちょっとしか経つて無いし・・・ね。
私が、大きくなつたら毎日酢豚を・・・。

「奢ってくれるって話だつたよな？」

作つてあ・・・へ？

私がぽかん、としている（簞とか言つ子も似たよつな顔してた、どうでも良いけど）、一夏はうんうんと頷きながら。

「うん、確か鈴が料理が上手くなつたら、酢豚を毎日！」馳走してくれるつづー・・・」

「・・・つー・・・」

それ以上は、聞きたくなかった。

違う、と叫ぶ代わりに、私は思いつきり一夏の頬を張つた。
乾いた音が、部屋に響く。

「へ・・・？」

「さ・・・最つ低！ 女の子との約束をちやんと覚えて無いなんて、男の風上にも置けない奴！ 犬に噛まれて・・・死ね！！」

顔を見てらんなくて、簞つて子の脇を擦り抜けて部屋から飛び出す。
簞つて子が何か私に声をかけよつとしたみたいだけど・・・知らな
い。

一夏のバカ、馬に蹴られて死ねば良いのよ・・・！」

「ほらほら楓ちゃん、急いで～」

「は、はーいっ」

「もひ、先生に無理言つて10時まで整備室使って良いってことになつてたのに～」

「う、ごめんなさい！」

本音さんに手を引かれるようにしてやつて来たのは、IS学園の第2整備室。

整備室と言つたが、もうドックとか格納庫とか、そんな風に呼んだ方が良いような場所。

量産型から専用機まで、2年生以上の整備科の人達がISの研究・開発を行つてゐる場所。

東お姉ちゃんの秘密ラボほどじやないけど、たぶん、世界最先端の技術の宝庫。

この中では、国籍も何も関係無い。

ただ、ISの整備の技術だけが物を言つ世界。

「う・・・こんな時間でも、人がたくさんいるね

「対抗戦近いから～」

「ああ、それで・・・」

もう夜8時を過ぎてこねと橋の上、第2整備庫にはたくさん的人がいる。

楽しそうにやっている所もあれば、怒鳴り合しながら工事を弄つていい場所もある。

あ、アレって専用機……？ と言つかあの発電機、最新型……？

「楓ちく、じつちだよ~」

「は、はこつ」

私と本音さんの手にあるのは、訓練機『打鉄』うちがねの貸出申請許可証明書。

さっきまでかかって……本音さん」「遅いよー」つて凄く怒られた。

か、格好つけて姉妹さんに渡しちゃったから、書類集めからやりなさいといけなくて……。

うん、素直に「めんなさい」。

「良こよ良こよー……でも、今回きついお願いだお~？」
「ひ、うん」

にくらべて笑う本音さん、可愛い。

でも、うん・・・一度としない、まさか書類の再発行があんなに面倒だなんて。

迷惑もかけちゃ「ひ、うん、学んだ。

学校つて、いろいろ大変なんだね……。

「え、えっと、それで……どうまで？」

「ちょっとと向こうへ、かんちゃんに紹介するから～」

「か、かんちゃんさん……」

「うわ、わ、わよ、かわいいよ～可愛い子なんだよ～」

以前から名前は聞いてる、えーと……かんちゃんさん。
本音さんに手を引かれてやつてきたのは、第2整備室の奥。
そこには『打鉄』^{うちがね}にどこか雰囲気が似た、見るからに未完成のHS
があった。

「かんちゃん、来たよ～」

「……本当に……来た……の？」

「うん、私はかんちゃんのメイドさんだから～」

その機体を包んでいるのは、無数のディスプレイ。
そしてその中から、1人の女の子が降りて来る。
どうやらその子が、この機体の操縦者^{マスター}にして本音さんの「かんちゃ
ん」らしかった。

肩を過ぎたあたりまで伸びた青みがかつた綺麗な髪、赤い瞳をかす
かに隠す小さな眼鏡。

小柄な身体を包むのはHS学園の制服、普通のそれよりも肌の露出
は控え目。

それでいて……私は、剥き出しの細い指に目を奪われた。

青白いディスプレイの光の海の中に浮かぶその子は、まるで魔法使

いみたいで……。

とても、「綺麗」だった。

「楓ちゃん、紹介するね～、この子があ、かんちゃんっ！」

「その呼び方……と言つか、誰……？」

「かんちゃん……更識さらしき 簪かんざしちやんだよ～！」

・・・更識、簪。

この日、私は初めて……。

彼女と、田を合わせた。

第4話：「その幼馴染、2番目」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもー、楓です。

そろそろこの出だしも変わるかもしないともっぱらの尊、まあ良いんですけど。

今田は、私の通う学校について説明ー。

まあ、ある程度は本編でもすでに説明されてますけど・・・。

I S 学園

国際条約に基づいて日本に設置、I S操縦者育成用の特殊国立高等学校。操縦者以外にもメカニックとかを育成します。学園はどの国家・組織にも属しません。国際規約上は外部の国家・組織が学園関係者に干渉してはならないことになっています。まあ、建前つて大事ですよね。

各種アリーナ・訓練施設に学生寮、食堂、お風呂・・・どれもこれも超一流、運営資金は日本国が全部持っています、今も昔も国際社会から力モられてます。10人ちょっとぐらい専用機持ちがいて、その倍くらいの代表候補生が所属しています。まあ、ちょっとした国際社会の縮図みたいな物。一般教養もあるので、れっきとした学校です。

篠ノ之 楓：

では、今回ここまでですねー。

うーん、そろそろ説明することがなくなるなあ・・・。

篠ノ之 束：

じゃあじゃあ、私達姉妹の幼少時のことで…あの頃はスタイルに差も無かつたんだけどねえ。

篠ノ之 楓：
お姉ちゃん！

第5話：「クラス対抗戦」（前書き）

IHSの一次創作を描く上で気になること。

- ・時系列（途中、明らかに矛盾が）

- ・IHS機体分配数（ドイツ10機、少なくない・・・？）

ここはオリジナルで考えた方が良さそうですね。

例えば「ドイツ10機」は実戦配備数で、研究・訓練用の分が後10～20機くらいあるとか、そんな感じで。では、どうだー。

第5話・「クラス対抗戦」

第5話・「クラス対抗戦」

Side 織斑 一夏

あれから結局、鈴とは話せないまま、クラス対抗戦の当選を迎えることになった。

俺のISの操縦技術自体は、笄とセシリ亞のおかげで「まあ、形になってきたかな」程度にはなった。

授業と放課後の訓練、夜を徹しての参考書読み・・・まあ、やれることはやった、が。

「来たわね一夏、ぶつ潰してやるわ・・・！」

超満員の第2アリーナ、第1試合は1組代表と2組代表。つまりは俺と鈴だ、アリーナの中央まで飛んだ俺の目の前には鈴がいる。

鈴は赤みがかつた黒の機体、中国第3世代型IS『甲龍』^{シモンロン}を装着している。

全体的に無骨なデザインだけど、両肩の横に浮いている非固定の棘付き装甲が特徴的だ。

・・・やたらに凶悪と言つ意味で。

ちなみに、鈴はかなり激怒している雰囲気だった。

と呟つのも、実は一度だけ鈴と話せたんだが……俺が約束をちゃんと覚えていなかつた（俺的には、完璧に覚えていたつもりなのに）

ことについて、謝る謝らないの口喧嘩っぽくなつてだな。

その・・・非常に、言つてはならないことを口走つてしまつたわけで。

「私のスタイルを馬鹿にしたこと、後悔させてやるわ……！」

「いや、その件に関しては本当に悪かつたと思つてる」

「その件は『』？ その件も『』でしょ！？」

スタイル・・・まあ、その、鈴は同年代の女子に比べて小柄だから。その、胸部と言つか何と言つか、とにかくそれだ。

それについては、本当に俺が悪かつたつて思つてる。

「今すぐ謝るなら、痛めつけるレベルを下げてあげるけど……？」

「雀の涙程度だろ・・・それに真剣勝負なんだ、全力で来いよ」

「わかった、殺す」

何か似たような会話をセシリアともしたけど、一いつ瞬物なのだろうか。

いや、剣道のよつこにもう少し紳士的（淑女的？）でも良いはずだ。何もEIS操縦者全員が「殺してやる」みたいな目で対戦相手を見たりはしないはずだ、そう信じたい。

「言つておくれけど、EISの『絶対防衛』も完璧じゃないのよ。シー

ルドエネルギーを突破する攻撃力があれば、相手に直接ダメージを

与えられるんだから

「・・・」

「ああ、そういう・・・その刀、『雪片』だつけ？ 記録映像でアントナの試合見たわよ・・・あの金髪の子、強かつたわよね」

金髪・・・セシリアか。

「言つておくけど、あの金髪の子がアンタに一太刀喰らったのはあの子が油断してたから。それとその刀の特性を知らなかつたからよ・・・そのへん、勘違いしてんじゃ無いでしょーね」

「・・・わかるよ、それくらい」

「あ、そう・・・なら」

実際、ここ最近の訓練で嫌という程わかつた。

何しろ、あの後3回模擬戦やつて、3回とも負けたしな、しかもボコ負け。

俺が代表候補生並だなんて・・・思つちやいない。

俺がそう考えた時、試合開始の鐘が鳴つた。

「ひあつー！」

女の子らしからぬ氣合いの声、同時に鈴の手には刃に持ち手のついた巨大な青竜刀。

しかも両手、鈴は縦から横から斜めから、俺にそれを叩きつけて来

る。

右から左から、上から下から・・・刃と衝つては生温い豪の一撃が、俺を襲ひ。

エネルギーと金属が打ち合つ音が響き、俺のE.Sは鈴の猛攻に耐えかねてジリジリと下がる。

圧倒的な攻撃力を誇る『雪片式型』を、攻撃に使えない。

セシリ亞のような正確な攻撃じやない、けど籌のように洗練された剣でも無い。

ただ敵を叩き潰し、ねじ伏せる・・・そんな、攻撃だった。

「・・・・」

チッ・・・裁き切れなかつた一撃が、E.Sの胸の装甲を削る。俺はたまらず、その勢いを逆用して下がりつと・・・。

「甘いっ！――」

鈴が叫ぶと同時に、肩のアーマーがスライドして開いた。肩の横に浮遊しているそれは、中心が光つたと思つと・・・。

見えない「何か」が、俺を殴り飛ばした。

衝撃、『白式』が警報を鳴らす。

その衝撃の強さに、俺は成す術も無く空中から地表に叩き付けられた。

Side 篠ノ之 楓

第2アリーナの、一夏さんサイドのピット・ルーム。そこには、私と篠姉さん、オルコットさん・・・そして、千冬姉様と山田先生がいる。

私達の前には、アリーナで繰り広げられている一夏さんの試合を映しだしているディスプレイ。

一夏さんが凰さんの猛攻に耐えかねて距離を取りつとした瞬間、「何か」に吹き飛ばされた。

一夏さんがアリーナの地表部分に小さなクレーターを作った瞬間、篠姉さんが息を飲むのが聞こえた。

「一夏・・・！」

その呟きが無意識の物であることは、わかる。

何しろ、篠姉さんの目はディスプレイから動かない。ディスプレイの中の一夏さんが立ち上がり、再び空に上がつて・・・ようやく、息を吐いた。

もしかしたら、息を止めていたのかもしれない。

「何だ、今のは・・・映像でも見えなかつたぞ」

「・・・『衝撃砲』、ですわね」

「『衝撃砲』・・・」

オルコットさんの返答を口の中で繰り返した篠姉さんは、千冬姉様の背中を見つめた後、私を見た。
その視線は何かを求めるような、そんな感情を窺わせる。

・・・あ、私、説明役？

正直、虚をつかれた感があるけど・・・篠姉さんの役に立てるなら。私は目の前の自前の空間投影型ディスプレイを止めて、新しいディスプレイを篠姉さんに見えるように展開、その下に浮かぶキーボードを叩く。

「そんな高価なディスプレイ、ビニード・・・」

オルコットさんが、半ば感心、半ば呆れたように私のディスプレイを見る。

東お姉ちゃんが作ってくれました、まる。

お値段は、ちょっとわかんない。

いくらいくらにするんだろ・・・興味無いから良いや。

「えー、『衝撃砲』とは、空間自体に圧力をかけ砲身を作り衝撃を砲弾として打ち出す装備。画像から、肩と腕に装備されている模様。砲弾だけではなく砲身すら田に見えないのが特徴で、砲弾の種類にはいくつかバリエーションあり。今のは・・・貫通型の方」

ディスプレイに浮かぶのは、事前に凰さんが学園側に提出したスペックデータ。

もちろん表向きの物なので数値などは控え目に書いてあるだらうし、隠し玉があるかもしね。

オルコットさんの『ブルー・ティアーズ』にした所で、普段の試合では3割も力を出していないと思つ。

何しろIJAは国家機密・軍事機密が満載なので・・・基本的に外部に公開がされない。

とは言え「情報公開」がどうとか「知る権利」がどうとか言う人が多いから、建前としてそれなりのデータが公開されてるわけで。

今、篠姉さんが見ているのは、そう言つデータ。

「な、なるほど・・・といひで、楓はさつきから何をしているんだ・・・?」

「今日は質問がたくさんで嬉しい、篠姉さん」

「・・・」

あ・・・黙つちゃつた。

少ししょんぼりしながら、私は作業を再開する。

空間投影型キー・ボードを4枚使って、中国のIJAのデータを集める。

・・・束お姉ちゃんのために。

一瞬、千冬姉様がこちらを見た気がするけど・・・すぐに一夏さんの試合に意識を戻す。

画面の中では、一夏さんが刀を振り上げて敵に迫っている所だった・・・。

Side 凰 鈴音

思ったよりも、よく動くじゃない。

両肩と両腕の『衝撃砲』　　中国第3世代装備『龍砲』　　の見えない砲弾を、アリーナの空間を限界まで動かすことで紙一重でかわし続ける一夏を見ながら、私はそう思つ。

この『龍砲』は砲身も砲弾も見えない、だから普通は回避なんてできない。

まあ、私が奇襲に使わずに直線的な撃ち方をしてるってのもあるんだけど。

ついでに言えば砲身斜角は、上下左右自由自在。
たぶん、HSのハイパーセンサーで空間の歪み値と大気の流れを探らせて避けてるんでしょう。

「やるじゃん、誰に習つたの？　その大規模高速回避行動」

「・・・できないと、翌日の授業に出られなかつたからなー。」

「ふーん」

ドンッ・・・会話の最中にも、衝撃砲を撃つ。

一夏は私から大きく距離を開けることで、それを回避する。もちろん私は連射するから、一夏は常に私から離れて高速での回避行動を続ける。

本当に、良くやるとと思つ。

IS稼働時間の記録を見たけど、私の3分の1以下。
と言つたか、まだ1ヶ月くらゐよね、ISを動かせるようになつたの
つて。

それでこれだけ動けるんだから、もしかしたら才能があるのかもね。
・・・でも。

「はああつー

「ぐつ・・・ー！」

衝撃砲で回避先を誘導、そこへ一気に加速して踏み込む。
この『甲龍』はパワー・タイプ、それでも鈍重つてわけじゃない。
接近した後、両腕の青竜刀を一夏に叩きつける。
一夏はそれを刀で受け止める、一瞬だけの拮抗。

「・・・あはつ」
「・・・ー！」

『龍砲』、発射

私が動きを止めていたから、一夏は回避行動が取れない。だから、私の衝撃砲をモロに受けて吹き飛ぶ・・・今まで100くらいは削れたかしら？

一夏、アンタ、きつとEISの才能あるよ。

でも・・・まだ、私には勝てない。

砲撃、加速、接近、斬撃、砲撃。

これを3度繰り返す、すると段々と勝負とは呼べないような状況になっていく。

「・・・強いな、鈴」

「当然・・・だつて私は」

「代表候補生？」

「そゆこと」

4度目の砲撃 でも、その後の一夏の反応が違った。

吹き飛ばされると体勢を整えずに、そのまま私から離れて・・・連続で加速を始めた。

スペック上の機動力は、向こうの機体の方が上。

一夏は、アリーナ外周ストレスの所から旋回を始める。

私はそれを緩やかに追いながら、アリーナの内側でクルクル回る格好になる。

言つておくけど、HS操縦者は刃を回して「ぐるぐる」なんてことにはならないから。

一夏の描く円が徐々に小さく つまり、段々と近付いて来る
なつていく。

「・・・は

何か仕掛ける？ 良いわよ、一夏。

・・・迎え撃つて、あげるから！

両手の青竜刀の柄を連結、一つにして頭の上で回転させる。

一夏の姿が、一瞬だけ消える。

それは、私が青竜刀を連結させた瞬間を狙つた急加速。
つまり、『イグニッション・ブースト瞬時加速』！

一瞬でトップスピードに至り、奇襲する戦法・・・だけど『シングルロング甲龍』ヒラコが教えてくれる。

・・・・・後ろおー

「つおおおおおつーーー！」
「・・・はあああつーーー！」

連結青竜刀『双天牙月』を振り下ろしそうと背後を見ると、やつこ一夏がいた。

一瞬、視線が交差した。

両手で大太刀『雪片』ゆきひらを持つて、下段から・・・。

その時、アリーナ全体に衝撃が走った。

私と一夏が衝突したわけじゃない、私達の横を何かが通り過ぎて、地面にぶつかったのよ。

つまり、何かが空から落ちて来た。

な、何・・・アリーナの遮断シールドはどうなつてんのよ・・・・?

Side 一夏

『織斑、凰！ 試合は中止だ・・・退避しろ！』

通信機越しに響く千冬姉の声、だけど俺は何が起こったのか把握できていなかつた。

アリーナの中央には、鈴の衝撃砲どころじゃない威力の何かが突き刺さつたんだ。

俺が作つたやつの何倍ものでかさがあるクレーター、その中央には。

「警告、アリーナ中央に熱源。所属不明のＩＳ、標的認証されます」

『白式』の声、同時にアリーナから爆煙が消える。

観客席から生徒が悲鳴を上げて避難するのが見える、だけどそれよりも・・・。

異形が、いた。

深い灰色の機体、手が地面につくほどに異常に長い。その両手には大砲のようなスリットが入っていて、しかも首と肩が一体化している。

そして2メートルを越える巨体は『全身装甲』、普通はシールドエネルギーがあるから全身を覆う必要は無い。

それをあえてやっている所が、余計に異形さを際立たせていた。

「一夏！」
「おわっ！？」

鈴の声を認識した瞬間、『白式』のすぐ側を赤い閃光が走った。

目の前の侵入者が放つた、極太のビームだつた。

それはセシリ亞よりも威力がある・・・何しろＩＳバトルでビクともしないアリーナの遮断シールドをぶち抜く程の威力があるからだ。

「一夏、試合は中止よ・・・すぐにピットに戻つて・・・
り、鈴・・・お前は！？」

「先生達が来るまで、時間を稼ぐわよ・・・その間にー」

じゃあんつ、とカツ「良く俺を背に青竜刀を構えながら言ひつ鈴。
それは本当にカツ「良いと思うが・・・俺は男だ。
女を置いて逃げるとか、無理だろー」

「馬鹿！ アンタの方が弱いんだから、仕方無いでしょー！」

したら、思いつきり遠慮無く言われた。
いや、確かにわっしきの試合では俺が押されまくってたわけだけどさ。

「私だって、最後まで戦り合ひつ氣は無いわよ・・・大体こんな事態、
先生達がすぐに」

『織斑君？ 凪さん？ ちよ、逃げてくださいよ！？ 今すぐ先生
達が制圧に行きます！ー』

山田先生の声、制圧とは穩やかじやないな。
だけど、先生。

「・・・わっ！？」
「コイツ・・・！」

敵の巨体ISが、見た目よりも俊敏な動きで飛翔、こつちに突っ込

んできた。

一瞬だけ組み合つた鈴が、衝撃の強さに弾き飛ばされる。
おいおい・・・どんだけパワーあるんだよコイツ!?

かく言う俺も『雪片』^{ゆきひら}で敵ISの拳を受け止め・・・きれない!?
ガクンッ、と視界が揺れて吹っ飛ばされる。

敵ISが両手を振り上げると、全身の銃口からゾームの雨を振らせて
てきた。

「ごめん、千冬姉、山田先生・・・逃がして、貰えそうにない!」

Side 織斑 千冬

「もしもし? 織斑君、凰さん? 聞こえてますか!?」

ISのプライベート・チャネルを開いての緊急通信・・・実は声を
出す必要は無いのだが、山田先生はそれを失念する程に焦つている
ようだ。

無理も無い、所属不明のISが乱入して來たのだから。

一旦、冷静になる必要があるだろう。

そこでコーヒーでも淹れようとしたわけだが、何故か「塩」と書か
れた容器が。

・・・何故、こんな所に塩が?

「お、織斑先生、どうしましょ、・・・」

「・・・やることは決まってる。中に突入してガキ共を助ける、それだけだ」

だが、それだけのことが非常に難しい。

アリーナの遮断シールドが戦争仕様に設定されている上、会場に通じる全ての扉がロックされている。

シールド強度が上がったために、観客席の生徒の安全は保障されるが・・・中の2人は別だ。

「あのIISの仕業・・・ですか？」

「おそらくな・・・政府に支援要請はしたが、間に合つまい。シールドの解除は他の先生と3年の精銳に任せているが、何分かかるかわからん」

「そんな・・・」

このIIS学園には、訓練機を含めて30機弱のIISが配備されている。

教員用の専用機も存在するし、中にさえ入れれば事態を收拾できるだろう。

問題は、いつ入れるかだが・・・。

・・・私が、出るべきか・・・?

いや、だが・・・IIS学園のセキュリティを突破できる程の相手が、

何故アリーナに？

狙いは『白式』か『甲龍』か……それとも、操縦者か、コアか。

「・・・織斑先生、私も出るべきでしょうか？」

「いや、必要ない」

「そうですの、承知しましたわ」

オルコットは形式だけ助力を申し出て来たが、私はそれを断る。イギリス代表候補生であるオルコットに万が一のことがあつては困るし、連携訓練時間の不足やビットの運用方法が確立していないと言つ理由もあるが・・・。

オルコット自身もそこまで強い意思表示をしたわけでは無いから、特に問題は無い。

「織斑先生、教員の皆さんとのアリーナ内外への配置、完了です。でも中に入れないでの・・・」

「シールドクラックの時間次第か・・・」

親指の爪を軽く噛みながら、他の対処法が無いか考える。シールドが破れた次の瞬間には、制圧できる。

だがそれまで、一夏と凰が持ちこたえられる確証は無い。

「あ、あら？ 篠ノ瀬さん達はどうに行つたのかしら・・・？」

「・・・？」

オル「ジトの声に振り向けば、確かに篠ノ之姉妹の姿が見えない。

・・・まさか、あの馬鹿共・・・！

「お、織斑先生！ 見てください！」

「・・・どうしました？」

「さ、さっきまでロックされてた会場へ続く扉の一部が、開いて・・・あ、でもまたすぐにロックされてるんですけど」

「何・・・？」

山田先生の手元のティスプレイを覗けば、そこには第2アリーナの地図が。

このピットから・・・これは、中継室までの道か？
通路の一部のロックが一時的に開き、ほぼ同時に再ロックされてい
る。

それも3分ほどの間隔を開けて、2回ずつ。

・・・これは。

ギリッ・・・誰にも気付かれないようこ、奥歯を噛みしめた。

裂帛の気合い、だけど一夏の斬撃は当たらない。

舌打ちしながら、一夏が敵IISから離脱する・・・私がそれを衝撃砲で援護。

敵IISが一夏を追撃する構えを見せたら、今度は私が突っ込む。

ギインツ！

私の2本の青竜刀と敵IISの両腕が交錯する、火花を飛び散らせながら何度も斬り合う。

普通ならあり得ないくらいの運動性能・・・全身に推進機スラスターつけて、どんな変態よ。

しかもこっちの攻撃捌いた後が無茶苦茶、だつて腕をブンブン振りまわして迫つてくるのよ？

「ああ、もう！ 面倒くさいわねコイツッ！―」

叫んで、衝撃砲で砲撃・・・けど、敵IISの腕は見えないはずの砲弾を普通に叩き落とす。

もう二回目、コイツ、いったい何なの？

どこの国がこんな意味不明なIISを、と言うか乗ってる奴って正気なわけ？

「・・・なあ、鈴」

「何よ」

「アイツ、変じや無いか?」

「そうね、変ね」

「そりじゃなくて……何と言つが、機械じみてるって言つがさ」

IISは機械よ、言つておくけど。

まあ、7回も同じ防御、反撃を繰り返してるアイツは、確かに機械じみてるけ……。

「……アイツ、本当に人が乗ってるのか?」

「……無人機、ってこと? あり得ないわ、IISは人が乗らなきや動かない」

「剣道やつてる俺だからわかるんだけど……あんな緩急や乱れの無い動き、人間にできるのか?」

「……無人機、あり得ない。」

でも確かに、人間が乗ってるにしては不自然よね。

今も、私達の会話を聞いてるみたいな……。

「鈴、残りエネルギーは?」

「180」

「俺は60、まともな攻撃は……たぶん、あと一回しかできない」

一夏の太刀『雪片』^{ゆきひら}は、シールドエネルギーを攻撃力に変換して使う武器。

昔、千冬さんが使っていた武器。

でも今は・・・確かに、使えるかもしない。
私の攻撃はアイツのシールドを抜けない、『雪片』ならそれができるかもしない。

仮に無人機だとすれば、全力で攻撃をしてもためらいは無いってわけ。

・・・まあ、この状況ならアレが有人で操縦者を殺しても、罪にはならないと思うけど。

「・・・でも、攻撃が当たらないじゃん、アンタ

「次は当てる」

「言いきつたわね・・・良いわ、援護してあげるから突っ込みなさいな」

「おう」

とは言え・・・素人の一夏が当たられる確率は、一桁あれば良い方よね。

さて、どうやって当てさせるか。

代表候補生の、腕の見せ所よね・・・面白いじゃない。

そして、私と一夏が次の行動に移るのとした時。

心臓が、止まるかと思った。

アリーナには、学園全体に試合の映像を流すための中継室つて場所がある。

アリーナ外周南側の、少しせり上がった場所にあって・・・アリーナのスピーカーを通して、声が。

『男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくて何とする・・・』

「な・・・筹！？」

「ばっ・・・！」

馬鹿じやないの！？

そう言いたかつた、けどそんな暇は無い。

目の前の無人機（仮）が、筹つて子に興味を持ったのか・・・腕、つまり砲塔を向ける。

そこに光が集まって放たれるまで、数秒も無い。

「第 つ！」

一夏の声、突撃する。
けど、間に合わない。

無人機の砲撃が、無防備な中継室を

直撃した。

いてもたつてもいられない、と言つのはいつの心境のことを叫び
のだろう。

気が付いた時、私はピットを飛び出していた。

アリーナへ続く通路は閉鎖されていると聞いたが、それでも・・・。

「ちよちよっ・・・・篠姉さん、もしかしてもしかするけど…冷静
じゃ無い感じ！？」

「・・・何でついて来る！」

「いやいや、むしろ1人で行かないで・・・！」

どう言うわけか、楓までついて来ていた。

ピットから観客席へ通じる道は、避難する生徒で溢れていた。
く・・・これでは、一夏の所に行けないでは無いか！

「ね、姉さんってば・・・・どっちにしろ遮断シールドが
「わ、わかっている！ だがじつとしていられないんだ！」

息を切らせて膝に手をついている楓にそう言つと、ふと気付く。
コイツは身体が弱かつたはずだが、こんなに走って大丈夫なのだろうか。

まあ、授業のランニングなどは普通について来ていたが（その代わり、速くも無い）。

・・・何だかバツが悪くなつて、楓から顔を背ける。

「とにかく、お前は戻れ。良いな」

「あ、ちょ・・・篠姉さん！」

楓をその場に残して、避難する生徒達の間を掻い潜りながら駆け出す。

観客席やピットがダメなら、アリーナに繋がる設備は・・・試合の中継室しか無い。

私は苦労して避難する生徒の中を潜り抜けながら、通路の反対側の廊下へと進む。

少し進むと、鉄製の電子扉があつた・・・当たり前だが。

関係者以外が入れないようになつてているのは、不思議なことでは無い。

やはりここも、入れないのであつか・・・と、思つて扉の前に立つ。

「・・・」

シコツ・・・と音を立てて、扉が開いた。
扉の向こうには、無人の通路が続いている。
どうやら、すでに避難が済んでいるらしかった。
なのにどうして、ここだけ・・・？

・・・考えていても仕方が無い、進もう。

周囲を見渡して、誰にも気が付かれていないことを確認した後・・・中に入った。

後ろで、電子扉が閉じる音が聞こえる。

その後、いくつか扉があつたが・・・全部、勝手に開いた。まるで、誘われているような気さえした。

「一夏・・・」

そして、到着した。

中継室、誰もいないが機材の電源は生きている。

私は実況用のマイクを手に取ると、アリーナの全体スピーカーに繋げる。

アリーナの中央では、一夏とあの中国の代表候補生が、得体の知れない侵入者と戦っているのが見える。

ぎゅっ・・・無意識に、マイクを握り締める手に力がこもった。

「い・・・一夏あつ・・・」

叫ぶと、アリーナのスピーカーを通じて私の声が響く。

観客席から避難している途中の生徒が立ち止まる程の声量、一夏達も気付いた。

見るからに、苦戦している様子で・・・声を出せずには、いられなかつた。

男なら・・・一夏なら。

そんな敵、簡単に、倒せるだろう・・・！
身勝手な願望、そんなことはわかつてゐる。

だけど、言わずには、願わずにはいられなかつた。
一夏は、私よりもずっと強いはずだと。

『篇 つつ！』

中継室の集音機材から、アリーナの一夏の声が聞こえる。
そして次の瞬間、アリーナ中央の敵が手をこちらに向けて。

砲撃。

中継室に爆風が吹き荒れて、私は小さく悲鳴を上げる。
周囲の機材や壁が揺れて、天井部分が吹き飛ぶ。

・・・だが、私自身には傷一つ無い。

何故・・・と、思ったのは一刹那。

「な、な・・・？」

私の目の前に、不思議な物があつた。

私の前と言つたか、中継室の前方に、「それ」は浮かんでいた。
それは6つの剣のような、杭のような物体。

円環状に並んだそれは、『ブルー・ティアーズ』のビットのよつて
も見える。

決定的に違うのが、円状に並んだ剣型のビットの間に不可視の盾の
ような物を形成している所だ。

防御のためのビット・・・ISか？
だが、誰が・・・。

「大丈夫、姉さん・・・？」

声は、すぐ傍から。

首だけ回して振り向けば、そこには自分と同じ顔。
・・・楓？

「大丈夫、篠姉さんは私が守るよ」

私の隣に立っていた楓の身体を、光の粒子が包む。
ぶわっ・・・楓の短い髪が、風に揺れる。
天井を失った中継室の中で。

「だから・・・おいで、『黒竜』」

・・・いく、えい？

次の瞬間、楓の姿が闇色に染まつた。

Side 篠ノ之 楓

身体を締め上げる感触と、コアと意識が融合するこの瞬間。
私はI-Sと一緒に一体化するこの瞬間が、凄く好き。
自分の中に、何かが這入つてくる感触。
ぶる・・・と身体を小さく震わせながら、小さく息を吐く。

目の前に並ぶのは、私とお姉ちゃんが作った第3世代型I-S『黒竜』^{じゅくれい}のスペックデータ。

いくつものディスプレイに、様々な数値が並んでは消えて行く。
ガキンシ、と音を立てて、『黒竜』の腰部のホルダーに剣型ビット
が戻る。

6基あるそれは、特殊な盾を形成する自衛用の刃・・・名前は「黒
翼」^{よく}。

「楓、お前・・・?」

傍らの篠姉さんに、にこり、と微笑んで見せる。

私のI-S、『黒竜』の機体カラーは黒、肩や腰部が丸みを帯びた流
線的なデザイン。

背中にしょった2基のタンクが、可愛いでしょ?

「一夏さん、あと・・・えーと、鳳さん！ 姉さんは大丈夫です・・・
・やつちゅうつてぐだわー！」

オープン・チャネルでISの通信回線を開いて、アリーナの2人に
そう伝える。

中継室、吹っ飛んじゃつたし・・・他に通信手段が無い。
まあ、別に良いけど。

『か、楓か！？ お前、その機体・・・』

『細かい話は後！ やつちゅうつてぐだわー！』

『あ・・・ああつー』

一夏さんが頷くのを確認すると、私は次の行動に移る。

腰部から再びソード・ビットを展開、正面からの衝撃に備える。

篠姉さんを『黒叢』の陰に隠すよつこしながら、私は4つのディス
プレイと4つのキーボードを開く。

「え、援護しないのか？」

「無理、攻撃用の武器が無いから」

「・・・は？」

いや、そんなぽかんとした表情をされても。
姉さんに返したように、このISに攻撃用の装備は無い。

ソード・ビットも防御・自衛以外には使えない。
ぶつちやけ、このHSで戦闘は無理。

模擬戦なんでしたら、10秒で負ける自信があるよー。

でも、篠姉さんが望むなら。

このHSに武装は無い。

でもその代わり、束お姉ちゃん製のセンサー機器類は他のHSとは比較にならない感度・精度を持つ。

元々、宇宙空間で活動する他のHSを支援・補助するのが目的で設計したから・・・。

そして・・・開始する。

「じゃあ一夏さん、行きますよー?」

『何を!?』

「細工は流流、後は仕上げを御覧じろー」

『だから何を!?!』

それ以降は通信を遮断、集中しないと使えない。
ガコンシ、と音を立てて・・・背中のタンクから黒い何かが溢れ出
る。

私の機体を伝つて床に降りたそれは、次第に薄くなつて空中に遙き
消えて行く。

ナノマシン型兵装「黒靄」。

この機体の名前の由来、束お姉ちゃん製作の驚異のシステム。コアへの干渉を可能にする、技術。

コアの開発者である束お姉ちゃんだからこそ、コアに干渉できるシステムを作る。

・・・ただ、私が使つことは手間も時間もかかり過ぎる。

「一夏つ・・・・・」

私が合計8枚のディスプレイとキーボードに視線と指先を集中させている間に、アリーナ中央では戦闘が続いている。中継室近辺にも、流れ弾が飛んでくる。けれどそれは、私のソード・ビットの盾で防げる。

篠姉さんはソード・ビットの盾越しに、一夏さんの戦いを見てる。私のIFSのことも気になるだらうけど、一夏さんの方がもつと気になるのだと思う。

・・・^{口グ}了解、篠姉さんがそれを望むなら。

「・・・行ぐよ、『黒叡』」

その瞬間から、私の意識から全てが消える。

視界に映るのは、必要な時間と工程表。

指先に感じるのはキーボードの感触のみ、それ以外は何も知らない。

何も、いらない。

私と『黒竜』の、2人だけの世界。

・・・と言つかる、アレ作つたの誰？

無人機かあ、それはそれでロマンだよね。

Side 凰 鈴音

ザアア・・・と、耳元で鳴るはずの無い音がした。

ISのハイパーセンサーに一瞬だけ、黒い影みたいなのが映つた。
でもそれらはすぐに消えて、元通りの映像状態に戻る。

「何・・・？」

こんなのは、今まで一度だつて無かつた。

気のせいかとも思うけど、その「気のせい」すら起こさせない高性能
な機械がISよ。

当然、不調でも無い。

だけど『甲龍』のハイパーセンサーには、何も映つて無い。

ただ、周囲の光景がクリアに見えるだけで。

じゃあ、何・・・？

「・・・って、考へてる場合でも無いわね！」

「じぱり・・・と」擬音が合いそうな勢いで、敵ISが光弾をバラ撒く。

全方位攻撃、でも狙点が甘い。
ISの機動力なら避けられる・・・アリーナの地表や壁の各所が爆発する。

ピピッ・・・と中継室の方を確認すれば、あのビットの盾が正面を守っているのが見える。

あの黒いIS、どこの機体？

公式発表されてる機体じゃ無いわよね、日本の機体・・・でも無い

か。

「でやあああああつ！――」

「え・・・あつ、バカ！」

一夏が、エネルギー残量も無いのに突っ込んだ。

近接ブレードしか無いのに・・・案の定、敵ISの太い右腕で受け止められる。

左腕が動く前に私も加速、その左腕に青竜刀を叩きつける。
それで一旦動きが止まる・・・けど。

「・・・」

敵ISの腕の砲塔から閃光が走るのと同時に、私も『龍砲』を撃つ。エネルギーがぶつかり合って爆発、3機が離れる。

「ちょ・・・一夏!? 作戦も無しに突っ込んで勝てる相手じゃ無いでしょ!?

「良くわからないけど、楓が何かするらしいんだ!」

「はあ?」

楓つて・・・あの黒いISの子よね。

確かに凄そうな機体だけど、でもそれが何よ。

「いや、わからん」

「アンタね・・・で、賭け甲斐のある賭けなんでしょうね?」

「いや、わからん」

ぶん殴つてやろうかしらコイツ。

つまり何の根拠も無しに信じてるってわけ?

だとしたら、本当にバカだわ。

・・・ま、一夏らしいけどね。

とはいっても、私もエネルギー残り少ないし、そんなには保たない。実はもう『龍砲』も撃てない、つまり大ピンチ。

それで、面白くなつてきやがつたわねえ……。

「……楓！」
『……口ゲ了解』

タンシ……何かのキーを押す音が、どうしてか耳に響いた。
妙に機械的な返答は、もしかしなくても楓つて子の声。

直後、一夏のHSの様子が変わる。

近接ブレード『雪片式型』ゆきびら・しきがたが、強い輝きを発した。

刃が2つに割れて展開、そこから白いエネルギーの刃が飛び出す。
『甲龍』ショウロンのハイパー・センサーには、『白式』びゃくしきのエネルギー・転換率が
急激に上昇したことを示すデータが映つてゐる。
な、何・・・何で急に？

『エネルギー・転換率90%オーバー！ HSコア稼働率80%突破・

・・一夏さん、やつちやつてください！』

「お・・・おう！ ハイツで斬れば良いんだな！？」

オープ・ン・チャネルで響く楓とか言つ子の声。

え・・・つてことは、一夏のアレはあの子が・・・?
・・・どうやって？

「良し！ 行くぞ鈴！」

「ああ、ひとつ図鑑が無いでさう」

言いながら、すぐに行動。

敵に接近しながら段階的に加速、まず私が突撃。

右隣、
回避した敵。

そしてその背後に、『瞬時加速』で一夏が肉薄する・・・！

「ウチの仕事はおまかせ下さい……」

白いエネルギーの刃を振り下ろす、敵の右腕を斬り飛ばす。
そして返す刀で・・・つて所で。

「
・
・
・
げ

やる気満々で太刀を構えた一夏、その機体からキュウウウウ・・・・
ンって力の抜けるような音。

・・・『白式』
ひやくしき
のエネルギーが、切れた。

え、何それ、その機体つてそんなに燃費悪いの？

次の瞬間、残った左拳が一夏を殴り飛ばした。

「一夏……」

最後の加速、敵ISと一夏の間に割つて入る。

敵ISの砲塔がゆっくりと上がる……エネルギーが切れた今の一夏ならどんな衝撃でもヤバい。

反射的に、倒れた一夏を背中に庇う。

私の機体は、まだ盾になれる……！

「……鈴！」

一夏の声、大丈夫、死にやしないわ。

・・・その後のことは、ちょっとわからないけどさ……！
と、私が映画のヒロイン的に覚悟を決めた瞬間……！

「……へ？」

ガニンッ、ガガガガガガガガ、ガガニンッ！

甲高い音を立てたのは、無人機の装甲。

撃ち込まれたのは実体弾、もちろん私達は装備していない。

一夏に至っては近接ブレードオンリーだしね。

何かと思って顔を上げると、観客席に10機ほどのISが見える。
機体は第2世代型量産機の『打鉄』と『ラファール・リヴィアイヴ』。
武者鎧のような日本製のISとネイビーカラーのフランス製ISが

居並ぶ姿は、何だか壯觀だつた。

その中の1機・・・先頭に立つていた『ラファール・リヴィアイヴ』が、手にアサルトライフルを持っていて、銃口からは煙が上がつてゐる。

「学園の・・・」

私の声が届いたわけじゃないでしようけど、先頭の『ラファール・リヴィアイヴ』の操縦者がアサルトライフルを肩に担ぐ。乗つているのは20代の女性、バイザー型のマスクをしているから顔はわからない。

だけどその機体には、IS学園の校章。

その女性　　たぶん先生の誰か　　が、口を開く。

『ウチの生徒が随分と世話になつたみたいじゃねえか・・・ああ?』

次の瞬間、遮断フィールドで遮られているはずの観客席から、先生達の機体がアリーナに踊りこんでくる。
あ、あれ・・・シールドは?

私が少し困惑している間に、アリーナから撤退するよつよつ冬さんから通信が入る。

無人機は・・・何と言つか。
・・・虐殺?

「・・・そんなわけで、お前達には罰を『えねばならないわけだが。どうだ、嬉しいか？』

誕生日に子供にプレゼントをあげた母親みたいな聲音で、千冬姉がそう言つ。

でも全然、内容は嬉しく無い。

ちなみに俺、鈴、篠、楓の4人がピットで千冬姉に正座させられて・

・・あれ？

「えーと、千冬姉。ひょっとして俺達怒られてる？」

「死にたいのか？」

「生きたいデス」

いや、まあ、かなり無茶したとは思う。

何と言つても、遮断シールドに対するあの無人機の干渉がなくならなかつたら、俺達死んでたかもしけれなかつたらしいし。

・・・試合は当然、無効。
忙しいのに『イグニッシュン・ブースト瞬時加速』や『ホワイト雪片』の使い方を教えてくれた千冬姉には、本当に申し訳ない気持ちだ。

「心配かけてゴメン、千冬姉」

「織斑先生だ」

「……織斑先生、えーと……他の3人はさ、俺を助けようとしてくれただけだし……」「別に心配はしていない」

何でお優しいお言葉。

「……が、凰はもう良いぞ、弟が世話になつたな」「い、いえ、幼馴染ですし……」

鈴の言葉に、隣で正座してた篝がピクッ、と反応する。でも千冬姉の前だからか、大人しい。

千冬姉の前でこれ以上何かすると、逆に何をされるかわからん。
鈴は許され、俺は反省文10枚を言い渡されて解放。
篝と楓は、別件でさらに叱られるらしい。
……楓のIFSについて聞きたかつたけど、まあ、今度で良いか。
たぶん、束さんに貰つたんだと思うし。

「あー……鈴、すまん、いろいろと」「もう良いわよ……私だって、ムキになつてたしね

千冬姉の説教でグロッキーだからか、鈴も何だか素直だった。

・・・あ。

「あー・・・思い出した、約束。正確には『料理上手になつたら、私の酢豚を毎日食べてくれる?』だつたよな」

「う、うん・・・ま、まあ、ほら、誰かに食べて貰うと上達するでしょ? それだけよ・・・ほ、本当にそれだけだからねつ!」

「お、おう・・・まあ、あの親父さんに習つてんなら、上手くなるだろ」「

ピットから更衣室へ続く廊下を2人で歩きながら、ポツポツと話す。そんな中で、俺は鈴がてつきり親父さんに料理を習つてんだと思つてたけど・・・鈴の両親が離婚して、親父さんとは1年以上会つていないつつことを初めて聞いた。

「家族つて、難しいよね」

深いため息を吐きながらそう告げた鈴の顔が、とても印象的だった。

家族・・・家族、俺にとつては、千冬姉だけだ。

家族を、篠や楓、鈴や俺に関わる人全部を守りたくて、HSの訓練も耐えてきたけど・・・。

良くはわからないけど、あのエネルギーの刃・・・『零落白夜』も出せたけど。

実際には、エネルギー切れ起こしてお荷物だ。

・・・強く、ならないとな。

今日一日で、俺は改めてそう思った。

Side 篠ノ之 篇

・・・私達が織斑先生の説教 反省文・各方面への謝罪文その他 などから解放されたのは、一夏達が解放されてからもう3時間、夜10時を過ぎてからのことだつた。

危険地帯に自ら飛び込んだ馬鹿、織斑先生に15回ほど連續で言われて流石に落ち込むが。

「まあ、今回は緊急事態だ・・・本来は正式に罰則を下される所だが、今日の所はこれで勘弁してやるつ」

とのことで、何とか解放された。

本来なら停学を飛ばして退学でもおかしくは無いが、諸事情でそれもできないそうだ。

織斑先生は理由を告げなかつたが、私にはわかる。

私達姉妹が、「篠ノ之束」の妹だからだ。

姉さんの存在は、それだけ重い。

嫌だと思っても、消えてなくなるわけじゃない。

そしてそれが、自分を守っている。

・・・都合の良い時にそれに助けられ、また甘える自分が本当に嫌になる。

「ああ、篠ノ之・・・ああ、ややこしいですね、篠さん。寮の部屋の調整が付きましたので・・・明日中に、お引っ越ししてくださいね?」

「え・・・?」

「返事はどうした、篠ノ之姉」

「は、はいっ!」

去り際、山田先生に一夏とのど、同居が終わったことを知らされた。そ、そつか・・・まあ、普通はそうなる、よな、うん。自分にいろいろと言い訳しながら、私はアリーナのピットから出て行つた・・・。

「あはは・・・ゴメンね姉さん。私、出て来た意味、あんまり無かつたよね・・・?」

一緒に解放されたわけだから、当然、寮までは楓と一緒にだ。正直、こちらもどう接したら良いのかわからない。いや、楓自身をどう・・・とかは、思っていない。だが・・・。

「・・・あ、このHSはね、私が束お姉ちゃんと一緒に作ったんだよ。基本設計は私・・・可愛いでしょ？」

「か、可愛い・・・？」

「うん！」

可愛い、と言つのはわからないが・・・待機状態なのだろう、左手の黒いひし形の指輪を見せて来る楓の顔は、笑顔だった。織斑先生に叱られた直後だと言つのに、へら、と笑みを浮かべている。

その笑みは・・・昔見た、あの人の笑みに重なつて見えた。

そして、HS・・・姉さんと一緒に作つたと言つ、専用機。国籍は無い、所属は・・・「篠ノ之束の個人所有」。

正直、国際HS委員会や政府が黙つていなかうと思つが・・・そこまでは、私にもわからない。

だけど・・・。

「あ、それとね・・・実は、束お姉ちゃんから、伝言があつて・・・ずっと言わなくちゃって思つてたんだけど・・・」

「伝言?」

「・・・『篠けやんのも、けやあんと用意してあるからね』・・・だつて」

私のも、用意してある・・・その言葉の意味を。私はおそらく、正確に把握している。

「じ、じゃあ・・・おやすみなさい」

私はパタパタと寮の中に駆けて行く楓の後ろ姿を、見つめるしかできなかつた。

・・・私は。

姉さんには、頼りたく、無いのに・・・。

あの人には、だけは。

Side 千冬

ガキ共への説教を終えた後、私と山田先生もアリーナから移動する。学園の地下50メートルの地点にある、特殊区画。

レベル4の権限を持つ人間しか入れない、隠された空間。

例の試合に乱入してきたISが運ばれ、解析されているのもここだ。私が一夏や篠ノ之姉妹を留めている間に、全てが進行していたわけだ。

それに、私の権限ではアイツらに叱責以上の罰は「『えられない』。

「・・・解析結果、出たようです」

「ああ、どうだつた?」

「はい、アレは・・・無人機です」

世界中で様々な国が技術の粋を集めて開発しているIS、それにはまだ確立されていない技術もある。

その内の一部が、リモート・コントローラ・タンド・アローン遠隔操作と独立稼働だ。

つまり、ISの無人化・・・判明した時点で、学園関係者に緘口令が敷かれた。

もしこの技術が外に漏れれば・・・。

「・・・コアは？」

「未登録・・・467の登録コア以外の、新しいコアです」

「そうか・・・」

自壊システムが組まれていたのか、解析した段階で機能中枢のデータは全てデリートされていた。

積まれていたISコアは、現時点ではただの素材の塊に過ぎない。つまり・・・現段階では、確たることは何も言えない。

だが、ISのコアを作るのは世界でただ一人。

もちろん、決めつけるのは危険だが・・・。

「それにしても・・・楓さんの専用機、やっぱり問題ですよね」

「・・・ああ」

今回、篠ノ之妹は姉を守るためにISを使った。

基本的なスペックデータは他の専用機持ち同様、学園に提出されて

いる。

束の個人所有の「コア」と機体、と言つことで・・・委員会と政府も扱いに苦慮しているようだが、束がはつきりと「これは私のだ」と宣告している以上、手は出せないだろう。

・・・やり過ぎるなと言つたはずだぞ、束。

篠ノ之妹の専用機「黒鷹」の能力は、ナノマシンによるコアの活性化だ。

それが、ISのコアに直接干渉する・・・そしてISの稼働率を高め、ワンオフ・アビリティ単一特殊技能に目覚めさせるだと・・・？

それは、下手を打てば世界の軍事バランスを崩しかねない程の能力。

「・・・」

今回、土壇場で無人機側からの遮断シールドへの干渉が止んだ。

それが無ければ・・・教員部隊はアリーナへ突入できなかつただろう。

どうして急にシールドのロックが解除されたのか、わからない。

・・・タイミングとしては、一夏が『零落白夜』を出した次の瞬間に干渉は止んだ。

まるで、目的は達したとでも言わんばかりに・・・。

・・・結果論、だが。

家族が死ぬのは、寝覚めが悪い。

そういう意味では、助かつたと言つべきなのだろうが。
気に入らない、な・・・。

「織斑先生、何か心当たりでも・・・？」

「・・・いや、無い・・・今はまだ、な
ていた・・・。

第5話・「クラス対抗戦」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、ようやく活躍できましたー。

いやは、まあ、あんまり意味無かつた氣もするですけど。
ちにみに、無人機の動きを止めたのは私じゃ無いですよー。

だから千冬姉様、そんな探るような田で私を見ないでくださいよー。

篠ノ之 束：

むむ？ ちーちゃんが楓ちゃんばっかり？

むー、ちーちゃんを誑かしたのはこのせっぺかー！？

篠ノ之 楓：

へ？ ちょ、束お姉ちゃん、出番はいつも後書き最後……ついでに
あああっー？

篠ノ之 束：

げつへへへー、口ではいつ言いながらも身体は正直だのー。

篠ノ之 楓：

うみやみやみや、ふおつぶいふえふあー！

*助けて、篠姉セーん！

織斑 千冬：

・・・馬鹿共が。

過去編・「運命のクリスマス」（前書き）

思つて、キャラクターには歴史を積まないと……。
と言つわけで、ここはちょっとぴり過去編です。
では、どうぞ。

過去編：「運命のクリスマス」

過去編：「運命のクリスマス」

それはまだ、篠ノ之 束によつて変革される前の時代。

IS学園はあるか、人々がまだ「IS」と言つて兵器の存在を知るはずも無かつた時代。

世界が、1人の天才の「遊び場」になる前の時代。

3人の姉妹と2人の姉弟が、まだ共に在つた時代。
まだ・・・何もかもが台無しになる、直前。

これは、そんな時間の物語

。

少年と少女が、向かい合つている。

いや、少年と少女と言つこともできない程に幼い2人は、男の子と
女の子と表現すべきだろう。

年の頃は、小学校に入学したかどうか・・・5、6歳ほどだろうか。

1人は黒髪の男の子で、活発さを表すように髪の所々がピンピン跳
ねている。

女の子はリボンをつけたポニー テールで、幼いながらもすでに凛と
した雰囲気を備えている。

2人が着てている物は道着であり、手に持っているのは竹刀。そして立っているのは、冬の空気が冷たい板張りの剣道場……。

「今日は、俺が勝つ！」

「ふん」

「・・・だあああああっ！」

鼻で笑われたのが気に入らなかつたのか、男の子はすぐに竹刀を大きく振りかぶつて斬りかかつた。まだ剣道を始めて間が無いのか、その行動はどこか直線的で直情的だつた。

対する女の子、こちらは慣れているのか、冷静に相手の剣先を避けて竹刀を横にして・・・。

べじっ、べしゃっ。

見事に胴が決まり、男の子が剣道場の床に沈む。

それから女の子が型を崩した瞬間、男の子はがばりと身を起こした。その顔は、悔しさで真っ赤になつてゐる。

「あ、明日は俺が勝つからな！ 節！」

「ふん、その明日はいつ来るのだろうな、一夏」

いつも同じ問答をしているのか、男の子

織斑 一夏と、女の

子 篠ノ之 篠は、どこか慣れたような雰囲気を漂わせている。一夏にしてみれば女子に勝てないと言つのが我慢できず、篠にしてみれば剣道場の娘として始めたばかりの一夏に負けるわけにはいかない、と言つ事情がそれにあるわけだが……。
お互にそれを察せられる程には、まだ成長していない。

「・・・くります？」

「んだよ、知らないのか？ 千冬姉が言つてたぞ、ケーキとか食う日だよ」

2人しかいない剣道場で、自分の道具を手入れしながら 篠ノ之道場の伝統である 一夏と篠は1・2月2・5日と言つ今日、クリスマスの話題に興じていた。

厳密にはクリスマスはケーキを食べる日では無いわけだが、そこは子供、細かい点は無視である。

「けーき・・・？」

「知らねーのか？」

「ば、馬鹿にするな！ それくらいは知つていいー！」

もちろん、篠はケーキと言う食べ物は知っている。

ただ家が神社でしかも剣道場なため、クリスマスと言つ習慣とは無縁なのである。

篠自身、そう言つナヨナヨしたイベントは好みないわけだからして・。
・。

「・・・簫姉さん?」

その時、2人きりだつた剣道場にもう1人、客が現れた。

いや、客と言うのもおかしい・・・何故ならそれは、ここ篠ノ之神社の娘の1人なのだから。

名前を。

「楓!」

妹の名を呼んで、簫が立ち上がる。

そして道場の入口まで駆けて行く小さな背中を、一夏はほんやりと眺めていた。

ああ、明日は勝ちてえなあ

と、そう思いながら。

篠ノ之 楓と言つ名の少女

女の子は、どこか儻げな印象を受ける子供だった。

おかげの黒髪に、日の光に当たつたことが無いかのような白い肌。道場の引き戸に半分隠れている小さな身体には、白い襦袢を纏っている。

どこか不安そうだった表情は、姉である篠が駆け寄つてくると明るい物に変わる。

普通なら口が差したような明るさとして表現する所だが、この女子の場合は雪に月明かりが反射したような、静かな明るさと言つのが相応しいだろう。

姉・・・篠がその薄い肩に触ると、妹の身体がひどく冷えていることに気付く。

「ダメじゃないか、寝ていないと・・・こんなに冷えて」

「大丈夫だよ、今日は気分も良いし・・・空気が冷たくて気持ち良いくらい」

「ダメだ、昨日もそう言って熱を出したばかりじゃないか」

蚊の鳴くような小さな声で応える楓に、篠は厳しい言葉を返す。篠は、真っ赤な顔をして目を回していた昨夜の妹の様子を覚えている。

そんな姉の気持ちはわかっている物の、楓は姉のよう動き回りたいと言う気持ちを抑えられない。なので、割と揉める2人でもあった。

「篠、俺もう帰るぜー？ 千冬姉がうるせーから」

「あ、ああ、また明日な」

「おーう・・・ちゃんと寝てろよ」

最後の言葉は楓に向けて、一夏は姉妹の傍を駆け抜けて行った。

彼は彼で、自分の姉の待つ家へと帰りたくなったのである。
篠はそれを目だけで追つた後・・・再び妹を睨んだ。

・・・なお篠本人は睨んでいるつもりは無いのだが、ツリ目のため
かそう見えてしまうのである。

そこは、本人も少し悩んでいる様子である。

それはそれとして、篠は楓の背中を押しながら。

「ほら、早く部屋に戻るんだ」

「篠姉さん、今日はケーキ食べるの・・・？」

「何だ、聞こえていたのか？ うちは神社だぞ、ケーキなんて出ないに決まっている

「あ・・・そう、なんだ・・・」

篠に背を押されながら、しょぼん、と沈む楓。

そんな妹の様子に片眉をピクリと動かしながらも、篠は楓を部屋の布団に戻そうと・・・。

「・・・こほっ、こほっ・・・」

「ああ、ほら。早く布団に入つて寝るんだ、また熱が出るぞ

「・・・うん」

軽く咳き込み始めた楓の背中を撫でてやりながら、篠は心配そうに

楓の顔を覗きこむ。

少し赤みを帯びた頬が、白い肌に映えて妹の可憐さを彩つている。

だがそれが良く無い 体調を崩す 兆候である」とを知つてゐる筈は、心配でならなかつた。

身体の弱い末の妹、楓。

一日のほとんどを布団の中で過ごす、双子の妹。

・・・この時、筈は妹のために小さな、そして大きな決断をした。

カシャンッ・・・多少くぐもつてはいる物の、陶器が割れたような音が響く。

そして実際、ような、では無く割れた物がある。

新聞紙に包まれたそれを丁寧に扱うのは、幼い少女・・・筈だった。

側には小さなトンカチがあり、新聞紙の包みからは薄桃色の陶器の破片が出て來た。

そして破片に塗れるような形で、何枚かの硬貨が見える。

薄桃色のそれを繋ぎ合わせると、豚のような形になつたかもしだい。

とじのつまり、豚さんの貯金箱を割つたのである。

「ひい、ふう、みい・・・の・・・」

たどたどしい手つきで数を数えながら、筈は膝の上に置いていた赤

いがま口に硬貨を大事そつにしまつている。

それは、箒が今まで貯めて来たささやかな貯金だった。

それを今日、使う。

・・・妹のために。

「・・・良し」

がま口を首から下げて、部屋を飛び出す箒。

隣の部屋　　楓が寝ている　　の方を見て、箒の表情は決意の色に染まる。

そして・・・。

「箒ちゃん、 ビーに行くのぉ～？」

縁側に面する部屋の襖が開いたかと思つと、ズルズルと何かが這い出て來た。

のんびりした動作と口調、しかし伸ばし放題になつた長い髪が廊下の板に広がつていて、幼い箒は少し怖かつた。

「姉さん」

「堅いよー、楓ちゃんみたいにお姉ちゃんって呼んでよー」

「・・・嫌だ」

「えええ～」

黙々つ子のようにその場で「ロロロロ」といるのは、篠ノ之 束と言う名の少女だった。

篠ノ之家の長姉であり、風変わりな娘として周囲から敬遠される。

とは言え、2人の妹にはいつも優しい、そんな姉だった。

どこかの村娘のような、村人のような、黒い西洋風のドレスのような服。

コンセプトは、「一人ヘンゼルとグレーテル」。

年齢の割に豊満な胸が、窮屈そうにブラウスの中に納まっている。

「むぎゅー」

「ね、ねねね姉さん、離して……」

「お姉ちゃんって呼んでよー」

「・・・

「んー?」

束に身体を掴まれて引き倒され、柔らかな姉の身体の上でモフモフされる筈。

その顔は、トマトのように赤い。

でも嫌がられてはいない、だから束も「ーー」と笑っている。

筈は右に左に視線を彷徨わせた後、普段からは想像もできない程に小さな声で。

「・・・お姉、ちゃん・・・」
「か・・・可愛い　！」

「ね、姉さん、ね・・・つ！？」

散々姉に抱き潰された後、篠は息を荒げながら束から離れた。

束は二コ一コと上機嫌そうに笑っていたが、篠の首に下がったがま
口を見て首を傾げる。

はて、どこかに行くのだろうか？

「篠ちゃん、どこに行くの？」

「ちょ、ちょっと商店街まで・・・」

「しょーてんがい？」

うん？ と首を傾げる束。

篠は少し恥ずかしさが残っているのか、赤い顔のまま姉に背を向け
て駆け出す。

「静かにしててね、楓が寝てるんだから！」

「え、うんー」

頭の上に「？」をいくつも浮かべながら、束は活発な妹を見送る。
この時点で、1人を除いて並ぶ者が無い程の才能を發揮している彼
女。

そんな彼女をしても、人の心は複雑怪奇にして摩訶不思議、その深
さの全てを知ることはできない。

だからこそ、興味がある・・・相手が大事な妹となれば、なおさら。そう思い、束はもう1人の妹が寝ているであろう隣の部屋へと視線を向けた・・・。

織斑 千冬と言つのが、その少女の名前だつた。

艶やかな黒髪、はつとするほど整つた顔、雪よりも白く映えるきめ細やかな肌。

モデル並の長身を学校の黒い制服で包むその姿は、男女を問わず通りすがる人々の視線を惹きつけてやまない。

鋭さとキツさを併せ持つ切れ長の瞳は、吸いこまれそうな程に美しい黒。

彼女がそこにいるだけで、周囲の空気までもが張りつめた物になりそつな程だ。

実際に声をかける勇氣ある男性もいるが、その全てが視線一つで追い払われてしまう。

そんな彼女の心配事は、たつた一つ。

「・・・遅くなってしまった。一夏も腹を空かせて待つていいだろ

う

ポツリと呟いたその言葉にだけは、鋭さとは無縁の温かな感情が見え隠れしている。

特に「一夏」・・・弟の名を紡ぐ時、その表情に浮かぶ感情は冷厳さよりも温かさの方が勝っているように思える。

そんな彼女の手には、大きく膨らんだ買い物袋。

彼女が今まさに商店街で購入した食材であり、今日の夕飯の材料である。

料理はあまり得意では無い千冬だが、クリスマスくらいは弟に温かい食事を食べさせてやりたい。

両親が蒸発して以降、弟の世話だけが千冬にとって・・・。

「・・・うん？」

商店街の端にまで来た時、千冬は足を止めた。はたと立ち止まって見つめるその先には、剣道着姿の小さな女の子がいる。

道行く人の多さに戸惑っているのか、酷く困っている様子だった。普段なら気にも留めない千冬だが、それが良く知る顔だつただけに無視はできなかつたのである。

「・・・笄？」

「あ・・・千冬さん」

そこにいたのは、笄だった。

千冬にとつては通つてゐる剣道場の娘であり、たばね 親友の妹である。

加えて言えば、千冬の弟の友達でもある。

「どうした？」

「あ、その・・・」

胸の前で手を握り締める簫に、千冬はしゃがみ込んで視線を合わせる。

いつも明瞭な受け答えをする簫にしては珍しく、どうも言ことばれそうである。

千冬は内心で頭を搔きながら、根気強く待った。

だがむしり、幼い簫は千冬の視線の鋭さに気圧されていたわけだが・

・・・

・・・この点、千冬と簫は共通の悩みを抱えてることと言える。

「・・・実は・・・」

やがて、ポツポツと簫は自分が一人で家を出て来た理由を告げる。それを聞いた千冬は、話の最中に頭きを返しつつ事情を了解した。簫が行きたい場所は・・・。

「・・・思へわかった」

ぽんつ、簫の頭に手を置きながら、千冬は厳格に告げる。

「では一緒に行こう、ちょうどうちの予約した分を取りに行く所だ」

「……い、良いん、ですか？」

「構わないさ」

そこで初めて笑って、千冬は立ち上がる。

そして簫に手を差し伸べると、簫は戸惑いつつもその手を取った。

2人は手を繋いだまま、商店街の雑踏の中に消えた。

・・・なお結果として、簫が持っていた分のお金では目的の物は買えなかつた。

千冬が簫から受け取った分にそつと100円玉を足してレジの店員に渡したのは、また別の話である。

「・・・つたく、千冬姉はどうに行つたんだよ」

たつたつたつ・・・と道を走りながら、一夏は不満そうに唇を尖らせる。

家にいるはずの姉の姿は家に無く、一夏は姉を求めて近所を駆けずり回っていたのだ。

本人は絶対に認めないが、つまりは姉が恋しいのである。

簫と楓を見て、影響されたのかもしれない。

「・・・つたくよー、筈はよー」

思い出したせいか、一夏は別の意味で唇を尖らせる。
寒い冬の空氣の中で、一夏はどうしたら筈に勝てるかを考える。
・・・が、妙案は何も思い付かなかつた。

「あーくそー・・・勝ちてえなあ、勝てねえかなあ・・・」

元々、姉の千冬に無理矢理やらされていた剣道。
だが、筈の存在が一夏のやる気を刺激している。
同じ年の女の子に勝てないと語るのは、幼い男の子のプライドに大きな傷をつけているのである。

だが実直な姉の影響か、一夏は原因を自分の力不足に求める。
筈のことは気に入らないが、それで筈自身をどうこうとは思わない・
・・。

「・・・あ?」

いくつか角を曲がったあたりで、一夏は足を止める。
目を細めて先を良く見ると・・・。

・・・そこに、数人の男子に囲まれた筈の姿を見つけた。

商店街で千冬と別れた後、筧は急いで家に戻ろうとしていた。

もうすぐ日が暮れる時間で、トタトタと走る。

もつとも、子供なのでそれほど速くは無いが……。

あと少しで神社……家につくと言つ所で疲れたのか、肩で息をしながら立ち止まる。

はあ、はあ……と息を吐きながら、筧は自分の胸元に視線を落とす。

そこには、両手で大事そうに抱えた白い箱があった。筧はその箱を見ると、かすかに笑みを浮かべて……。

「あ、男女だ！」
「本當だ、男女がいるぞー！」
「・・・？」

その時、道の向こう側から2、3人の男子がやつてくるのが見えた。筧と同い年の男子で、筧も知っている顔だった。

かと言つて、それは仲が良いことを意味しない。

そもそも仲が良ければ、筧のことを「男女」とは呼ばない。

「おーい、男女、今日は木刀持つてないのかよ」
「喋り方も変だもんな、俺知ってるぜ、武士つて言つんだ」
「武士つて男だもんな、やっぱり男女だよな」

木刀では無く、竹刀だ。

だがそれを訂正する気にもなれない、篠は今度は本当に相手を睨んでいる。

剣道を習っている篠は、基本的に同じ年の男子よりも強い。それが原因で、いつも喧嘩とは何度もあった。

「あれ？ コイツ今日リボンしてるぞ、男女のくせに」

「わっ、ほんとだ～、似合わねー」

篠は普段から髪を縛つているが、基本的にリボンはつけない。リボンをつけるのは、一夏との稽古の日だけだ。

だがそれにも、篠は手にした箱を抱き締めるだけで何も言ひ返さない。

「・・・何だ？ その箱」

「・・・つ、触るな！」

ぱあんつ・・・乾いた音が響く。

篠の持つ箱に触ろうとした男子の顔を、篠が片手で張った音だ。頬を張られた男子は少しよろめいた後、顔を押さえながら。

「な・・・何すんだよ、コイツ！」

「やつちまえ！」

男子達が簫に掴みかかるつとして、そして簫が両手で箱を庇おうとした時・・・。

「よつてたかつて、何してんだお前ら」

「・・・一夏！」

家に帰つたはずの一夏が何故ここに、と言つ疑問を簫が感じている間に、一夏は3人の男子相手に喧嘩を始めた。簫も加勢したかつたが、両手が塞がつていてできない。

・・・と言つたが、剣道に加えて千冬に武術の基礎の基礎を習つている一夏は、途中から3人の男子を一方的に殴つていた。むしろ、一夏が苛めているように見えるから不思議である。

「ば、パパに言い付けてやるからなー！」

「お、覚えてるよー！」

「へつ、おととこきやがれつてんだ」

覚えたての言葉を無駄に使いながら、一夏は舌を出して男子達を追い払つた。

流石に無傷では無いが、逃げて行く男子達に比べれば軽い物だった。ぐいっ・・・手の甲で頬を擦りながら、一夏は「へつ」ともう一度鼻で笑う。

「い、一夏……」

「ん？ ああ、大丈夫かお前」

「あ、ああ……」

どことなく視線を彷徨わせながら返事をする簾、一夏は心の中で「へんなやつ」と思つが、それを口にはしなかつた。

「べ、別に、お前の助けなんていらなかつたんだ」

「別にお前を助けたわけじやねーよ。ただ男のくせによつてたかつてつてのが氣に入らなかつただけだ、勘違いすんなよ」

「ふ、ふん。そうか、それなら良いんだ」

そつぽを向きつつも、簾はチラチラと一夏のことを見る。

一夏は逆に、頭を搔きながら簾から田を離す。

簾は、箱をぎゅっと抱き締めながら……。

「あ・・・あ、あり、ありが「ああ、それよりやあ」と・・・何だ
？」

「千冬姉、知らね？」

「・・・・・・・・・もひつ、帰つてると思つた。むつき商店街で別
れた」

「マジ！？ ヤツベ・・・・」

「あ、おこ・・・・」

そのまま別れも告げず、一夏は一旦散に駆けて行く。
伸ばしかけた手を引っ込んで、篠はそんな一夏の背中を見送る。
一夏としては、千冬に叱られたくないがための行動である。
とは言え、篠としては拍子抜けも良い所だった。

「じゃーな、篠！ また明日な」
「・・・ああ！」

それでも、一夏の声に手を振つて応じる。

また明日、その言葉があればそれで良かつた。

篠は手を振つた拍子に落としかけた箱を、慌てて持ち直す。

再び顔を上げた時には一夏の姿は見えなくなつていて、溜息を吐く。

・・・それから、思い出したかのよう駆け出した。

家へ・・・妹の、所へ。

軽く咳き込む音と、熱に浮かされたような呼吸。

姉によつて布団に押し込められた後、やはりと言つか向と言つか、楓は体調を崩していた。

篠が心配していたように、身体を冷やしたのが不味かつたのかもしない。

母親は風邪だろ？と言い、楓に少量のおかゆと薬を飲ませた後、楓を寝かしつけた。

楓が目を覚ましたのは、夜になってからのことだった。障子の向こう側は真っ暗で、自分がまた1日を布団の中で過ごしたことを嫌でも思い知らされた。

それが幼い楓には辛くて悔しくて、仕方が無かつた。

「・・・はあ・・・」

熱を孕んだ吐息を漏らして、楓は半身を起こす。

その時、はらりと額に乗っていた濡れタオルが落ちる。

それから体調を崩した時に特有の寒気を感じて、自分の身体を抱くようになります。

楓は思う、幼いながらに。

自分がもつと、いや、ほんの少しで良い。

丈夫な身体で生まれて来ていれば、良かつたのに。

「お姉ちゃん達は、良いな・・・」

2人の姉は2人とも、病気とは無縁の生活を送っている。

上の姉は良く分からない人だが、とても頭が良くて明るい。

下の姉は楓の憧れで、毎日を健康に健全に生きて、剣道では年上にも勝つ程と言う。

2人の姉はあんなにも、輝いているのに・・・。

「…………」「やんにゅ」「やーん……」

「え・・・?」

その時、楓の寝ている部屋の襖がゆっくりと開いた。暗がりの中、そこから頭を出したのは・・・大きなクマさんだった。クマなのに何故「にゅ」なのかは、不明である。

「にゅにゅにゅ、おはよう」「やーん」

「・・・束、お姉ちゃん?」

「ギクウツ! 何故にバレたにゅ?」

楓よりも大きそうなクマさんの影から出て来たのは、束だった。楓が起きるのを待っていたのかどうなのか、そそくさと部屋の中に入ってきて・・・。

幕と同じように、楓を抱き潰しにかかった。

「にゅかる~ん、楓ちゃんは可愛いなあ

「わふっ・・・!」

「ん? んん~? 楓ちゃん、身体がポカポカだね。どうしたの、オーバーヒート?」

普通に熱っぽいだけである。

「ほいほーこ、お姉ちゃんからのクリスマスプレゼントだよ」
「・・・くません?」

「むふふ、見て見て楓ちゃん! これねえ、ここを押すと~
『やふー、束お姉ちゃんだよん~ 今日もうぶりい?』

「ほりほり、お姉ちゃんの声で喋るんだよ、凄いでしょー?」

「う、うん・・・」

これでいつもお姉ちゃんと一緒にだからね、と笑う束の顔を、楓はとても眩しそうにしながら見上げる。
束は、本当に何でもできる。
自分とは、大違ひだと想いながら・・・。

「・・・お姉ちゃんは、凄いね」

「うん? むふふ、そりゃあ天才の束さんだからね。仕方無いよ、
お姉ちゃんが凄いのは生まれた時から決まってる事だもん。で、
で? 嬉しい? 楓ちゃん嬉しい?」

「う、うん、ありが「楓ちゃん可愛いー!」もががが・・・」

むぎゅう、と抱き締めたり頬をスリスリしたり、やりたい放題な
姉であった。

とは言え、束の体力に楓がついていけるはずも無く・・・。

「・・・」

「おやおや? 楓ちゃん風邪? キヤツチコールド?」

「ん・・・ぐすつ・・・」

すんすん、と鼻を啜りながら咳き込む楓を、束は不思議そうに覗き込む。

「お姉ちゃんは、良いな・・・」

それは、羨ましさを通り越して羨望ですらあつた。
外を走りたい、遠くに行きたい。
自分の足で駆け回って、いろいろな所へ。

「楓、お外で遊びたい・・・」

「ふーん、そうなの。変なお願いだねえ、ふうーん

束は首を傾げて妹を眺めた後、ふむつ、と腕を組んで思考の海に沈む。

ぼく、ぼく、ぼく・・・ちーんつ。

あれにそのような感じで、ほんつ、と手を打つ束。

「おーけー、おーけー、任せて楓ちゃん。お姉ちゃんがぜえんぶ、
何とかしてあげるからね。大丈夫、束お姉ちゃんは世界一の大天
才だかんね、ドクターゲ も真っ青さー」

「どく・・・?」

「うんうん、楓ちゃんはなんにも、心配しなくて良いからね。全

部お姉ちゃんがやつたげる、何もかも隅から隅まで塵一つ残さず、綺麗さっぱり全部！ うん、もういつそのこと星の外まで行っちゃう感じで・・・ああ、うん、良いねそれ・・・

ぐしごしごし・・・妹の頭を撫でて、束は立ち上がる。

鼻歌など歌いつつ出て行く姉を呼び止めようとするも、楓の小さな声は届かない。

「ほつ・・・小さく咳き込みながら、楓は姉を見送るしかなかつた。

上の姉の考えていることは、幼い楓にはわからない。
ただ、疲れたように息を吐いて・・・。

「・・・楓？ 今、姉さんが来ていたのか・・・？」

そして、もう1人・・・下の姉が、楓の部屋を訪れた。
その手に、小さな箱を持って・・・。

「・・・ほり」
「・・・？」

そつぽを向きながら簞が押しつけて来たのは、小さな白い箱だった。

押しつけられる格好となつた楓は、不思議そつな顔で手元のそれを見る。

何かが入っているのか、少し重い……。

「これ、何……？」

「良いから、開けてみろ」

そっぽを向いたままさういひげる姉、楓は小さく首を傾げながら箱を開ける。

そこには……。

「わあ……」

そこには小さな苺のショートケーキが、一つだけ入っていた。
しかも、砂糖菓子のサンタがちょっとこんと鎮座している。

楓の目が、一瞬だけ輝いて見えた。

筈は妹が目を輝かせるのを見て、少しだけ嬉しそうな顔をしたのだが……。

楓が自分のことを見ると、慌てて仏頂面でそっぽを向くのである。

「は、早く食べろ。父さんに見つかったら、叱られるや」
「う、うん」

付属のプラスチックのフォークを使って、楓は小さく切り取ったケーキを口に含む。

クリームの甘さと、熱とは別の種類の赤みが頬にさす。

本当は、体調が悪い時にケーキは食べない物だが・・・。

「う、美味しいか？」

「うん、うん・・・」

「そ、そうか。もつと食べな」

「ん、ん・・・」

□一杯にケーキを詰め込んで頷く妹に、篝はほつとしたような表情を浮かべる。

その時、不意に楓は篝を見た。

そして少しだけ首を傾げて・・・。

「・・・篝さんは、食べないの・・・？」

「わ、私は・・・」、ここに来るまでに食べてしまつたのだ。だから気にするな・・・ほら、早く食べろー」

「う、うん・・・」

姉に急かされて、楓は慌ててケーキを食べるのを再開する。

・・・本当は、篝もケーキを食べたかったのだが。

それでもケーキを食べる楓を見ていると、篝は小さな胸に温かい何かを感じることができた。

第にとつて、楓は守るべき大切な妹で。

その妹を喜ばせられるのが、どうしようも無く嬉しかった。

それは・・・そんな夜の、出来事だった。

クリスマスから幾日かが過ぎて、年も改まつたある日。千冬は篠ノ之神社への初詣のついでに、唯一とも言つても良い親友を訪ねた。

両親や妹まで 例によつて寝込んでいる楓は別として が忙しくしている中、巫女としての役割を欠片も果たしていない親友を。

「束、いるのか？」

勝手知つたる何とやら、居住スペースの屋敷の縁側を歩きながら、千冬は束の名前を呼ぶ。

普段はやかましいくらいに付きまとつて来る親友が、この一週間は音信不通。

本人は認めないだろうが、千冬も心配になつてきていたのである。

そつこりしへいる内に、束の部屋の前に到着する。耳を澄ましてみれば、部屋の中からは何かの電子音や何かを削つているような音が響いている。

和風の家には、似つかわしく無い音だった。
とは言え、それは今に始まつた話では無い。

「束、入るぞ」

千冬は軽く眉を顰めて襖を開けて・・・結果、さらに深く眉間に皺を寄せる事になる。

意外と広い畳の部屋、そこには・・・。

白銀の、鎧のような「ナニカ」があつた。

周辺は奇妙な機材やコードで溢れており、氣のせいでも無ければ化学薬品の匂いや何かが焦げているような音すら聞こえる。

和風な部屋には似つかわしく無い物が、その部屋には揃い過ぎていた。

そして数々の計器の中に埋もれるよつて、1人の少女が何かをしている。

その少女、篠ノ之 束は千冬に気が付くと、にへら、と頬を緩めた。

「ちーちゃん」

「・・・何を、しているんだ? 束」

「え、これ? うふふ、まだ内緒だよん

「ヤーヤと、悪戯を仕掛けている最中の子供の顔で束が告げる。

千冬はそれに対しても、さりげなく顔を躊躇める。

何故なら今の束の顔は、どんなことをやらかす時特有の物だったからだ。

「うーん、でも私これ乗れないしなあ・・・そだ。ねえねえ、手伝つてよ、ちーちゃん」

二
よ
せ
ん

千冬のアイアンクローリーにバタバタと悶える束、それを無視しながら千冬は部屋の真ん中で鎮座する無骨な鎧のような「ナニカ」を見上げる。

鋭く
目を細めて・・・

「……で、束。コレは何だ？」

「え？ うーん、まだ名前とかは決めて無いんだけどねえ・・・と
りあえず・・・」

千冬のアイアンクローフからしつと逃れて、束は楽しそうに白銀の「ナニカ」を見上げる。

まだ誰も知らない、世界で2人しか知らない「ナニカ」を。
むふふと笑つて、束は告げる。

「『白騎士』ってのは、どうかなあ？」

その時の束の顔を、この後、千冬は生涯忘れないことになる。
何故ならそれは、運命の瞬間だったのだから。

過去編：「運命のクリスマス」（後書き）

篠ノ之 楓：

懐かしいなあ、いつのクリスマスだっけ。

あの頃はまだ身体が弱くて、ほとんど寝てばかりだったけど……。

篠ノ之 篓：

そう、だつたな……。

篠ノ之 束：

あの頃は篠ちゃんも「お姉ちゃん、お姉ちゃん」つてお姉ちゃんの後をついてくれてたんだけどねえ、懐かしいなあ。

篠ノ之 篓：

う、嘘を言わないでください！

と言つか、何でいる……！？

篠ノ之 束：

篠ちゃん、ひどい！

ねえ、楓ちゃん、酷いよねえ！？

篠ノ之 楓：

え、ええええ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293z/>

インフィニット・ストラatos 黒き叡智

2011年12月25日18時07分発行